

高原町文化財調査報告書 第12集

う つ ぎ  
宇 津 木 遺 跡

—狭野地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—

2004. 3

みや ざき けん にし もろ かた ぐん  
宮 崎 県 西 諸 県 郡

たか はる ちょう  
高 原 町 教 育 委 員 会

う つ ぎ  
宇 津 木 遺 跡

—狭野地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—

2004. 3

みや ざき けん にし もろ かた ぐん  
宮 崎 県 西 諸 県 郡

たか はる ちょう  
高 原 町 教 育 委 員 会



C区SR1検出状況



C区緑釉陶器出土状況



C区須恵器出土状況





## 序 文

高原町は、霊峰高千穂峰をいただく、神話と歴史に溢れた町です。特に「高原」という地名は、「高天原」から転化したと言われており、町内各地に神話にまつわる史跡があります。又、高原町は人皇初代であられる神武天皇の御降誕及び若年期に住まいされたという伝承を持つ場所としても名高い町であります。

当教育委員会では、平成11年度から、狭野地区圃場整備事業に伴い、榑粉山遺跡及び宇津木遺跡の発掘調査を実施しました。榑粉山遺跡については前回の報告書にて報告済であります。今回は宇津木遺跡の実績について報告します。

遺跡は、榑粉山遺跡に較べると、遺構・遺物の量こそ少ないものの、中世の陥し穴や古代の屋外炉等の遺構の他、土師器や縄文土器などが出土しました。特に須恵器の壺・緑釉陶器につきましては、高原町としても初めての出土です。

今回の調査で得た様々な成果が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助になることを期待いたします。

最後になりましたが、この発掘調査にあたり、御理解をいただきました土地所有者の方々をはじめ、御指導・御援助をいただきました関係諸機関並びに地元の方々に、心から御礼を申し上げます。

平成16年3月

高原町教育委員会  
教育長 外山方圀

## 例 言

1. 本報告書は、平成13・14年度に実施した、狭野地区における県営圃場整備事業(担い手育成型)に伴う宇津木遺跡の発掘調査報告書である。
2. 当遺跡は、宮崎県西諸県郡高原町大字蒲牟田字宇津木に所在する。
3. 当遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成は、西諸県農林振興局の委託を受けて、高原町教育委員会が主体となって実施した。
4. 当遺跡の発掘調査については、宮崎県教委文化課・宮崎県埋蔵文化財センターの指導・助言を受けて、高原町教育委員会社会教育課主事の大學康宏が実施した。第1次調査を平成14年1月16日から平成14年3月29日まで、第2次調査を平成14年5月28日から平成14年10月18日まで実施した。又、整理作業については、平成14～15年度に実施した。
5. 本報告書で使用している図面・写真等については、発掘調査における地形・遺構図・遺物分布図等全ての測量並びにそれら測量図のデジタルトレースについては、有限会社ジパングサーベイに全て委託した。その他の遺物実測及び遺物のデジタルトレースについては大學が作成した。  
又、本報告書に掲載している写真については、全て大學が撮影した。
6. 本報告書に掲載されている遺構は、SC：土坑(陥し穴・その他の土坑)・SR：石組炉として略した。
7. 本書の執筆・編集は大學が行った。
8. 本報告書で用いた標高は海拔高であり、方位は全て磁北である。
9. 発掘調査に伴って出土した遺物や図面・写真成果などは、高原町教育委員会で保管している。
10. 附編として掲載している自然科学分析については、株式会社古環境研究所に委託した。

# 本文目次

序文	
例言	
本文目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	

第I章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	1
第3節 宇津木遺跡の位置・歴史及び高原町の歴史的環境	4
1 宇津木遺跡の位置・歴史	4
2 高原町の歴史的環境	6
第4節 調査の概要及び経過	12
1 調査の概要	12
2 調査の経過	15
第5節 報告書の編集方法	16
第6節 宇津木遺跡の基本層序	18
第II章 高原スコリア直下面での遺構・遺物	23
第1節 はじめに	23
第2節 各区の出土遺構	24
1 A区の出土遺構	24
2 B区の出土遺構	24
3 C区の出土遺構	27
第III章 第IV層での遺構・遺物	35
第1節 はじめに	35
第2節 各区の出土遺構・遺物	36
1 A区の出土遺構・遺物	36
2 B区の出土遺構・遺物	37
3 C区の出土遺構・遺物	38
(1) C区の遺構及び遺構内出土遺物	40
(2) C区遺構検出面での出土遺物	51
第IV章 まとめ	64
第1節 陥し穴遺構について	64

1	はじめに	64
2	中世陥し穴遺構の類例	64
3	逆茂木の状況について	65
4	陥し穴の作成方法及び設置方法	65
5	陥し穴の年代について	65
6	陥し穴附随遺構について	66
第2節	石組炉遺構について	66
1	遺構の概要	66
2	古代石組炉遺構の類例について	66
3	遺構の年代	67
第3節	調査区出土の土師器・須恵器について	67
第4節	宇津木遺跡の性格について	69
第5節	各火山灰の降下年代について	70
1	霧島大谷4～6テフラ(高原スコリア)	70
2	霧島大谷1～3テフラ	71
3	霧島山噴火にかかる文献	71
附編	自然科学分析調査報告書	79
I	宇津木遺跡における放射性炭素年代測定	81
II	宇津木遺跡における植物珪酸体分析	83

## 挿 図 目 次

第1図	宇津木遺跡の位置及び周辺部遺跡位置図	2
第2図	宇津木遺跡詳細位置図	3
第3図	宇津木遺跡周辺旧地形図	5
第4図	宇津木遺跡現況地形図及び調査区割り図	13
第5図	宇津木遺跡標準土層図	19
第6図	宇津木遺跡高原スコリア直下面地形図	21
第7図	宇津木遺跡A区高原スコリア直下面地形図	23
第8図	宇津木遺跡A区SC1実測図	25
第9図	宇津木遺跡A区SC2実測図	26
第10図	宇津木遺跡B区高原スコリア直下面地形図	27
第11図	宇津木遺跡C区高原スコリア直下面地形図	28
第12図	宇津木遺跡C区SC3実測図	29
第13図	宇津木遺跡C区SC4実測図	30
第14図	宇津木遺跡第IV層上面地形図	33
第15図	宇津木遺跡A区第IV層上面地形図	35



第16図	宇津木遺跡A区第IV層上面出土遺物分布図	36
第17図	宇津木遺跡A区第IV層上面出土遺物実測図	37
第18図	宇津木遺跡B区第IV層上面地形図	38
第19図	宇津木遺跡C区第IV層上面地形図	39
第20図	宇津木遺跡C区SR1実測図	41
第21図	宇津木遺跡C区SR1出土土器分布図	42
第22図	宇津木遺跡C区SR1及び周辺部出土土器分布図	42
第23図	宇津木遺跡C区SR1出土遺物実測図(1)	43
第24図	宇津木遺跡C区SR1出土遺物実測図(2)	44
第25図	宇津木遺跡C区SR2実測図	45
第26図	宇津木遺跡C区SC5実測図	46
第27図	宇津木遺跡C区SC6実測図	47
第28図	宇津木遺跡C区炭化木群実測図	49
第29図	宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物分布図	53
第30図	宇津木遺跡C区第IV層上面・掘り下げ部分出土遺物分布図	55
第31図	宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物分布図(拡大図1)	57
第32図	宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(1)	57
第33図	宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(2)	58
第34図	宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(北東部・20)	58
第35図	宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(北東部)	59
第36図	宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(3)	59
第37図	宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(4)	60
第38図	宇津木遺跡C区第IV層上面出土須恵器実測図	60
第39図	宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(5)	61

## 表 目 次

表1	宇津木遺跡出土土器観察表(1)	62
表2	宇津木遺跡出土遺物観察表(2)	63
表3	宇津木遺跡出土石器・鉄器観察表	63

## 図 版 目 次

卷頭図版	C区SR1・緑釉陶器・須恵器出土状況	
図版1	遺跡遠景・A区調査前状況・A区表土掘削状況	91
図版2	A区掘削状況・SC1検出状況	92

図版3	A区SC1埋土半截～完掘	93
図版4	A区SC1土坑半截～逆茂木状況	94
図版5	A区SC1完掘・SC2検出状況	95
図版6	A区SC2埋土堆積～土坑半截状況	96
図版7	A区SC2土坑半截～完掘状況	97
図版8	A区第IV層掘削・精査状況	98
図版9	A区第IV層土器出土・調査区完掘状況	99
図版10	A区土層・B区表土掘削状況	100
図版11	B区高原スコリア直下～第IV層精査状況	101
図版12	C区調査前～表土掘削・精査状況	102
図版13	C区高原スコリア直下面・SC3検出状況	103
図版14	C区SC埋土半截～土坑半截状況	104
図版15	C区SC3完掘・SC4埋土半截状況	105
図版16	C区SC2埋土半截～完掘状況	106
図版17	C区第IV層掘削・SR1検出状況	107
図版18	C区SR1検出・遺構内遺物出土状況	108
図版19	C区SR1遺構内遺物出土・完掘状況	109
図版20	C区SR2検出～埋土堆積状況	110
図版21	C区SR2完掘・SC5検出・埋土堆積状況	111
図版22	C区SC5完掘・SC6検出・埋土堆積状況	112
図版23	C区SC6完掘・炭化木群検出状況	113
図版24	C区第IV層上面土器出土状況	114
図版25	C区第IV層上面土器出土状況	115
図版26	C区第IV層上面土器出土状況	116
図版27	C区遺物出土・完掘状況	117
図版28	C区完掘・土層状況	118
図版29	C区埋め戻し・遺跡出土遺物	119
図版30	遺跡出土遺物	120
図版31	遺跡出土遺物	121
図版32	遺跡出土遺物	122

# 第 I 章 調査の経過

## 第 1 節 調査に至る経緯

高原町は、宮崎県の南西部に位置し、東西約18km・南北10kmと東西に長く、中心部でややくびれており、面積は85.42㎡である。市街地の標高は約200m前後、町内の殆どは広大な台地とその周囲を巡る谷で占められ、そのうち山林・原野は、町域の約50%を占めている。

今回、調査の対象となった狭野地区は、高原町の南西部、霧島連山の東麓に位置している。連山から東に向かって小規模な舌状の尾根が多く伸び、尾根の間には高低差約10mの谷が巡っている。集落や田畑等は、尾根上という限定された場所に形成されている。このように、非常に起伏に富んだ地形であるため、農業経営などに支障を来していた。このため、高原町では、終戦後間もない時期から耕地整理が積極的に進められた。狭野地区においても圃場整備に関する話は平成7年度辺りから話されていたが、対象面積が広大なため、具体的に計画が成立していたわけではなかった。しかし、平成10年度に入り計画が具体化したため、町教委による試掘調査を実施した結果、事業区内で遺跡が2箇所確認された<sup>(1)</sup>。1箇所(楯粉山遺跡、調査時は狭野第3遺跡)は遺跡地図<sup>(2)</sup>に周知済であったが、もう1箇所(宇津木遺跡)については未周知であった。

その後の協議の結果、楯粉山遺跡の発掘調査が終了した<sup>(3)</sup>後に宇津木遺跡の調査に入るという取り決めが成されたが、圃場整備及び発掘調査の同意や事務処理が難航し、結局、調査が可能になったのは平成13年の12月頃であった。そのため、当初の単年度で調査を実施するという計画が遂行できなくなったため、西諸県農林振興局及び狭野土地改良区との協議の結果、調査対象区の一部を平成13年度に実施し、残りを平成14年度に実施するという事に落ち着いた。

それを受けて、平成13年度は畑2枚分、対象面積2647㎡のうち875.7㎡を発掘調査し、引き続き残りの畑3枚分、対象面積3002㎡のうち1368.9㎡を発掘調査した。

なお、遺物整理については、平成14年度の調査終了後から実施している。

(1) 大 學 康 宏 2001「町内遺跡Ⅰ」『高原町文化財調査報告書』第8集 高原町教委

(2) 大 學 康 宏 1998「高原町遺跡詳細分布調査報告書」『高原町文化財調査報告書』第3集 高原町教委

(3) 大 學 康 宏 2003「楯粉山遺跡～古代遺構・遺物編～」『高原町文化財調査報告書』第10集 高原町教委

## 第 2 節 調 査 組 織

○調査主体 高原町教育委員会

教 育 長

正入木 久 男(～平成14年1月)

外 山 方 圀(平成14年1月～)

社会教育課 課 長

久保田 芳 人(～平成13年度)

境 和 彦(平成14年度)

黒 木 嘉 民(平成15年度)

係 長

温 谷 文 雄(平成13年度)

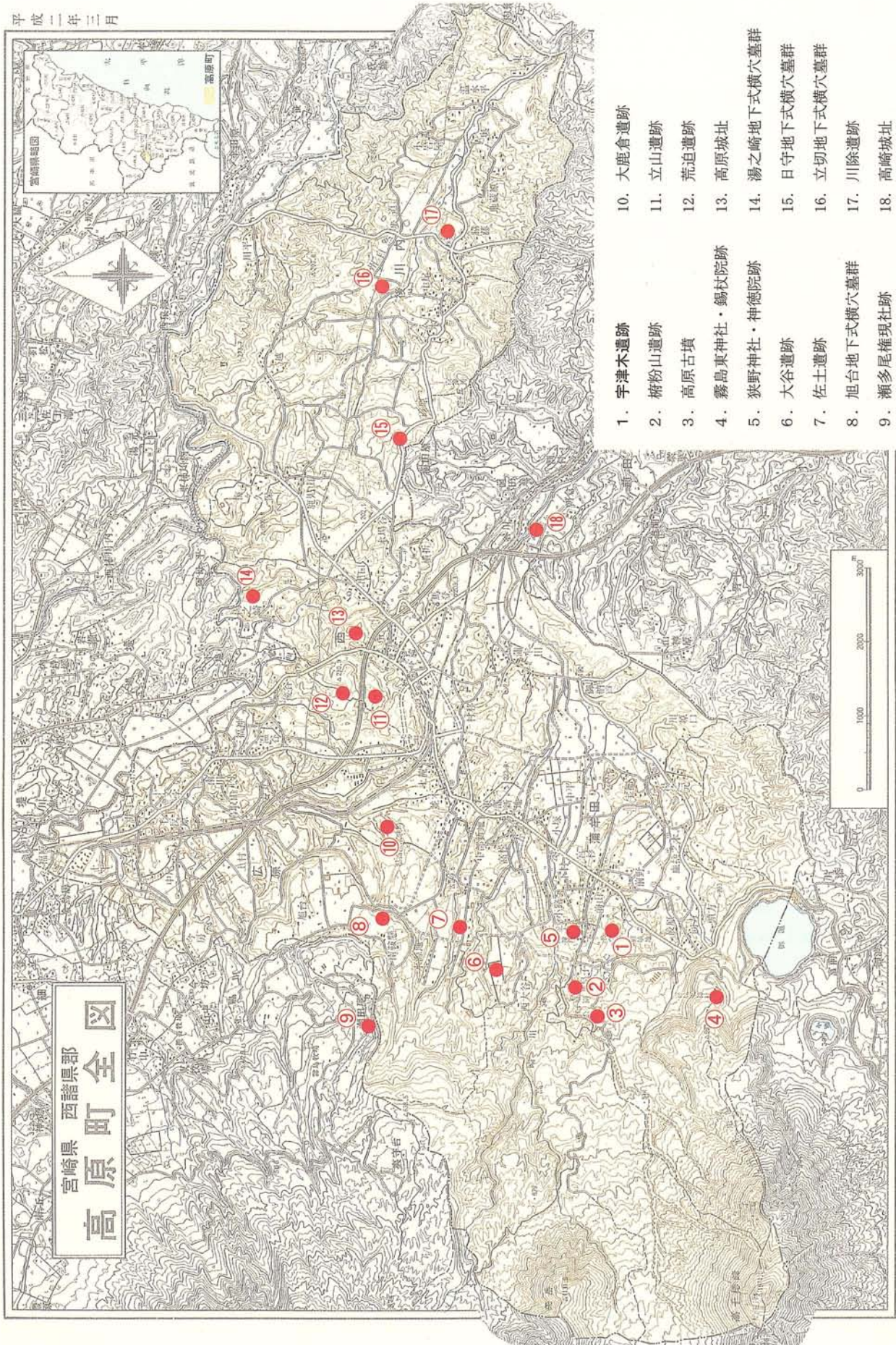
益 本 一 博(平成14年度～)

○調査員

社会教育課 主 事

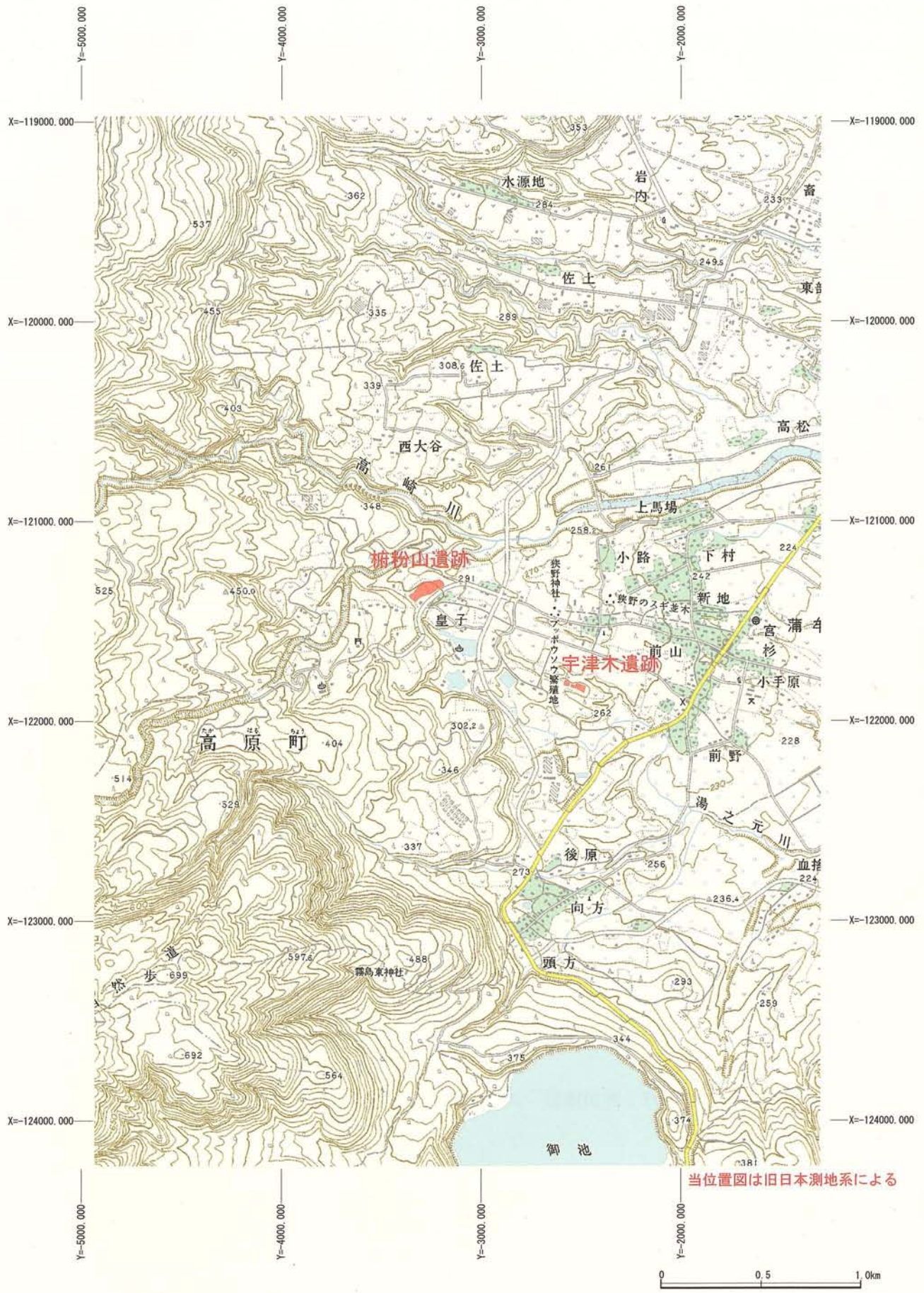
大 學 康 宏





第1図 宇津木遺跡の位置及び周辺部遺跡位置図





第2図 宇津木遺跡詳細位置図

○作業員

(平成13年度)

発掘作業員 大迫為男 大迫テルヨ 岡元一 小野信夫 川畑英春 久保田カツ子  
黒田修昭 黒田妙子 高原實 高原洋子 坂口光子 坂口由久  
下村重成 大鼓重雄 中馬和子 寺坂ミキ 寺坂安美 広田シズ子  
丸山妙子 山口江美子 山本万千子 横山悌二

整理作業員 外菌チドル 三角園榮子 宮田信子

(平成14年度)

発掘作業員 大迫為男 大迫テルヨ 岡元一 川畑英春 久保田カツ子 黒田修昭  
黒田妙子 高原實 高原洋子 坂口光子 坂口由久 下村重成  
寺坂ミキ 寺坂安美 広田シズ子 広田毅 丸山妙子 山口江美子  
横山悌二

整理作業員 外菌チドル 三角園榮子 宮田信子

(平成15年度)

整理作業員 三角園榮子 宮田信子

○調査区内測量、遺構遺物実測・遺構トレース

有限会社ジパングサーベイ

赤塚光一 高佐裕一 米久田真二 中西浩二

○自然科学分析

株式会社古環境研究所

杉山真二 堀口譲

○調査指導

宮崎県教育委員会文化課

飯田博之

宮崎県埋蔵文化財センター

柳田宏一

○調査協力

事業側

宮崎県西諸県農林振興局

農地整備課

主 査 盛永美喜男(～平成13年度)

谷口司(平成14年度～)

狭野土地改良組合

理事長 安田時弘

理 事 下村嘉宏 反田吉巳 新地和廣 岩元茂明

日高鉄男 坂田正嗣 外村善昭 寺前省二

高原町農村整備課

課 長 亀田光二

係 長 氏益幸生(～平成14年度)

黒木美利(平成15年度)

技 師 中屋敷一郎(～平成13年度)

田中伸一郎(平成14年度～)

地権者

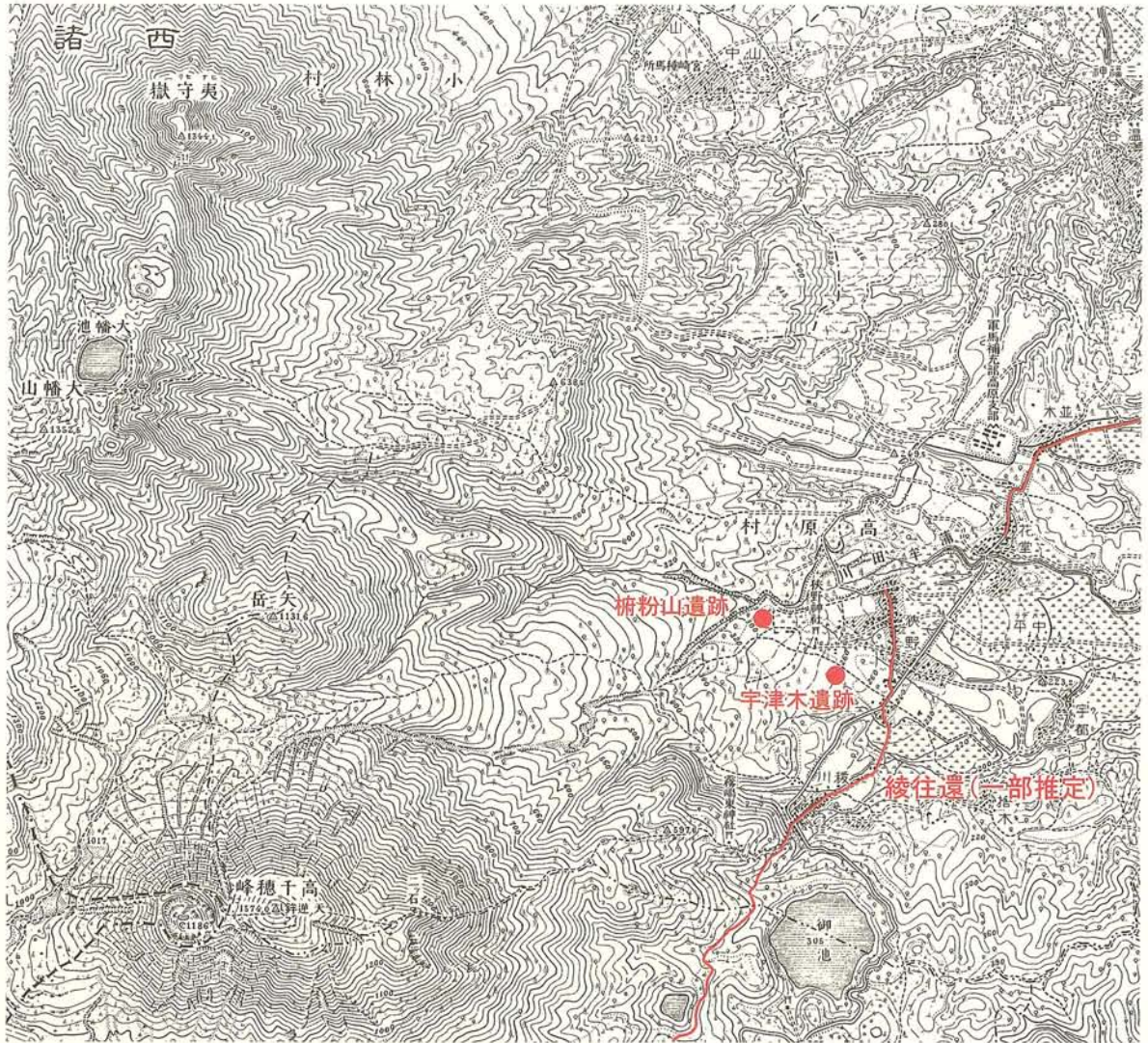
大迫重行 神田橋裕 久保田朝治 久保田芳人 日高実

### 第3節 宇津木遺跡の位置・歴史及び高原町の歴史的環境(第1～3図)

#### 1 遺跡の位置・歴史

宇津木遺跡は、高原町市街地の西南西、霧島山から続く舌状の尾根上に立地している。以





第3図 宇津木遺跡周辺旧地形図(明治37年大日本帝国陸地測量部作成)

前は小高い山があり、そこから西に流れる舌状の緩斜面であったが、終戦後の開拓に伴い、大規模な地形変更が行われた。しかし、調査区そのものは大きな変更は加えられていない。

当遺跡が所在している宇津木地区については、その具体的な歴史は判別していない。町内の岩元家文書『社方含蔵帳』には、

○蒲牟田村山野うつき

切明屋敷八ヶ所 五反六畦

右申出候通少も別儀無御座候右山野御用地之外何そ脇々障=罷成所=無御座候間願之通被仰付被下候様=御披露奉願候以上

(元禄十二年)卯二月六日 高原噺

長浜勘兵衛 印

同 村田外記 印

同 黒木治部之介 印

同 丸山源太夫 印

高原  
御地頭所

など、複数の記事が見られる。それによると、霧島東御在所両所権現社(現霧島東神社)の社人が新たに開拓し、領有した土地である事がわかる。又、明治37年に大日本帝国陸地測量部が作成した5万分の1地形図を見ると、霧島山から続く緩斜面である事がわかる。

## 2 高原町の歴史的環境

高原は、後ろに高千穂峰がそびえている事もあって、以前から天孫降臨の地として認識されていたようである。江戸時代末期に編纂された『三国名勝図會』<sup>(1)</sup>には、

土俗傳へ云、當邑を高原と號するは高天原の略称なりと、凡日向国内此辺は、神代の皇都に係り、今に都島都島は今の都城、高城などといへる地名残るも此が為にて、此地、都島と接し、平砥曠邈、土壤膏腴、土俗の伝亦従ふべし、(後略)

とある。そしてその伝承に沿うかのように山頂には「天の逆鉾」が立てられている。立てられたのは江戸時代辺りと推定されるが、詳細は不明である。

又、高原は、神武天皇御降誕の地としても名高い場所である。『日本書紀』にある神武天皇の幼名「狭野尊」が当町の狭野地区を指しているというのが主な根拠であるが、江戸時代半ばから末期にかけての神社関連の古文書の中に複数の地形を挙げて神武天皇の『聖蹟』としている。ただ、具体的な説明はなく、現在説明されている神武天皇関連の説明の大筋は『三国名勝図會』に依っている。伝承では、いわゆる東征までこの地で暮らしたとされている。

高千穂峰は、古くは「霧嶋山」あるいは「鉾峰」と呼称しており、主に北部の小林方面から南東部の都城盆地の辺りで山岳信仰の対象として崇拝されてきた。前述の地には、華立(霧島山の遙拝所)が数多く存在する。又、長門本『平家物語』<sup>(2)</sup>の、藤原成経が治承元年(1177)に鬼界島へ流罪になるくだりで、霧島山に触れた記述があるが、そこでは霧島山を、

彼庄内にあさくら野と云所に、ひとつの峯高くそびえて、煙りたえせぬ所あり、日本最初の峯、霧島のだけと號す、金峰山、しやかのだけ、富士の高根よりも、最初の峯なるが故に、名付て最初の峯といふ、六所権現の靈地也、

と表現している。長門本『平家物語』が完成したと思われる中世辺りには、霧島山は靈山として認識されていたようである。

しかし、霧島山の信仰等の実体については、史料も少なく、未だ不明の点が多い。まず、古代の文献を見てみると、『続日本後紀』「承和四年八月壬辰朔」条<sup>(3)</sup>に、承和4年(837)に日向国の都農神・妻神・江田神と共に官社に列せられ、従五位上の位が与えられた、とある。『日本三代実録』「天安二年十月己酉」条<sup>(4)</sup>には、前記に続き、天安2年(858)に従四位下に昇格した、とある。この時は「霧島岑神」と称されているのみで、具体的な場所を示しているわけではなく、山そのものを示しているものと思われる。

続いて、延長5年(927)に成立した『延喜式』「十神祇」<sup>(5)</sup>には、諸縣郡一座として霧嶋神社の名が挙がっている。周辺神社の社記には、当時の社殿は高千穂峰と中岳の鞍部の迫門丘(瀬多尾・せたお)にあったと云われている。

このように、位を授けられた9世紀中頃には山がある程度神格化され、10世紀初頭には、規模は不明ながらも何某かの拝殿のような施設が存在した事を窺わせる。それと相俟って山



岳修行の場としても認識されるようになったと思われる。承平5年(935)頃に成立したとされる『倭名類聚抄』<sup>(6)</sup>には、「諸縣(牟良加多)郡」のうちとして、「財部・縣田・菰生(宇利布乃)・山鹿・穆佐・八代・大田・春野」の8郷が挙げられている。この内、財部は現在の高鍋町、菰生は現在の宮崎市瓜生野、穆佐は高岡町穆佐と思われる。この8郷のうち、当地方を指しているのは、現在のところ春野郷という説が有力である<sup>(7)</sup>。

文献に残る最古の霧島山での修行者は、比叡山の僧侶性空である。性空は延喜10年(910)に京都で生まれ、36歳で比叡山延暦寺の慈恵大師良源に師事して出家、九州を中心に修行し、康保3年(966)に播磨国書写山に円教寺を創建した。『扶桑略記』<sup>(8)</sup>によると、36歳で出家後、数年間霧島山に籠もり法華経読誦の修行を行った。その後肥前国背振山へ修行の場を移したとある。霧島山周辺の寺社も、性空を開祖或いは中興の祖としている所が殆どである。しかし、どの書物も「霧嶋」と記しているのみで、具体的な場所は不明である。なお、高千穂峰の東南部にある御池と呼ばれる火口湖があるが、『三国名勝図會』によると、当時、御池には、松・軀瀬(むくらせ)・皇子(おうじ)・劔崎(つるぎさき)・刈茅(かるかや)・柳・護摩壇(ごまんたん)、7つの港があり、そのうち護摩壇港の上には、性空上人が護摩行を行ったという伝承がある。

このように、歴史のその殆どの時期が深い山林地帯であったため、近年に至るまで連綿と続く歴史は無いに等しい。実際に史料に登場するのは16世紀以降で、霧島山の噴火による壊滅も相俟って、あらゆる文化形成面については、近世以降に成立したと推測される。

次に遺跡の成果を以て当地の状況を推測する。

まず、高原町に関してのみ言えば、旧石器時代の遺跡は確認されていない。現在のところ確認できた最も古い遺跡は縄文時代前期である。高原町の東側の後川内地区に位置する川除遺跡では、古代の畠遺構を構成する土層から曾畑式及び轟B式土器が数点確認された<sup>(9)</sup>。又、大谷遺跡では、表採資料の中に曾畑式が数点確認された<sup>(10)</sup>。現在のところ、この2遺跡のみである。縄文時代早期及びそれ以前の遺跡については、約6,300年前に屋久島北側の鬼界カルデラより噴火したアカホヤ火山灰と、ほぼ同時期に古高千穂峰(高千穂峰の南東側・殆ど埋没)より噴火したウシノスネ上・下層<sup>(11)</sup>によって、縄文時代中期以降の遺跡と分けられており、発掘調査で縄文時代早期以前の文化層まで辿り着く事ができないのが現状である。又、旧石器時代近辺については、さらに約25,000年前に始良カルデラより噴火したAT火山灰(シラス)をはじめ、高原町近辺でしか見られない霧島山系の火山灰が台地を厚く覆っているため、調査が不可能な状態にある。

縄文時代中期になると、徐々に遺跡が増加する。昭和43年に発掘調査され、高原町で初めて縄文・弥生時代の遺物が層位的に確認された高原畜産高校遺跡<sup>(12)</sup>や榊粉山遺跡<sup>(13)</sup>などで阿高式土器が出土した。

縄文時代中期末から後期に入ると、遺跡の数(というよりも遺物量)が爆発的に増大する。高原町で発見された遺跡の殆どが縄文時代後期の土器を含んでいるといっても過言ではない。主な遺跡としては、前述した高原畜産高校遺跡、正式な発掘調査を踏まえてはいないが莫大な表採資料を抱える大谷遺跡<sup>(10)</sup><sup>(14)</sup>や佐土遺跡<sup>(15)</sup>・榊粉山遺跡<sup>(13)</sup>などである。しかし、その殆どが包含層からの出土であり、遺構は検出されていない。

ところが、縄文時代晩期頃から遺跡数が急激に減少する。特に、弥生時代の遺跡は殆ど見られない。理由の一つに挙げられるのは、調査数の少なさによる。特に高原町では開発が早い時期に行われたため、主要な遺跡の殆どが調査の機会なく破壊されてしまっている。弥生

時代から古墳時代にかけての集落遺跡が調査されたのは、立山遺跡・荒迫遺跡のみである。このうち、荒迫遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての住居址や掘立柱建物・土坑・溝などの遺構が検出された<sup>(16)</sup>。しかし、遺構の検出状況から密集した集落とは言い難い。又、荒迫遺跡の、高速道路を挟んだ南側に位置する立山遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡が30基近く検出され、さらに軽石製の炉や埋甕などの住居跡付随遺構が検出された<sup>(17)</sup>。

高原町における古墳時代の遺跡は、集落遺跡よりも地下式横穴墓の方が著名である。高原町では、これまでに4群107基が検出されている。その内訳は、湯之崎地下式横穴墓群1基・旭台地下式横穴墓群13基・日守地下式横穴墓群31基・立切地下式横穴墓群72基である。

湯之崎地下式横穴墓は、昭和47年11月に整地作業中に発見・調査された。1基のみの検出だったが、4体程の埋葬人骨が見られた他、刀子・鉄鏃・鉈など11点の副葬品が見られた<sup>(18)</sup>。

旭台地下式横穴墓群は、昭和50年12月に土木作業中の崩落により発見・調査されたが、殆どが天井部落下による損傷を受けるなど残存状況はあまり良くないものの、9号墓では鉈・鉄釧が出土した他、全体として約100点近い鉄製副葬品が出土した<sup>(19)</sup>。後の研究により、埋葬位置から直線配置埋葬のA群、円形配置のB～D群に分類され、他群に較べてのA群の優位性が指摘されている<sup>(20)</sup>。又、調査以外にも地下式横穴墓が発見されたという話もあり、実際はより広範囲に渡った群と推測される。

日守地下式横穴墓群は、高原町及び隣の北諸県郡高崎町大字前田字仮屋尾に広がる地下式横穴墓群である。高崎町側では、昭和44年の九州縦貫自動車道に伴う緊急分布調査や、昭和44・45年の採土作業に伴って9基発見されており、群が認識されていたが、高原町側においては、昭和54・55年に渡る採土作業により初めて発見された。発見された8基の中には、束柱のレリーフの他、シラスを敷いた屍床や塗朱痕・天井部の彩色線文などが見られた<sup>(21)</sup>。続く昭和56年に隣接地で確認調査した結果、10基の地下式横穴墓・土器溜りなどが検出された<sup>(22)</sup>。又、平成9年2月には道路を挟んだ南側で2基検出され、蛇行剣や異形鉄鏃等が出土した<sup>(23)</sup>。平成10・11年には天理大学考古学研究室による電気・レーダー探査が行われ、空洞反応等を利用した墳丘復元や玄室内の未発掘デジタルカメラ撮影などが試みられた<sup>(24)</sup>。

立切地下式横穴墓群は、昭和63年12月に圃場整備中に発見され、2箇年に渡り発掘調査が行われた結果、72基というこれまでにない量の地下式横穴墓が検出された。群内には赤色顔料を使用して垂木や棟木を表現したものが多く見られた他、レリーフ状の束柱なども見られた。又、埋葬人骨77体、刀剣や刀子の他、線刻の入った鉄鏃・鉈・鉄先・鉄斧・毛抜状鉄器等の鉄製副葬品277点、琥珀製小玉や管玉・白玉・鉄釧・イモガイ製腕輪等の装身具123点など、副葬品も豊富に出土した。なお、地下式横穴墓に伴わない土器溜りが2箇所検出され、墓前祭の可能性が指摘されている<sup>(25)</sup>。

これ以後、遺跡の発見例は再び急激に減少し、地下式横穴墓の下限である6世紀前半から9世紀に至るまでは歴史的に全くの空白となる。丁度その時期に当たる遺跡も発見されていないため、想像の域を出ないが、当地域は古代朝廷において神格化された「霧嶋岑神」の住まいである霧島山の麓に位置している事から、この時期はすでに人の生活を受け入れられないような山林地帯だったのではないだろうか。

しかし、9世紀に入ると、現在の町域の数箇所ですべて同時に開墾が行われている。住居跡などはあまり検出されないのに対し、畠と思われる畝状遺構が多数検出されている。この時期の遺跡のうち発掘調査が行われたのは、荒迫遺跡・立山遺跡・大鹿倉遺跡・川除遺跡・大谷遺跡・梶粉山遺跡だが、この6遺跡のうち畝状遺構が検出されたのは、荒迫遺跡・川除

遺跡・大谷遺跡<sup>(25)</sup>・榑粉山遺跡の4遺跡である<sup>(27)</sup>。このうち、最も広範囲で検出されたのが荒迫遺跡である。しかし、長期間に渡って耕作されたのではなく、9世紀後半から10世紀にかけてのごく数年間に使用されたと推測されている。又、栽培作物については未だ判明しておらず、川除遺跡や榑粉山遺跡で若干のイネの痕跡が見られた程度で、大方は根菜類の可能性が高い<sup>(16)</sup>。

この畠が使用されなくなった後は、ススキなどが生息する野原のような状態になったと思われる。その後はほぼ山として認識されていたようで、鎌倉時代から中世にかけては、荒迫遺跡・大鹿倉遺跡<sup>(28)</sup>・榑粉山遺跡<sup>(29)</sup>・今回発掘調査した宇津木遺跡などで狩猟用と見られる陥し穴が数多く検出されている。ただ、かなり散発的あるいは不規則に作られているため、狩猟方法や対象動物などについては不明である。

中世では、高原は殆ど山岳修験の道場となる程山林化していたため、史料に登場する事は殆どないが、現在の町域は三俣院あるいは真幸院に含まれていたと推定される。三俣院は島津庄の一円庄の一つで、現在の宮崎県都城市・高城町・山之口町辺りと考えられている。又、真幸院は同じく島津庄の寄郡の一つで、現在の宮崎県えびの市を中心として、小林市・野尻町、さらに鹿児島県吉松町などを含んだ範囲と考えられている。島津庄は、万寿年間(1024～28)に太宰大監の平季基が藤原頼通に寄進して成立した荘園である。当初は島津院のみであったが、隣接地を次々に拡大し、日向・大隅・薩摩3国にまたがる国内最大規模の摂関家荘園となった。その後、摂関家より平氏に支配権が移り、さらに平氏滅亡後は鎌倉幕府により惟宗忠久(後の島津忠久)が島津庄下司職、さらに地頭職に補任されている<sup>(7)</sup>。

木脇家文書『三俣院記』<sup>(30)</sup>や高原町富田家文書『劔之巻』(天正20年奥書・嘉永4年書写)<sup>(31)</sup>等から高原は三俣院の境界に位置していたと思われる。同じく木脇家文書『真幸院記』<sup>(32)</sup>では、真幸院の境界を小林としている。単純に考えれば、高原は三俣院に属していたと思われるのだが、実際は、小林の内に高原が含まれていると記している古文書も存在し、小林や高原の境界そのものが不明確なのが現状である。

高原の中世における支配体制であるが、町内永濱家文書『高原所系図壺冊』<sup>(33)</sup>や『三俣院記』等を参考にしてみると、まず『高原所系図壺冊』では、

- 16世紀前半は高原・江平・志和地・野々美谷・高崎は1箇所の領地
- 天文14年(1545)頃は稲津豊前が地頭となる。
- 天文20年(1551)頃から北原勘解由次官の領地となり、白坂式部太夫が地頭となる。
- 元亀元年(1570)に伊東氏が北原氏を攻め、高原を領する。
- 元亀3年(1572)に伊東衆の九岐因幡守が地頭となる。
- 天正3年(1575)に島津氏が伊東氏より高原を奪い取る。

となっている。『高原所系図壺冊』は天保4年(1833)に旧書を改めたとされている古文書だが、中世の部分は不明確な点が多い。

一方、『三俣院記』「的野寺社屋敷竿次帳写」によると、

- 天文年間(1532～54)以前は、税所右衛門が領主であったが、真幸院北原氏家臣である白坂下総守に追討され、白坂氏の領地となる。
- 永禄年間(1558～69)に伊東氏が領有し、同勘解由を高原城主とする。
- 天正4年(1576)に島津氏が領有する。

とある。

これから類推すると、少なくとも16世紀に入ってから、(税所氏→)北原氏→伊東氏→島津氏という支配体制の変化が確認できる。ちなみに、『真幸院記』によると、北原氏は応永年間(1394～1428)辺りから真幸院を領有したが、永禄5年(1562)、真幸院領主の北原兼守死去

に伴う家督継承問題に乗じて伊東義祐が領有する事となった。又、都城方面は北郷氏と伊東氏が争っている事から、当時の高原は、伊東氏・北原氏・北郷氏などの各領主の勢力争いにより、帰属先が頻繁に変更していったものと思われる。

又、高原は、日向国と大隅国の国府付近を結ぶ要衝である事から、日向中部の伊東氏・真幸院の北原氏・薩摩国の島津氏の3氏による争いが続き、現在の市街地に位置する高原城は、3氏の勢力争いの舞台となった。16世紀半ばに入って伊東氏の領地となったが、天正4年(1576)8月に、島津義久・義弘ら島津勢が攻め落とすと共に周辺諸城も落城し、島津氏の領地となった<sup>(34)</sup>。豊臣秀吉の九州平定以後、島津久保、次いで島津義弘の領地となるなど変動するが、以後薩摩藩領として定着する。その後領内は地頭制が敷かれ、地頭については鹿児島から派遣された。歴代の地頭については『高原所系図壺冊』に詳しい。

高原の領域は、地頭制施行当初は麓(高原)村・蒲牟田村・入木(後川内)村(以上、現高原町)、前田村・大牟田村・笛水村・江平村(以上、現高崎町)と推定されるが、延宝8年(1680)の領域変更に伴い、前田・大牟田・江平が高崎郷として独立する代わりに紙屋郷水流村(現都城市)・小林郷広原村(現高原町大字広原)が編入、新しく5村で構成され、幕末に到る。『高原所系図壺冊』には、度々「無地頭」という記述が見られ、地頭不在を窺わせる。さらに、19世紀前半頃には高原郷そのものに地頭が派遣されるのではなく、周辺の数郷を地頭1人に一括支配させる居地頭体制が行われた。『高原所系図壺冊』によると、当初は小林を中心に周辺の5ヶ郷(高原・加久藤・飯野・須木・野尻)を併せた6ヶ郷請持体制となったが、その後、小林に高原・須木・野尻・高崎を併せた5ヶ郷請持に再編成された。この前半の6ヶ郷・後半の5ヶ郷請持体制が後の西諸県郡の基礎に繋がるものと思われる。

高原郷には、南九州で著名な薩摩街道や肥後街道からは離れているが、鹿児島城下から綾郷(宮崎県東諸県郡綾町)に至るまでの綾往還が郷内を通過していた。ルートは鹿児島城下から国分・霧島を通過して小池・御池沿いを廻りながら東御在所両所権現社の参道に出るものである。文化9年(1812)に日向国に測量に入った伊能忠敬一行も東御在所の麓にある祓川集落より測量を開始し、狭野神徳院に宿泊、麓村を測量しながら通過し、野尻郷との境である猿瀬越まで測量を行った事が『高原所系図壺冊』に記されている。

明治時代に入り、明治16年(1883)に宮崎県が設置されると、同年6月には北諸県郡、翌17年(1884)1月からは西諸県郡に属した。その後、明治22年(1889)の町村制施行に伴い、麓・蒲牟田・広原・後川内の4村が合併して高原村が成立、昭和9年(1934)には町制施行に伴って町に昇格し、現在に至る。

近世の高原は、前述の通り霧島山の麓に位置しているため、宗教的に非常に発展した所であった。平安時代の僧侶性空により修行場としての基礎が作られたという伝承を持ち、中世には島津氏・伊東氏による宗教施設の奪い合いや、中世における島津氏の政策決定手法の「御鬪」が行われるなど、宗教的な側面で重要視される方が多かった。特に島津氏による九州制覇の過程では、その支配方法等を霧島山の神意を問う記述が多く見られる<sup>(35)</sup>。中世から近世にかけては、「霧島六所権現」と呼ばれる、6つの寺社が大きな勢力を持つようになった。このうち、高原には、霧島東御在所両所権現社(現霧島東神社)・狭野大権現社(現狭野神社)の他、霧島山中央六所権現社(現霧島岑神社)の別当寺である瀬多尾権現社跡の計3社寺がある。

このように宗教的に重要視されている場所のため、神楽(神舞)等の民俗芸能も多く伝わる。高原には、祓川地区と狭野地区に神舞が伝承されている。祓川は毎年12月の第2、狭野は12月の第1土曜日から日曜日の早朝にかけて、夜を徹してそれぞれの地区で行われる。「大宝の



注連」と呼ばれる、願成就の際に神を勧請する道具の神籬を、御講屋(あるいは神庭)と呼ばれる祭場の裏に立て、天蓋を作り、山の神信仰にまつわるものや、天の岩戸神話に基づく舞などが行われる。両神楽とも、南九州の神楽分布圏における「霧島神舞」系統の中核に位置しており、真剣を用いたアクロバティックな舞が多いのが特徴である。周辺部の神舞が衰退あるいは消滅した現在、非常に貴重な存在となっている(36)。なお、高原の場合は、神楽を「<sup>かんごつ</sup>神事」と呼称しており、これは、同様の芸能をすべからず神楽と呼称している現状について一考を要する事を証明する名称である(37)。最近では県内神楽の包括的な研究も進み、霧島修験及び神舞と椎葉や阿蘇等の修験や神楽との共通性が指摘されている(38)。又、神舞で使用している面等は、定型化する以前の能面あるいは猿楽面のイメージを色濃く残している事が判明している(39)。

その他の民俗芸能で、著名なものに<sup>なわしろだまつり</sup>苗代田祭が挙げられる。地元では方言を用いた「ベブガハホ」と呼ばれている事が多い。「ベブ」は牛、「ハホ」は「主婦・妊婦」を表す方言である。毎年2月18日に狭野神社の本殿前で行われる予祝祈願の田遊び神事の一つである(40)。古文書により17世紀後半には祭が行われている事が判明している一方、江戸時代に使用された木牛も残存している(41)。

その他、南九州に広く分布する棒踊りや奴踊り・臼太鼓踊り(最近になり消滅(40))などの芸能の他、鹿児島県の知覧町や甑島で有名な十五夜の綱引き神事(42)などの行事も残存している。

#### 【参考文献】

- (1)原口虎雄監修 1982『三國名勝圖會』第4巻 図書出版青潮社
- (2)『宮崎県史 史料編 古代』309頁に所収
- (3)『宮崎県史 史料編 古代』136頁に所収
- (4)『宮崎県史 史料編 古代』153頁に所収
- (5)『宮崎県史 史料編 古代』187頁に所収
- (6)『宮崎県史 史料編 古代』206頁に所収
- (7)野口逸三郎監修 1997『宮崎県の地名』日本歴史地名体系46 平凡社
- (8)『宮崎県史 史料編 古代』236頁に所収
- (9)大學康宏 1999「川除遺跡」『高原町文化財調査報告書』第5集 高原町教委  
大學康宏 2003「町内遺跡Ⅲ」『高原町文化財調査報告書』第11集 高原町教委
- (10)大學康宏 1999「大谷遺跡表採縄文土器資料」『高原町文化財調査報告書』第4集 高原町教委
- (11)宮崎県総合博物館 2003『平成14年度特別企画展 霧島山の自然』図録より
- (12)石川恒太郎 1972「高原町縄文期包含層調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第16集 宮崎県教委  
日高正晴 1989「高原畜産高校遺跡」『宮崎県史 資料編 考古1』宮崎県
- (13)大學康宏 2000「榑粉山遺跡(旧遺跡名 狭野第3遺跡)」『高原町文化財調査報告書』第6集 高原町教委
- (14)横手浩二郎 1994「宮崎県西諸県郡高原町大谷遺跡表採の縄文土器」『南九州縄文通信』No.8 南九州縄文研究会
- (15)大學康宏 2003「町内遺跡Ⅲ」『高原町文化財調査報告書』第11集 高原町教委
- (16)和田理啓・久木田浩子 1998「荒迫遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第11集
- (17)宮崎県総合博物館の永友良典氏のご教示による。
- (18)石川恒太郎 1973「高原町湯ノ崎地下式古墳調査報告書」『宮崎県文化財調査報告書』第17集 宮崎県教委
- (19)石川恒太郎・日高正晴・岩永哲夫 1976「旭台地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第19集 宮崎県教委
- (20)中野和浩 1998「地下式横穴墓の群構造」『宮崎考古』第16号 宮崎考古学会
- (21)岩永哲夫 他 1980「日守地下式横穴(古墳)54-1~4号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集 宮崎県教委  
岩永哲夫 他 1981「日守地下式横穴(古墳)55-1~4号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第23集 宮崎県教委

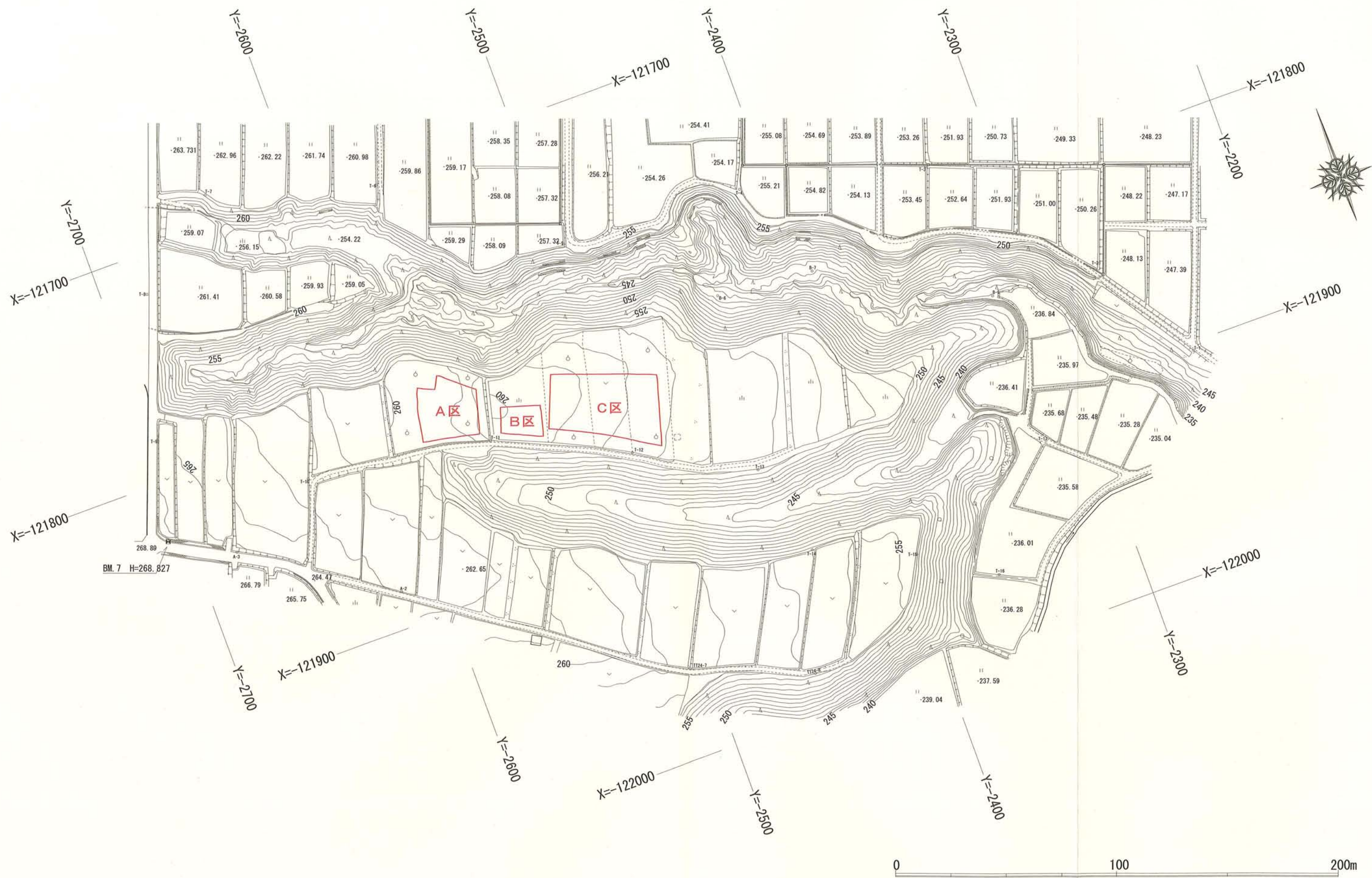
- (22)岩永哲夫 1981「日守地下式古墳群確認調査」『宮崎県文化財調査報告書』第24集 宮崎県教委
- (23)大學康宏 1999「日守地下式横穴墓群」『高原町文化財調査報告書』第4集 高原町教委
- (24)置田雅昭 2001「宮崎県高原町日守地下(立坑)式横穴墓群」『墳丘のない墓の探査研究』平成9-12(1997-2000)年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))実績報告書(補訂) 天理大学遺跡探査チーム
- (25)面高哲郎・長津宗重他 1991「立切地下式横穴墓群」『高原町文化財調査報告書』第1集 高原町教委
- (26)宮崎県教育委員会文化課編 1997「大谷遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第40集 宮崎県教委
- (27)立山遺跡については、畝状遺構が検出される土層での精査を実施していないため、詳細は不明。
- (28)調査を担当された宮崎県埋蔵文化財センターの南正覚雅士氏のご教示による。
- (29)大學康宏 2003「榑粉山遺跡—古代遺構・遺物編—」『高原町文化財調査報告書』第10集 高原町教委
- (30)『宮崎県史 史料編 中世2』93頁に所収
- (31)昭和女子大学教授の渡辺伸夫氏のご教示による。
- (32)『宮崎県史 史料編 中世2』69頁に所収
- (33)『宮崎県史 史料編 近世5』936頁に所収
- (34)大學康宏 2001「高原城跡の縄張り調査」『高原町文化財調査報告書』第8集 高原町教委
- (35)永松教 1993『狩猟民俗と修験道』167頁～ 白水社
- (36)山口保明 2000『宮崎の神楽 祈りの原質・その伝承と継承』 鈺脈社
- (37)昭和女子大学教授の渡辺伸夫氏・椎葉民俗芸能博物館副館長の永松教氏のご教示による。
- (38)椎葉民俗芸能博物館編 2002『平成14年度特別企画展 椎葉の修験道文化』図録より
- (39)元昭和女子大学教授の後藤淑氏のご教示による。
- (40)鹿児島国際大学教授の松原武実氏のご教示による。
- (41)『三国名勝図會』の狭野権現社の条項には、例祭として「二月初酉日・九月廿九日・十一月中酉日」を挙げている。一方、町内岩元家文書『神社由緒之事』(年不詳)には、
- 一 木牛 右二月初酉御祭之節入用ニ而御座候処享保年中嶽大燃之節焼失付社人増田早左衛門致彫刻候由
- という記述が見られる。この2つから推測すると、「二月初酉日」の祭が今に言う苗代田祭と考える事ができる。又、『享保年中嶽大燃之節焼失』という記述は、他の古文書から推測しても享保元年(1716)から2年(1717)にかけての新燃岳の大噴火を指している事がわかる。そう考えると、享保元年の新燃岳噴火前には、木牛及びそれを使用した祭が確実に存在した事になる。又、現存する木牛には、『文政七年』の他『岩元』『日高』など狭野権現社の社人の墨書が残る。
- (42)『宮崎県史 別編 民俗』281～292頁に所収

## 第四節 調査の概要及び経過(第4図)

### 1 調査の概要

調査区は、狭隘な舌状の台地にあるため、当初の計画では、圃場整備が行われる直前に調査を開始し、調査によって発生した廃土をそのまま谷の埋め立てに利用するという計画で進めてきた。しかし、諸般の事情によりそれが不可能になったため、廃土処理のスペースを考慮した結果、各畑地の1/2～1/3程度を目安に発掘調査を実施する事となった。各畑地を1区画と考え、平成13年度は畑地2枚をA(対象面積1634㎡のうち調査面積637.0㎡)・B区(対象面積1013㎡のうち調査面積238.7㎡)に、平成14年度は畑地3枚をまとめてC区(対象面積3002㎡のうち調査面積1368.9㎡)にそれぞれ設定して実施した。

3調査区は、A区を除けば近年の造成の影響をあまり受けていないため、享保年間の新燃岳降下火山灰から良好に残存していた。A区の旧地形の尾根上に相当する部分のみ造成を受



第4図 宇津木遺跡現況地形図及び調査区割り図



けていたため、高原スコリアは殆ど見られなかった。

調査方法としては、まず、表土から高原スコリアまでを重機で掘削し、その下を人力を中心に掘削した(一部の無遺物火山灰層は重機で掘削)。遺構及び遺物検出の精査をしたのは、榑粉山遺跡と同じく、「高原スコリア直下面(第Ⅲ層)」「橙色土上面(第Ⅳ層)」の2面である。

その結果、遺構については、第Ⅲ層から狩猟用の陥し穴がA区で2基・C区で1基の計3基、土坑がC区で1基、合計4基検出された。又、C区では、その遺構の周囲に倒木痕と思われる炭化木及び土壌化した樹木が見られた。B区では遺構は検出されなかった。遺物については、A～C区全てにおいて出土しなかった。

又、その下の第Ⅳ層からは、C区で石組炉2基、樹木根跡1基・土坑1基・ピット群・炭化木群が検出された。A・B区では遺構は見られなかった。遺物については、A・C区で古代の土師器が大量に出土した。器種構成は、土師器は坏・高台付椀・内黒土器・甕・布痕土器、須恵器は甕・壺である。又、C区からは緑釉陶器の底部断片が出土した。遺物分布は、A区はまばらなのに対し、C区では石組炉の周辺を中心に分布しており、その大半が接合可能であった。縄文時代の遺物については、A・C区から少量出土したのみである。B区からはどの時代の遺物も出土しなかった。

## 2 調査の経過

以下、調査日誌をもとに、調査経過の概要を記す。

(平成13年度)

- 1月16日(水) 現地にてプレハブ・重機等搬入の打合せ
- 1月18日(金) プレハブ・重機等を搬入、表土掘削に入る。
- 1月22日(火) 表土掘削終了、発掘器材を搬入。
- 1月23日(水) 作業員投入、A区の高原スコリアを除去。SC1・2を検出。
- 1月28日(月) 高原スコリア直下面から下を分割して掘削(～3月24日)。
- 1月29日(火) B区の表土掘削に入る。
- 1月31日(木) B区表土掘削終了、高原スコリア除去に入る。SC1・2の埋土半截。
- 2月1日(金) SC1・2の埋土半截終了。
- 2月4日(月) B区精査終了。A区SC1・2の完掘作業に入る。
- 2月6日(水) A区SC1・2完掘。
- 2月8日(金) B区の橙色土へ向けて掘削開始。
- 2月18日(月) A区橙色上面の精査終了。
- 3月1日(金) A区SC1・2の半截終了。
- 3月6日(水) B区調査終了。
- 3月8日(金) A区SC2の逆茂木痕の追加半截。
- 3月11日(月) B区埋め戻し開始(～3月12日)。
- 3月19日(火) A区SC2の逆茂木痕の追加半截。
- 3月22日(金) A区の掘削終了。
- 3月25日(月) A区埋め戻し開始(～3月29日)。

(平成14年度)

- 5月28日(火) 調査区の草刈り・調査区設定の後、表土掘削に入る(～6月14日)。
- 6月17日(月) 作業員投入、C区の高原スコリア除去に入る。
- 6月25日(火) 引き続き高原スコリアの除去作業。炭化木等が検出される。
- 7月2日(火) 引き続き高原スコリアの除去作業。SC3検出。
- 7月3日(水) 引き続き高原スコリアの除去作業。SC4検出。倒木痕検出。
- 7月12日(金) 高原スコリアの除去作業終了。
- 7月23日(火) 調査区内掘削。土師器が大量に出土。
- 7月30日(火) 引き続き掘削。高台付椀(墨書土器)が出土。
- 8月7日(水) 引き続き掘削。炭化木・SR1・2を検出。
- 8月9日(金) 引き続き掘削。調査区西側で須恵器壺が出土。
- 8月13日(火) SC3の埋土半截。
- 8月19日(月) 橙色土上面遺構検出のため精査。
- 8月21日(水) SR1の掘削。県埋蔵文化財センターの柳田宏一氏来現、指導を受ける。
- 9月2日(月) 引き続き橙色土上面遺構検出のため精査。緑釉陶器が出土。
- 9月3日(火) SC3の埋土の残りを掘削(～9月9日)。
- 9月12日(木) SC4の埋土の残りを掘削(～9月17日)。
- 9月13日(金) SC3の半截(～9月18日)。
- 9月30日(月) SR1の埋土掘削。
- 10月3日(木) SR2・SC5の埋土掘削。
- 10月4日(金) SC6の埋土掘削。SC5完掘。
- 10月7日(月) SC6完掘。
- 10月10日(木) SR2完掘。
- 10月11日(金) SR1完掘。調査終了。
- 10月15日(火) 調査区埋め戻し(～10月18日)

## 第5節 報告書の編集方法

高原町で作成する報告書では、これまではセクションペーパー等に遺構や遺物のトレース図面を貼り付けて作成したレイアウトを原稿として、印刷会社に渡していた。しかし、紙によるレイアウト作成にはどうしても広いスペースが必要になるため、又、作業の簡便化を目指して、第9集から試験的にレイアウトのデジタル化を実施した。

しかし、レイアウトをデジタル化するには、地形図や遺構・遺物実測図をスキャナで読み取るという作業が膨大になるため、第10集から、現場で得られる測量図に関しては、あらかじめ委託する際に成果物のデジタル化を委託内容に含めた。その結果、膨大な作業が予想された地形図等の複雑な図面に関しては、その作業量は大幅に削減された。但し、ここでいう測量成果物のデジタル化は、通常大手業者などで行われている(実測対象物を見ないで結線する)実測作業ではなく、3次元測量の後に手作業で図面を作成し、それをスキャナで読み込み、CAD上でトレースしたものをDXF拡張子に変換して納品したものである。このように、作業量がやや増えた分、手作業による実測図と遜色のない、むしろより正確な図面作成が可能となった。

ところが、今度は遺物など作業部屋で作成される遺物実測図や遺構のトレース作業等にお

いて、また新たな問題が浮上した。それらをスキヤナで読み込む場合、どうしても高解像度で読み込まざるを得ない。その結果、図面を貼り付けた原稿1枚のデータ量が膨大になり、作業に使用するPCに大きな負担が掛かり始めた。又、図面を写真編集ソフトで加工する際、どうしても印刷業者よりも技術が未熟なため、図面によって出来不出来が生じた。

平成14年度に作成した第10・11集については、地形図等はデジタル化し、遺構実測図や遺物実測図等はトレースしたものをスキヤナで読み込み、それらをPC上で合成するという手法を取ったが、前述のように図面による出来不出来が見られた事、データが重くなったために作業そのものの能率化が図られなかった事が今後の反省点として残った。

そこで、平成15年度の報告書作成より、地形図等現場で得られる図面は従来通りデジタル化による納品とし、遺構や遺物のトレースについてはデジタルトレースを導入した(遺物は石器以外)。その方法については大阪大学が報告書に詳しく掲載しているが<sup>(1)</sup>、それをヒントとして、さらに報告書を発注した印刷業者とも綿密な打合せ・不足点の叩き出し等を行った結果、デジタルによるトレースが可能になった。作業自体は、今回の遺構は複雑なものが多かったため、通常のトレースよりも時間が掛かってしまったが、その分、1枚の図面のデータ量は、トレース図面をそのままスキヤナで読み込んだ図面よりも1/100程度軽くなる事がわかった。これによって作業を行うPCの負担も軽くなり、前回に較べて作業速度そのものは早くなった。

今回実施したデジタルトレースには、まだまだ始まったばかりでいくつかの問題点を含んでいるが、大きな成果として挙げられるのが、(1)本文原稿も全て印刷段階にまで持つて行くので、印刷業者側で作成する時点で出てくる誤字脱字・文字化け等が殆ど無くなった(原稿校正の省力化)、(2)測量会社・印刷業者・埋蔵文化財行政三者の相互理解(発注側から被発注側への一方的な理解要求ではなく、相互の業務内容を理解する事により業務内容ひいては埋蔵文化財行政そのものに理解が得られた)、の2点であろう。又、なかなか修得が難しい遺構や遺物のトレースも、この方法なら簡単に行えるし、何より大きく拡大してトレースできるので、通常のトレースよりも正確な図面が出来上がる。

なお、今回の報告書作成で使用したPC及びソフト・作業方法は以下の通りである。

○PC本体

- ・機種 NEC VALUESTAR(2000年夏モデル)
- ・OS Microsoft Windows Me
- ・CPU Intel Pentium processor III
- ・メモリ 512MB

○ソフト

- ・図面加工 Adobe Photoshop 6.0
- ・レイアウト Adobe Illustrator 9.0(ver.8.0に互換性を持たせる)

○作業方法

- ①実測図をスキヤナで読み込む
- ②読み込んだ図面をPhotoshopで加工する。
- ③Illustratorに加工した図面を配置し、ペンツールを使用してトレースする。
- ④トレースした図面や文字等を、同じIllustratorで作成したレイアウト用のファイル上で掛け合わせる。
- ⑤文字については、全てアウトラインを掛けて、それを印刷業者に原稿として渡す。



※但し、IllustratorそのものがWindows上では動作が鈍くなるため、データ量が大きい地形測量図等はApple社のPower Mac G4を使用して加工した。Illustratorを使用して複雑な図面を処理するには、Macの方がWindowsに較べて処理速度が遙かに速いからである。ただ、MacからWindowsにデータを移行する際にデータの破損等、若干の不具合も生じた。今後の課題である。

(1)清家章・寺前直人 2003『久留米藩蔵屋敷跡』大阪大学埋蔵文化財調査委員会

## 第6節 宇津木遺跡の基本層序(第5図)

層序については、3調査区ともあまり地形的な変更が加えられていないため、各調査区の層序はほぼ共通している。又、前回調査した梶粉山遺跡に近い事もあり、土層の構成パターンなどは同じである。

大きく分類すると、主に「表土～黒褐色スコリア」(Ⅰ層)・「黒褐色スコリア」(Ⅱ層)・「黒褐色スコリア～橙色土上面」(Ⅲ層)・「橙色土上面以降」(Ⅳ層)の4種に大別できる。それを踏まえて標準的な層序を説明すると、まず表土(水田の床土・ⅠA層)があり、その下は、黒褐色粘質土(ⅠB層)・黒褐色粘質土(ⅠC層)・褐色軟質砂質土(ⅠD層)・暗褐色火山灰(ⅠE層)・高原スコリア(Ⅱ層)・褐色軟質土(ⅢA層)・青灰色硬質火山灰(ⅢB層)・赤灰色軟質土(ⅢC層)・赤色火山灰(ⅢD層)・灰黄褐色スコリア(ⅢE層)・黒褐色スコリア(ⅢF層)・橙色粘質土(ⅣA層)・褐色火山灰(ⅣB層)・黄褐色粘質土(ⅣC層)・暗オリーブ色粘質土(ⅣD層)、である。

まず、Ⅰ層であるが、高原スコリアより上部層については基本的に無遺物層として扱っている。表土のすぐ下には、享保元年(1716)から翌2年にかけて噴火した新燃岳の火山灰が所々堆積している。残存状況は梶粉山遺跡に較べてかなり少ない。その下のⅠB層は、スコリアの混入している黒褐色土で、下部の所々にスコリアの純層が見られる。どの火山灰かの同定はされていないが、今のところ16～17世紀のものと推定している。ⅠC層はⅠB層からⅠD層への漸移層である。ⅠE層はⅢB層と同じ性質の青灰色硬質火山灰で、高原スコリアをパックするような位置にある。

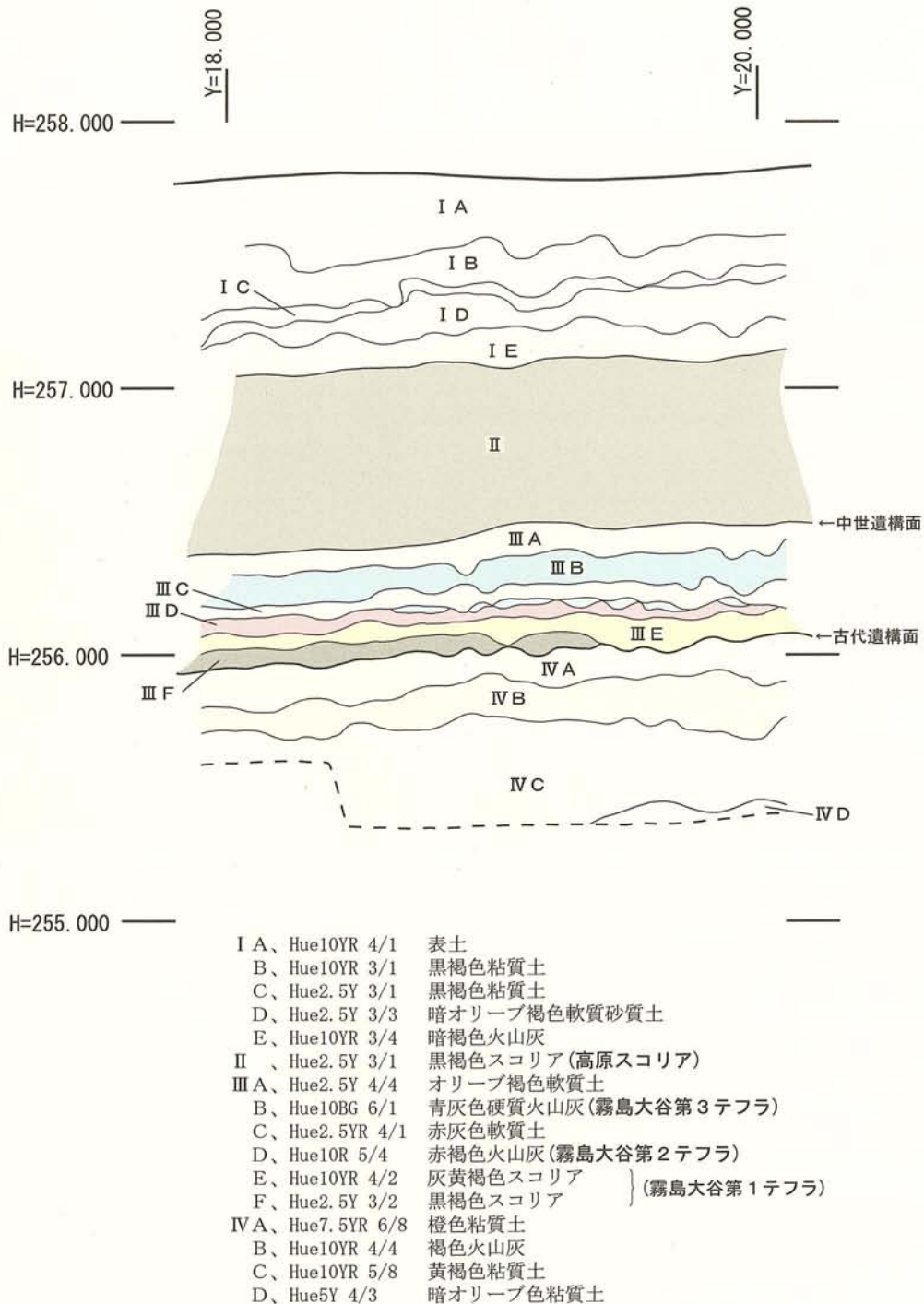
Ⅱ層については、「霧島大谷第4～6テフラ」である高原スコリアのみで構成されている。スコリアの大きさにより分層可能であるが、スコリアが同質である事や、炭化物など年代が確定できるものが混入していない事から1層として扱った。

Ⅲ層は、まず高原スコリア直下には陥し穴の検出面である軟質のⅢA層、次に「霧島大谷第3テフラ」と呼ばれるⅢB層がある。青灰色と白色の2層で構成され、青灰色の方は硬質なのに対し、白色の方はやや粘土のような性質になっている。ⅢC層はⅢA層にⅢB層が加わったような色調で、さらにその下のⅢD層の影響も受けている軟質土である。ⅢD層は「霧島大谷第2テフラ」と呼ばれる軟質の赤色の火山灰、ⅢE・ⅢF層は「霧島第1テフラ」に相当している火山灰と思われる。ⅢE層には土砂が混入しているのに対し、ⅢF層は比較的スコリアの純層に近い状態である。又、ⅢF層は乾燥すると青灰色になる特徴がある。なお、Ⅳ層検出の1号石組炉(SR1)の石組の中にはⅢF層が堆積していた。

Ⅳ層は、石組炉やピット群を検出したⅣA層、次にⅣB層が続く。ⅣB層は褐色のやや硬質気味の火山灰で、現在のところ、その性質・噴出源などは不明である。梶粉山遺跡ではブ

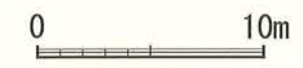
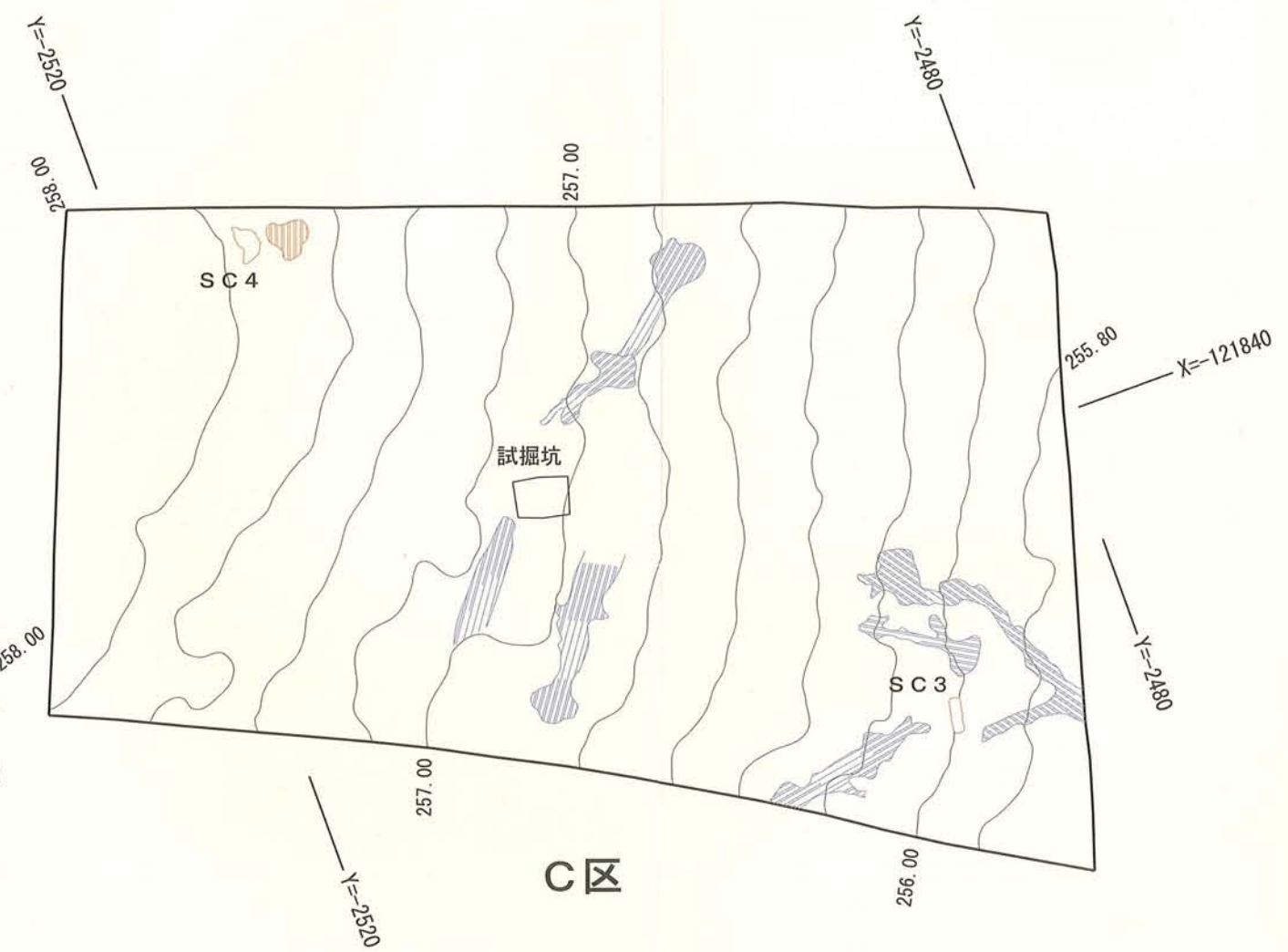
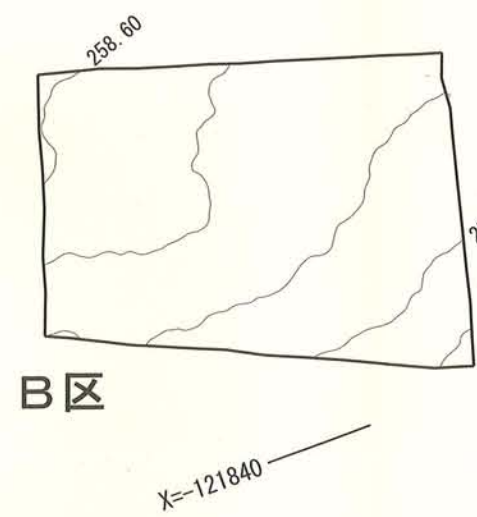
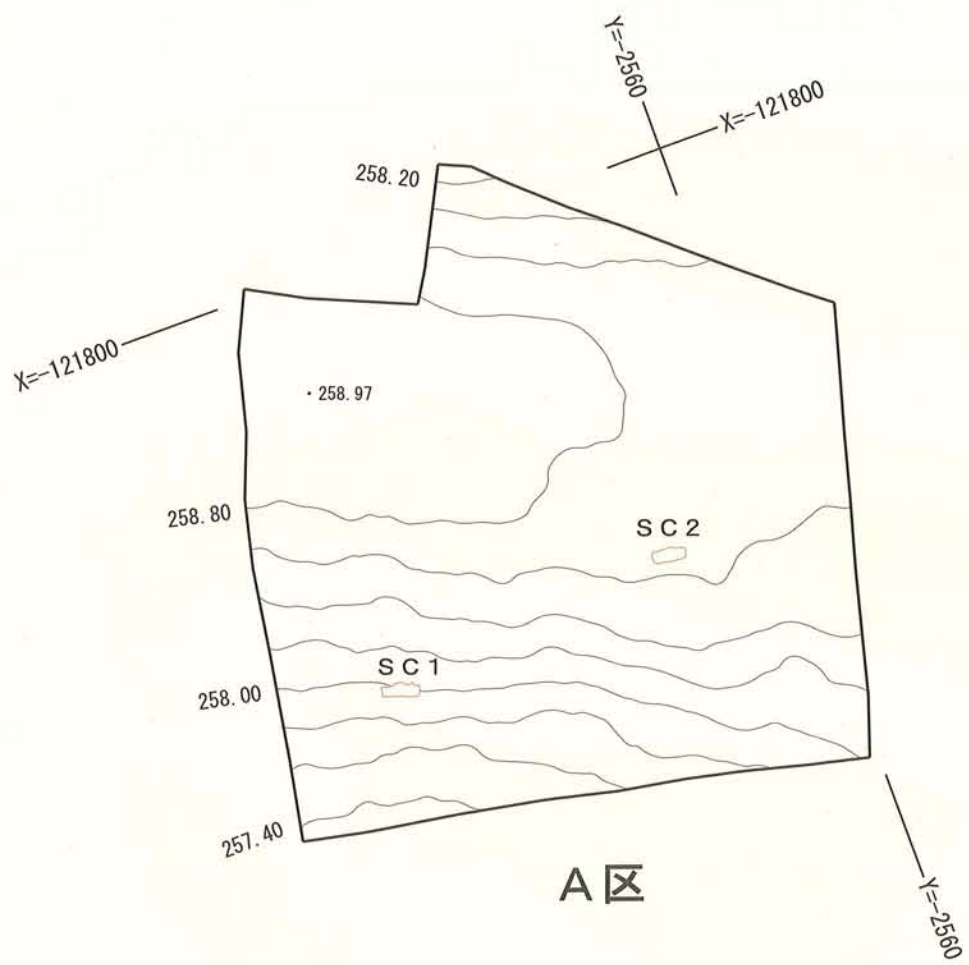
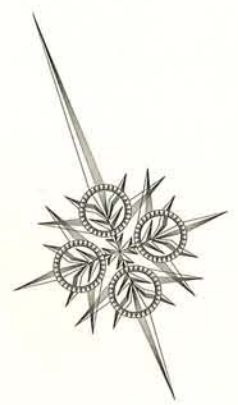
ロック状に残存していたのに対し、宇津木遺跡では攪乱されていない層として残存していた。IVC層はIV A層に近い色調だが、土質はやや硬めである。IVD層はやや硬めの粘質土である。

この土層の中で、遺構については、狩猟用陥し穴及び用途不明土坑はIII A層上面で、石組炉及び土坑・ピット群はIV A層上面でそれぞれ検出された。又、遺物については、III F層から出土し始め、IV A層でピークを迎える。IV C層では殆ど検出されなかった。遺物の内容は、縄文時代から古墳・古代の土師器と幅広いものの、層による出土の変化は見られなかった。



第5図 宇津木遺跡標準土層図





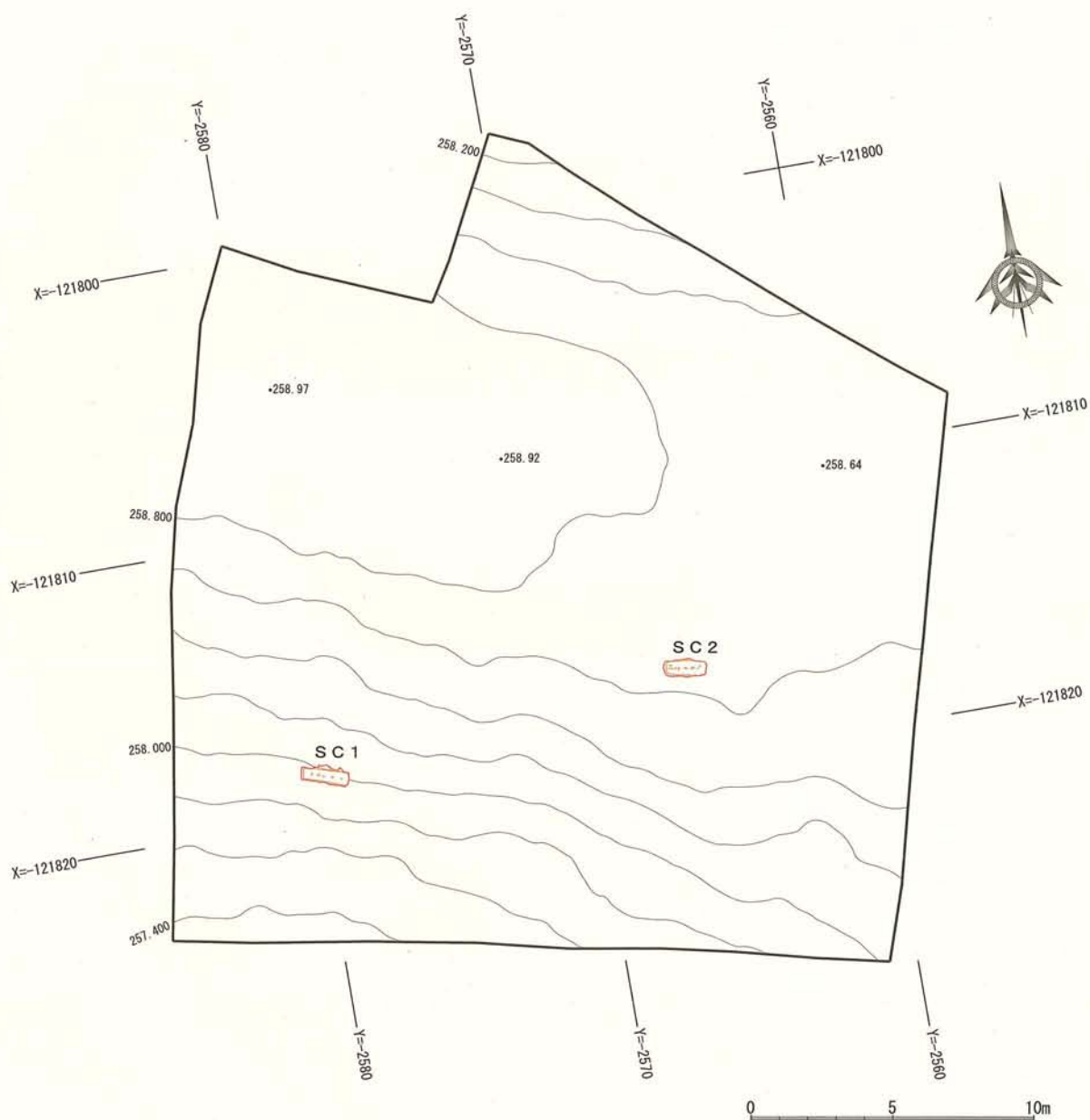
第6図 宇津木遺跡高原スコリア直下面地形図

## 第Ⅱ章 高原スコリア直下面での遺構・遺物

### 第1節 はじめに(第6図)

今回の調査では、これまで高原町で行われた発掘調査方法を踏襲して、表土から高原スコリアの半ばまでの約150cmを重機で掘削し、残りのスコリア及び精査を人力で行った。重機を使用して遺構面の間際まで掘削したのは、当町の霧島山に近い箇所では高原スコリアが1m近く堆積しているため、時間短縮及び作業能率を考慮したためである。よって、高原スコリアより上の層位、いわゆる「新燃享保噴火火山灰」の近辺などは調査せず、土壌分析に留めている。

調査の結果、高原スコリアの直下面において、狩猟用と思われる陥し穴(SC)が計3基、用途不明土坑(SC)が1基検出された。遺物については、直接遺構に関するような遺物は出土していない。以下、その成果を記す。



第7図 宇津木遺跡A区高原スコリア直下面地形図

## 第2節 各区の出土遺構(第7～14図)

### 1 A区の出土遺構(第7図)

A区は、東側へ下る尾根上の台地で、削平は尾根の頂点のみ受けているものの、高原スコリアもある程度は残存していた。南側に旧地形の谷が見られ、その谷に併行するように陥し穴遺構が2基(SC1・2)検出された。2基とも同方向直列に並んでいる。

#### SC1(第8図)

中心部分よりやや西側で検出された。軸方向はN73.0°Wである。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で170.2cm・下端は160.0cm、短軸は上端で60.5cm・下端で41.5cmと、長短軸共に底の方が狭くなる。底は中心部分でやや深くなり、深さは78～90cmである。底からは逆茂木が5本検出された。ほぼ長軸方向に沿い、15～30cmとばらつきがある。埋土の半ば辺りからすでに空洞になっていた。形状は先の尖った三角錐形で、径は6～8cm、深さは19～37cmである。全体的に高原スコリアの含有量は非常に少なく、逆茂木縁辺部に炭化物が多く固まる。この5本の逆茂木はほぼ同時期に形成されたと思われる。長軸側の北面には手斧と思われる方頭で幅7～14cmの工具痕が無数に残されていた。同じく長軸側の南面には上弦形の工具痕が残されていた。

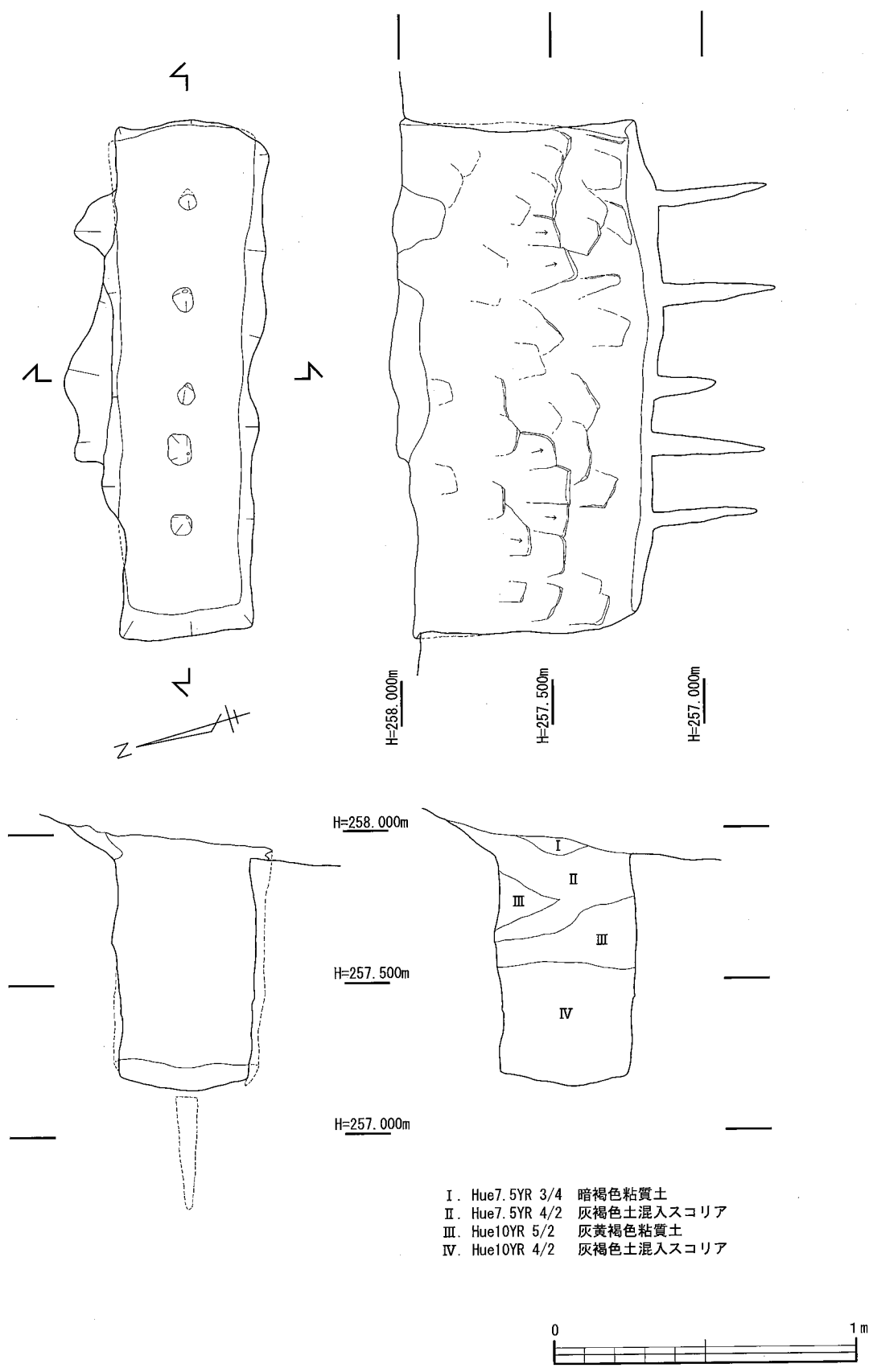
#### SC2(第9図)

SC1の東側で検出された。軸方向はN79.5°Wである。埋土はSC1と同様の砂粒混入の粘質土と高原スコリアの2層で、炭化物は検出されなかった。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で151.0cm・下端で142.2cm、短軸は上端で62.0cm・下端で50.3cmと、長短軸共に底の方がやや狭くなり、長軸側の下端はやや東側に寄り気味である。底は逆茂木部分でやや深くなり、深さは29～37cmである。底からは逆茂木が15本検出された。大まかには長軸方向に沿っているが、西側では乱れがある。真ん中部分の逆茂木は上端部分を共有し、同じ箇所を穿とうとする意思が感じられる。逆茂木間の間隔は、中心部分は15～20cmと一定している。形状は先の尖った三角錐形で、径は3～8cm、深さはかなりまちまちで、6～7cmの非常に小さいものから、最大45cmの大きなものまである。平均的には20～40cm内に収まっている。埋土は高原スコリア主体ではあったが、他の陥し穴に較べて炭化物が多く検出された。ただかなり細片化しており、具体的な樹種特定には至らない。

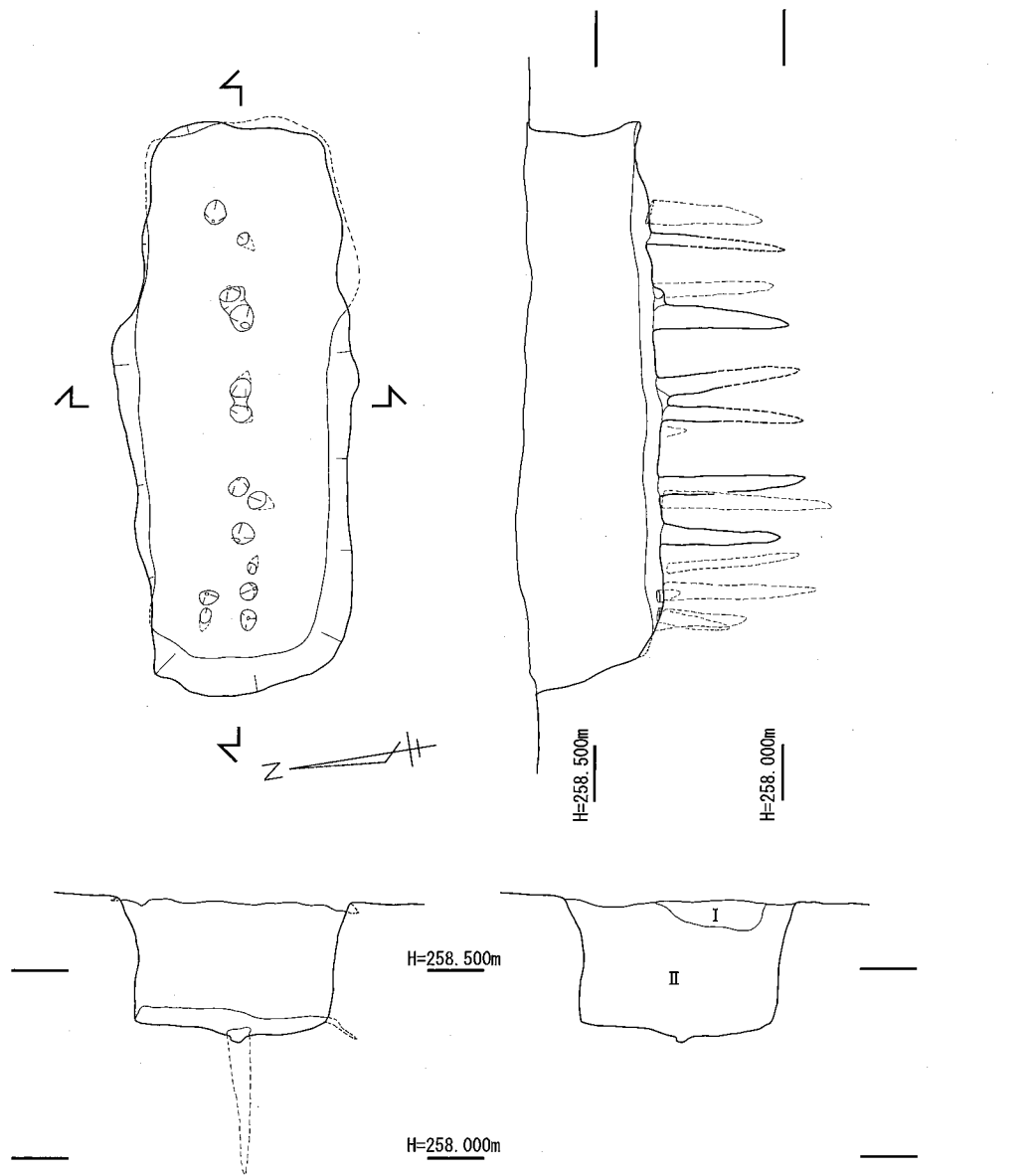
### 2 B区の調査成果(第10図)

B区は、その台地の頂上部に位置しており、西側の畑地と高低差があるものの、近年における造成は行われなかったため、高原スコリアの上下面共に良好に残存している。調査区西側で丁度台地の頂上部となり東へ流れる緩斜面になっている。遺構・遺物は全く検出されなかった。





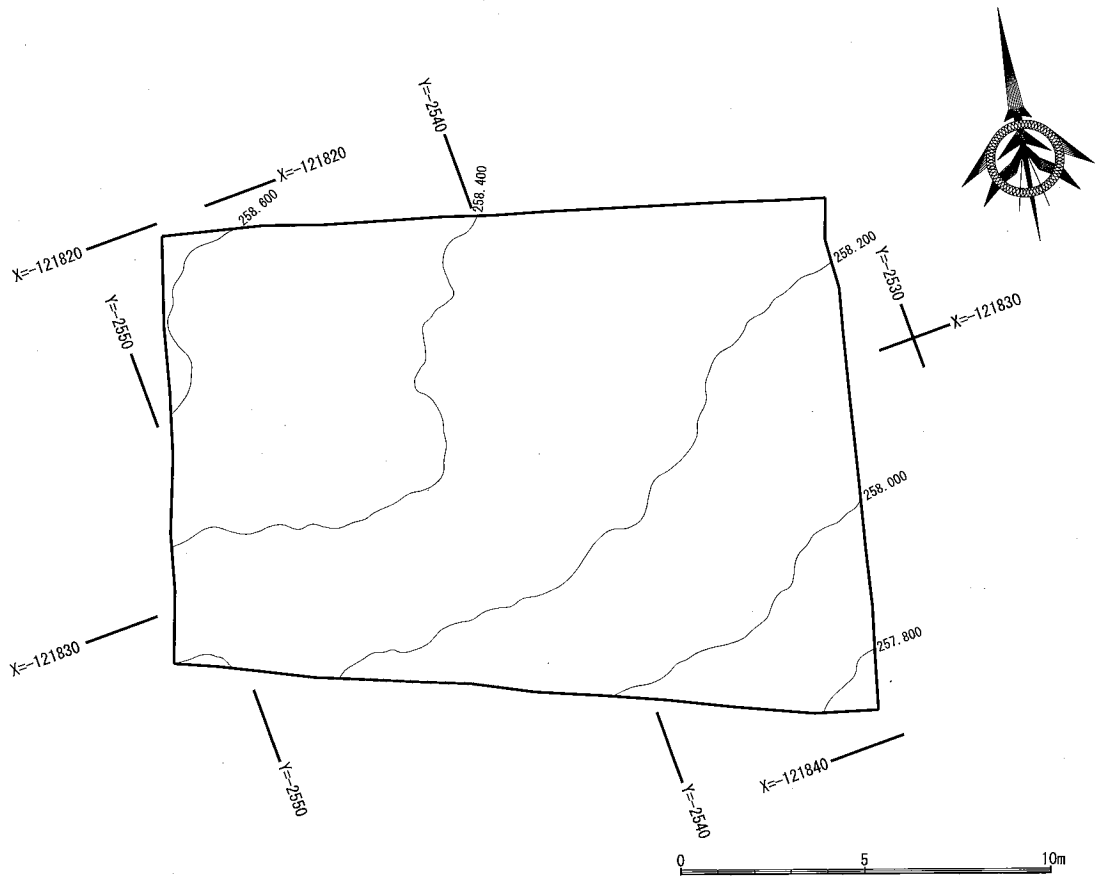
第8図 宇津木遺跡A区SC1実測図



I. Hue7. 5YR 3/4 暗褐色粘質土  
 II. Hue10YR 4/1 灰褐色土混入スコリア(高原スコリア)



第9図 宇津木遺跡A区SC2実測図



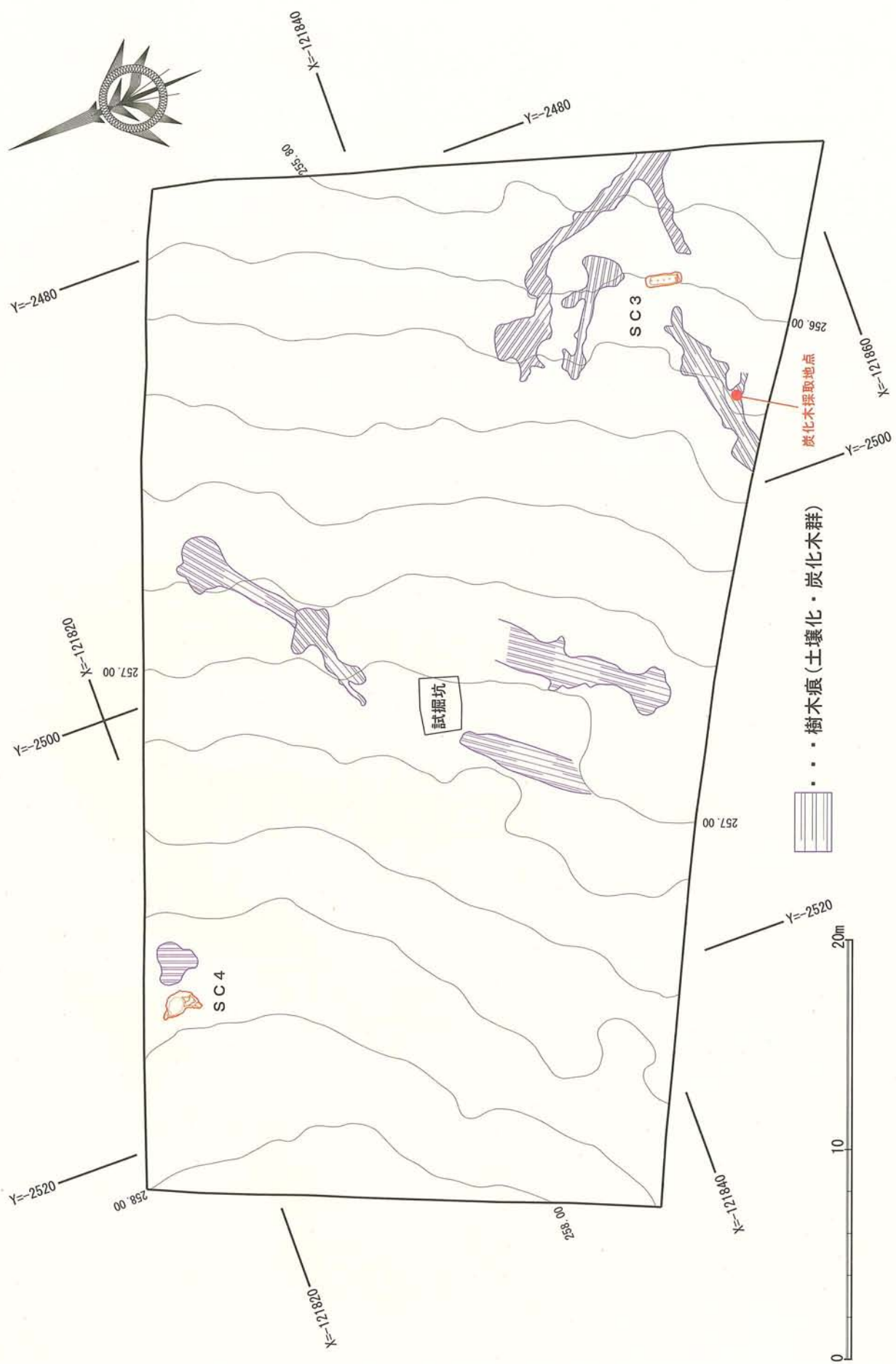
第10図 宇津木遺跡B区高原スコリア直下面地形図

### 3 C区の調査成果(第11図)

C区については、近年における造成などは全く受けておらず、遺構面が良好に残存している。A・B区から流れてくる、東へと降る緩斜面地形である。調査区からは、ほぼ全面に渡って倒木痕と思われる樹根跡や、木質部分の土壌化したものが見られた。その中で、調査区の東南隅から陥し穴が1基(SC3)、さらに調査区北西部から樹根跡に造成を加えた土坑(SC4)が、それぞれ検出された。尚、南東部分で検出された炭化木については、放射性炭素分析を実施した。

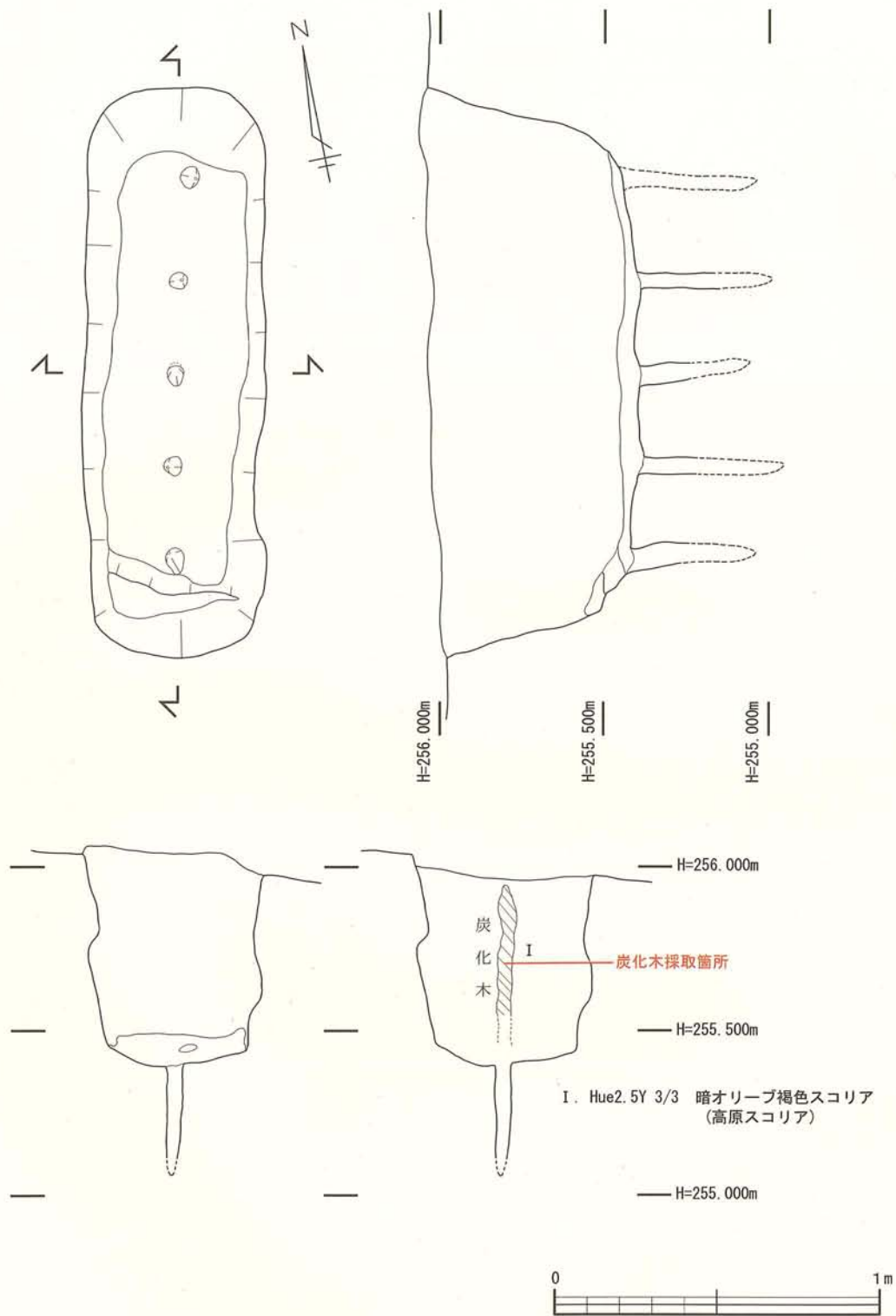
#### SC3(第12図)

調査区の南東側、土層断面に沿う形で検出された。軸方向はN11.0°Eである。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で172.5cm・下端で127.8cm、短軸は上端で55.0cm・下端で42.0cmと、長短軸共に底のプランがやや狭い。深さは中心部がやや深く、58~65cmである。底からは逆茂木が5本検出された。ほぼ長軸方向に沿い、ほぼ28~30cmの等間隔で配置されている。形状は先の尖った三角錐形で、径5~8cm、深さは34~43cmである。この逆茂木は、埋土の途中から検出されていた。円形の空洞状になっており、縁辺部には炭化木が薄く附着していた。尚、埋土内の空洞の縁辺部に附着していた炭化木については、放射性炭素分析を実施した。

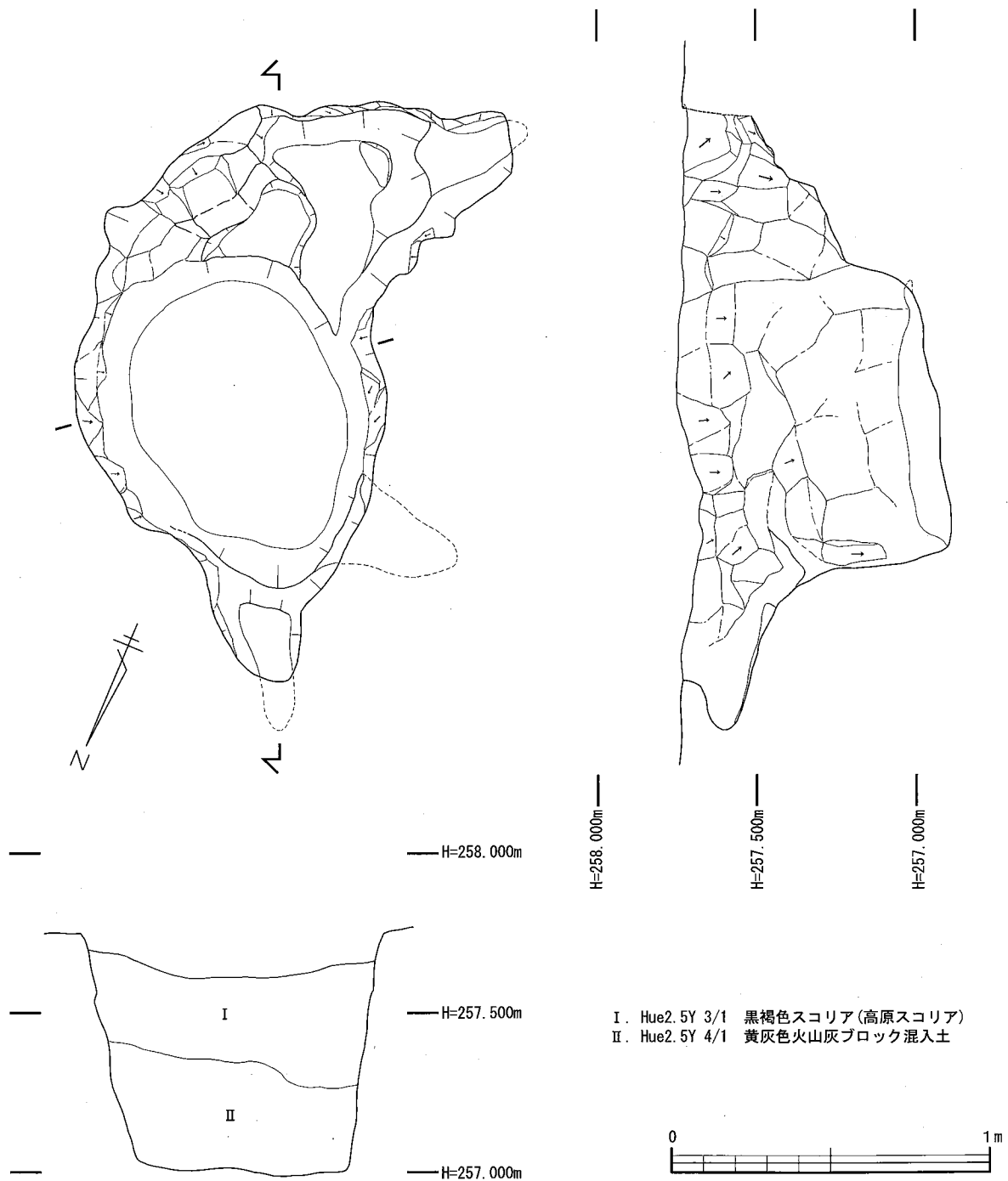


第11図 宇津木遺跡C区高原スコリア直下面地形図





第12図 宇津木遺跡C区SC3実測図



第13図 宇津木遺跡C区SC4実測図

SC4(第13図)

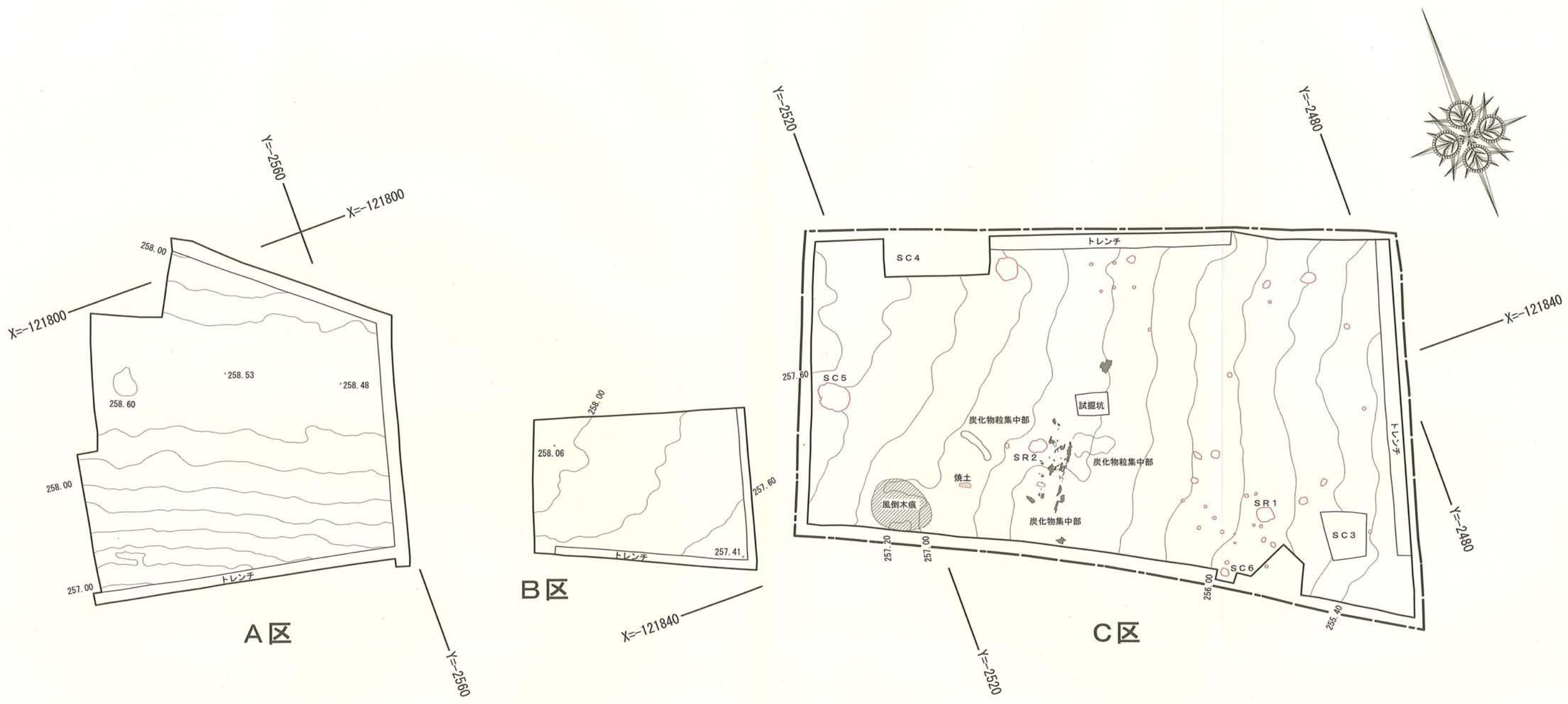
調査区の北西側で検出された。すぐ東側には樹根跡がある事や、遺構検出面に同様の樹根痕がある事から、当初は同じ性格のものと考えていた。ところが、遺構縁辺部や壁面に手斧痕が大量に検出された事から、樹根痕に手を加えた土坑であると判断した。形態は三日月に

近い形で、南側の張り出しの方がやや長い。そして中心部が円筒状に深くなり、南側の張り出しにはつま先を掛けるような階段状のものが2箇所見られる。法量は南北ラインが192.0cm、東西ラインが113.0cm、深さは最深部で82.5cmである。工具痕は中心部分の円筒を中心に残存していた。方頭で、幅は7～15cm。埋土の大半が高原スコリアであるのに対し、円筒部分のみ高原スコリアが全くなかったため、この土坑が形成されて、円筒部分のみすぐに埋められたものと思われる。

現在のところ用途不明であるが、階段状施設はS C 3方面にあることから、陥し穴に付随する、隠れ家的施設と推定したい。







※ 当測量図は旧日本測地系による

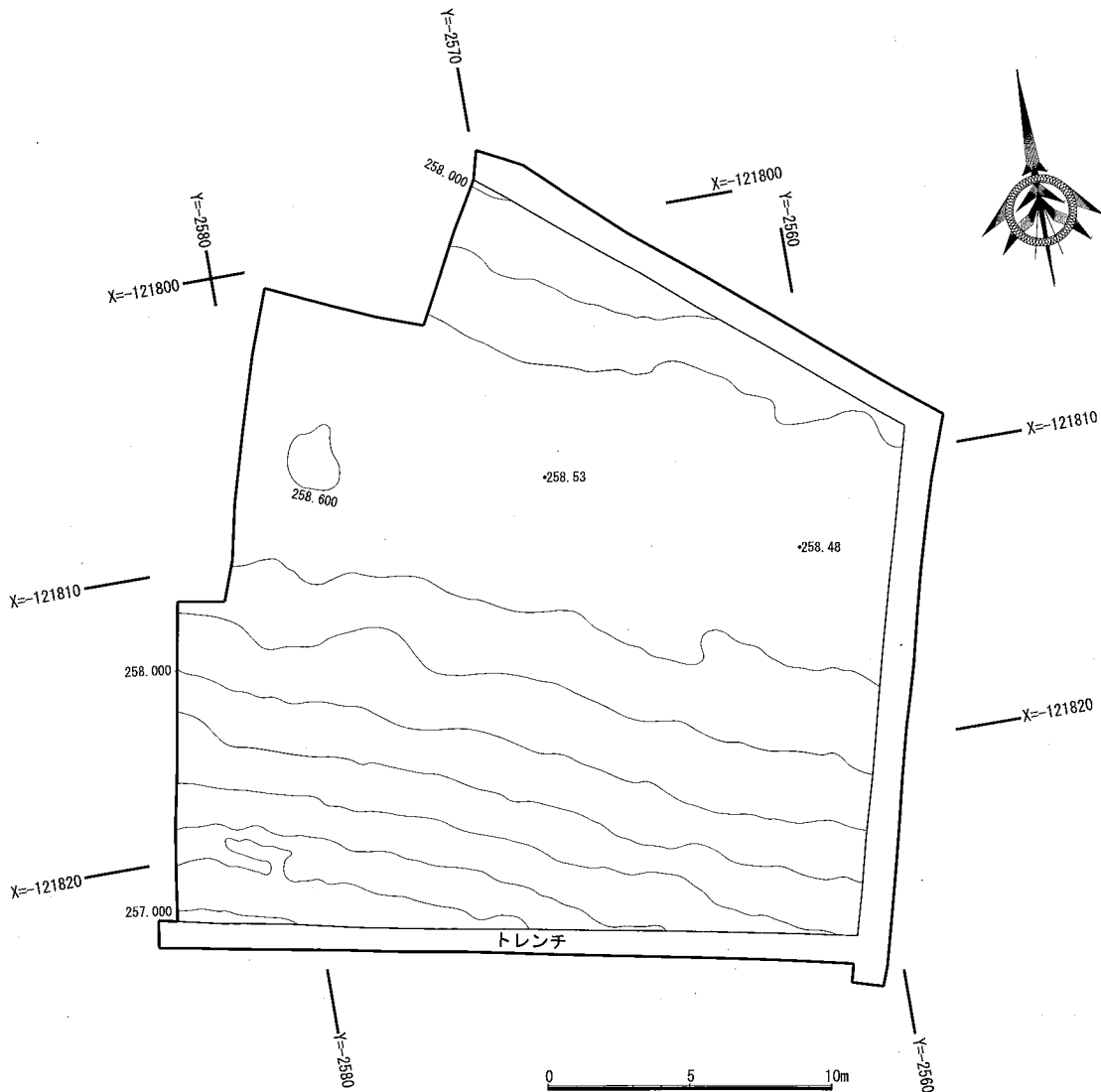
第14図 宇津木遺跡第IV層上面地形図

### 第三章 第IV層での遺構・遺物

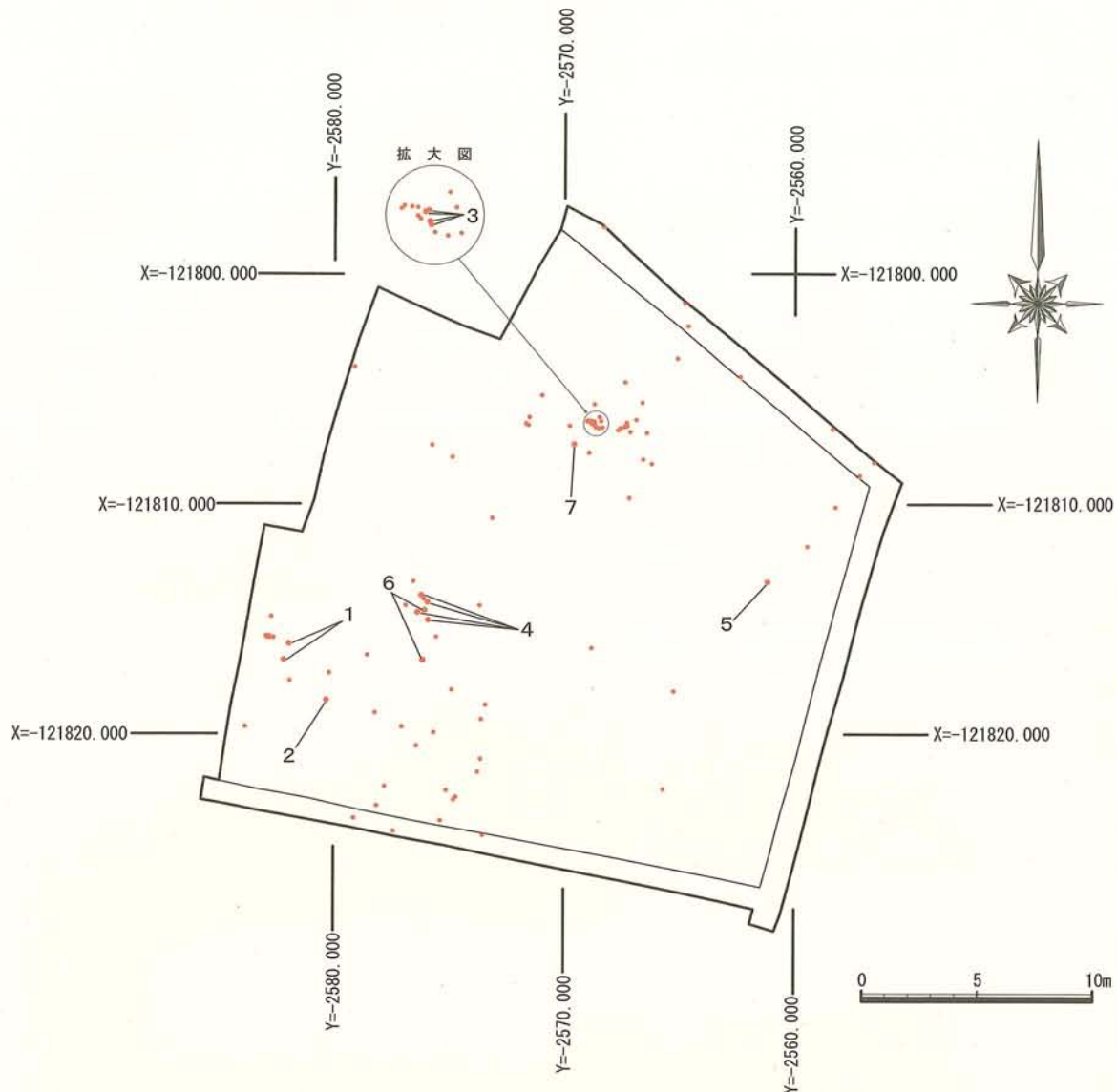
#### 第1節 はじめに(第14図)

高原スコリア直下層で陥し穴等の遺構を検出した後、その周辺部分を残して下層での遺構・遺物の検出にあたった。掘削に際しては、調査区の外周に土砂崩壊防止のための犬走りを設け、トレンチを入れ、層序の検出にあたった。試掘調査の際に遺物が出土した橙色土層に至るまでの土層は、火山灰・無遺物層が中心で、且つ層自体も安定していた。しかし、土質がかなり硬質であったため、作業時間短縮を考慮し、青灰色火山灰層を中心に重機で掘削した。その後人力で掘削し、第IV層上面で遺構・遺物を検出した。その結果、遺構についてはC区で石組炉や土坑・ピット群等が検出された。又、遺物については、A・C区より古代の土師器や縄文土器・須恵器などが出土した。特にC区では、当遺跡の大部分を占める程の出土量があり、且つ大片が多かったため、大半が接合可能であった。なお、器種構成は、土師器は坏・高台付椀(墨書土器・黒色土器A類を含む)・甕・布痕土器・緑釉陶器、須恵器は壺・甕(胴部小破片のみ)である。

以下、第IV層以降で検出・出土した遺構・遺物について記述する。



第15図 宇津木遺跡A区第IV層上面地形図



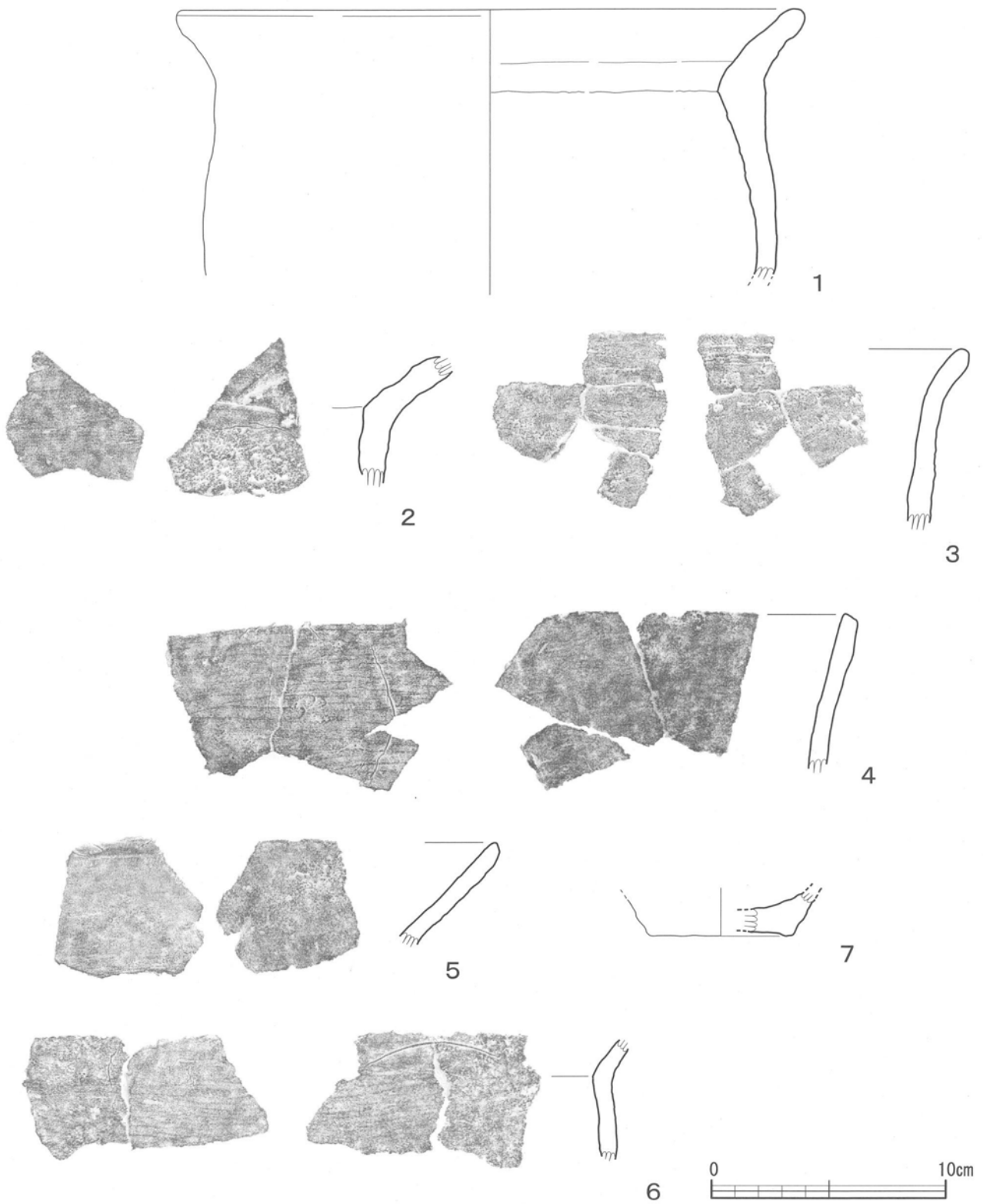
第16図 宇津木遺跡A区第IV層上面出土遺物分布図

## 第2節 各区の出土遺構・遺物(第15～39図)

### 1 A区の出土遺構・遺物(第15図～第17図)

A区では、遺構は検出されていない。遺物については、全体で50点程度と少量しか出土しなかった。多くは細片であったが、縄文時代後期と思われる土器と、古代の土師器が確認された。

1・2は古代の土師器の甕である。1は、口縁部はやや緩めにラップ状に開き、胴部は少し膨らむ。胴部内面は頸部よりヘラケズリで整形している。口径26cm。2は、頸部断片で、胴部内面は緩いヘラケズリで整形している。3は、甕の口縁部から頸部にかけての断片である。無文で、口縁部はややラップ状に開く。古墳時代の土師器か。4～6は、同系統の浅鉢である。無文で、胴部から直立する(あるいは真っ直ぐに外反する)口縁部で、表裏共にヘラミガキ調整を施している。三万田式と思われる。7は、縄文土器の底部断片である。底面が若干上げ底となる。底径6.0cm。

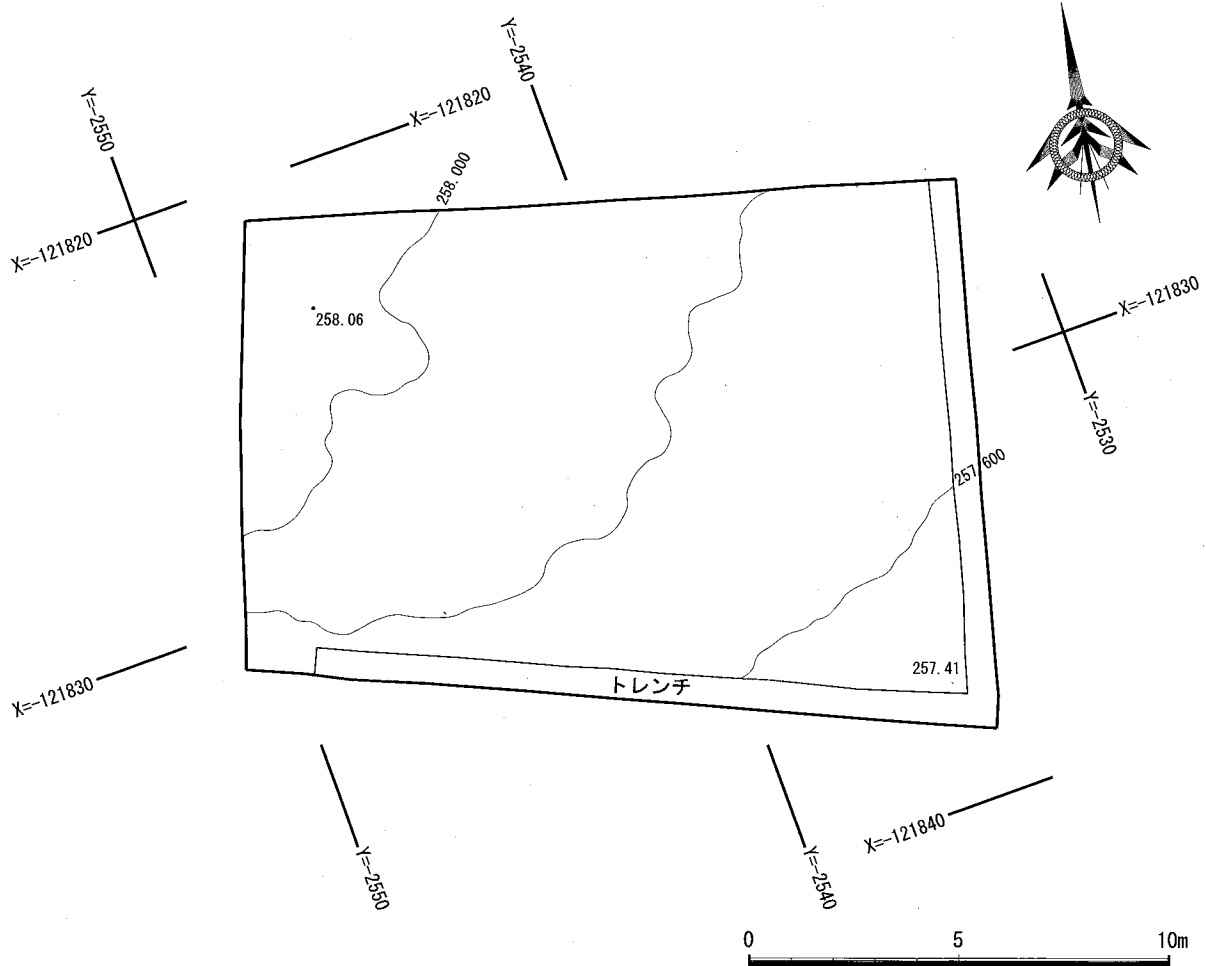


第17図 宇津木遺跡 A区第IV層上面出土遺物実測図

2 B区の出土遺構・遺物(第18図)

B区では、遺構・遺物ともに検出されなかった。





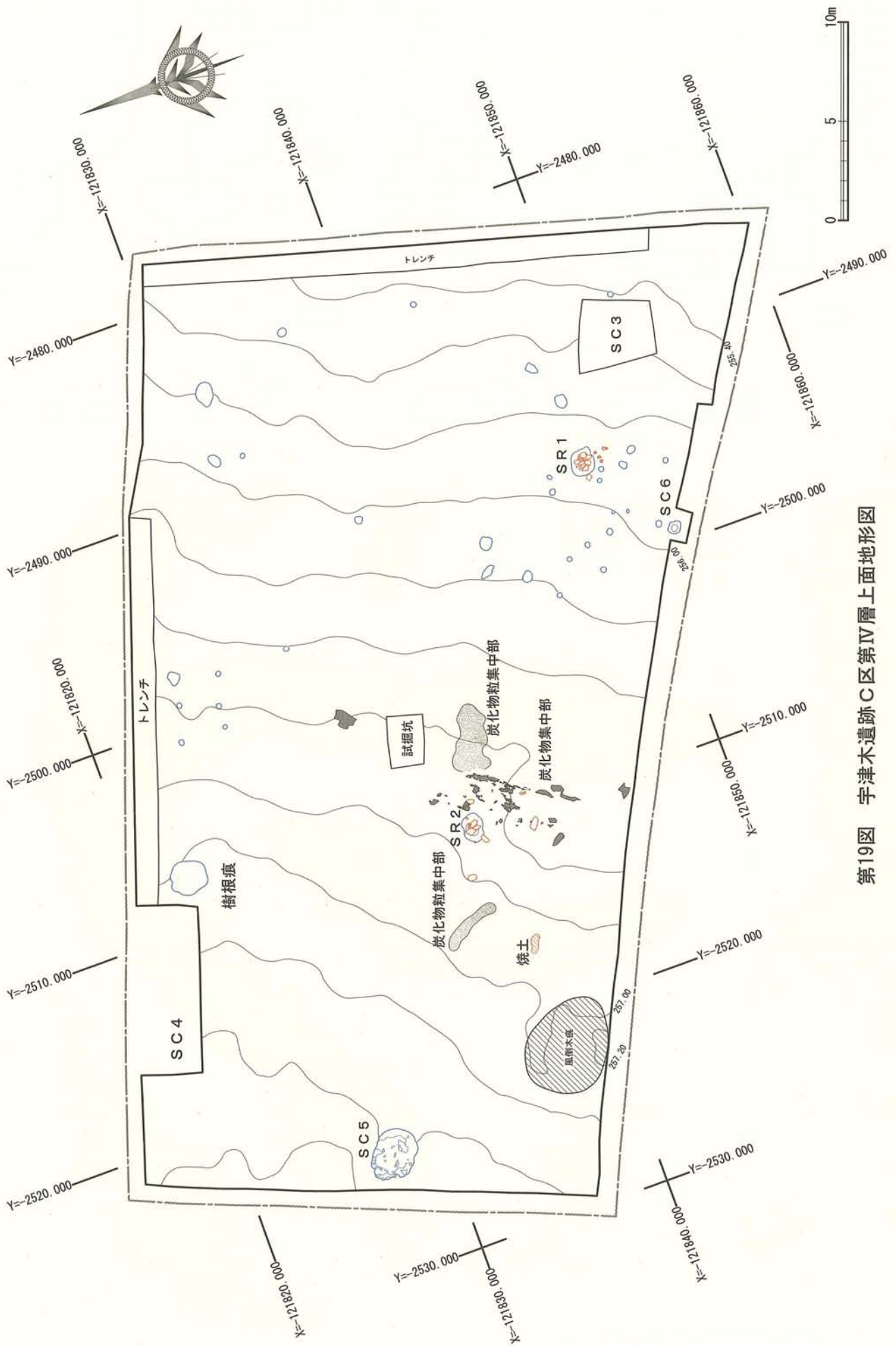
第18図 宇津木遺跡B区第IV層上面地形図

### 3 C区の出土遺構・遺物(第19~39図)

C区では、高原スコリア直下層と同じような、西側へ降る緩斜面であった。調査区からは、SC3のすぐ西側から石組炉(SR1)が1基、さらにその西側から倒木と思われる大きな炭化木、さらにその西側から石組炉(SR2)が1基それぞれ検出された。又、その近辺から自然及び人為的な土坑が2基(SC5・SC6)なども検出された。

遺物については、すでに第III層の下層辺り、黒褐色スコリア層から出土が始まり、第IV層でピークを迎えた。遺構に関わるもの、そうでないもの様々である。傾向としてはSR1の近辺にその大半が固まっていた。ただ、大半が接合するため、遺物そのものの量は多くない。器種構成は土師器は坏・高台付椀(通常・黒色土器A類・墨書土器)・皿(緑釉陶器)・甕・布痕土器、須恵器は壺・甕である。

尚、調査区中心部の試掘坑の南側で検出された炭化木群については、放射性炭素分析を実施した。



第19図 宇津木遺跡C区第IV層上面地形図

## (1) C区の遺構及び遺構内出土遺物(第20～28図)

### SR1(第20～24図)

SC3の西側で検出された。土坑の中心部よりやや東側に、縦長の石が中心部分を覆うように深く立てられており、その中心部分には標準土層の黒褐色スコリア(第3F層)が堆積していた。石は安山岩製で、大きさは30～45cmである。土坑に内面に向いている面の焼成は著しいものの、南西部分の焼成はそれほど激しくない。土坑平面は、長軸方向が137.5cm、短軸方向が117.5cmの楕円形で、播り鉢型を呈し、深さ33.0cmである。土坑の北西隅は底面がやや高めで、その底には灰と思われる硬質の土が見られた。又、焼土と思われる土も土坑中心部分に播り鉢状に見られた。

遺物については、その全てが古代の土師器の甕であった(8～14)。遺構内部及びその周辺から多く検出され、遺構内部のみで完結した遺物は殆ど無い。主に大半が遺構内の出土であるもの(8・9・12)と、出土割合が遺構内外半々(10)、ごく数点が遺構内の出土でその他は遺構外からの出土(11～14)の3種に分かれる。

8は、石囲い外部の北側より出土した。口縁部から頸部にかけて残存し、頸部に緩いヘラケズリを施す。口径35.8cm。

9は、石囲い内部の北側を中心に出土した。口縁部から胴下半部にかけて残存し、頸部内部には区画線のようなヘラケズリが見られるが、その下は明瞭でない。口径26.0cm。

10は、石囲いの中心部分から出土した土器の殆どを占めているが、遺構外の出土も多く、その分布は遺構を中心に散乱している。口縁部はやや楕円形気味で、全体的にひずみが大きい。内部は頸部に明瞭な稜線を残し、それより下には横方向のヘラケズリを施す。口径26.2cm、器高17.6cm。

11は石囲い外部の北東側から出土した他は遺構外からの出土である。又、SR2内部及び南西部からの出土遺物も含まれていた。口縁部は緩やかに外反し、胴下半部は器表裏面共に熱が原因と思われる剥離が激しい。内部は、頸部にやや明瞭な稜線を残し、それより下には横方向のヘラケズリを施す。口径31.2cm、器高20.3cm(推定)。

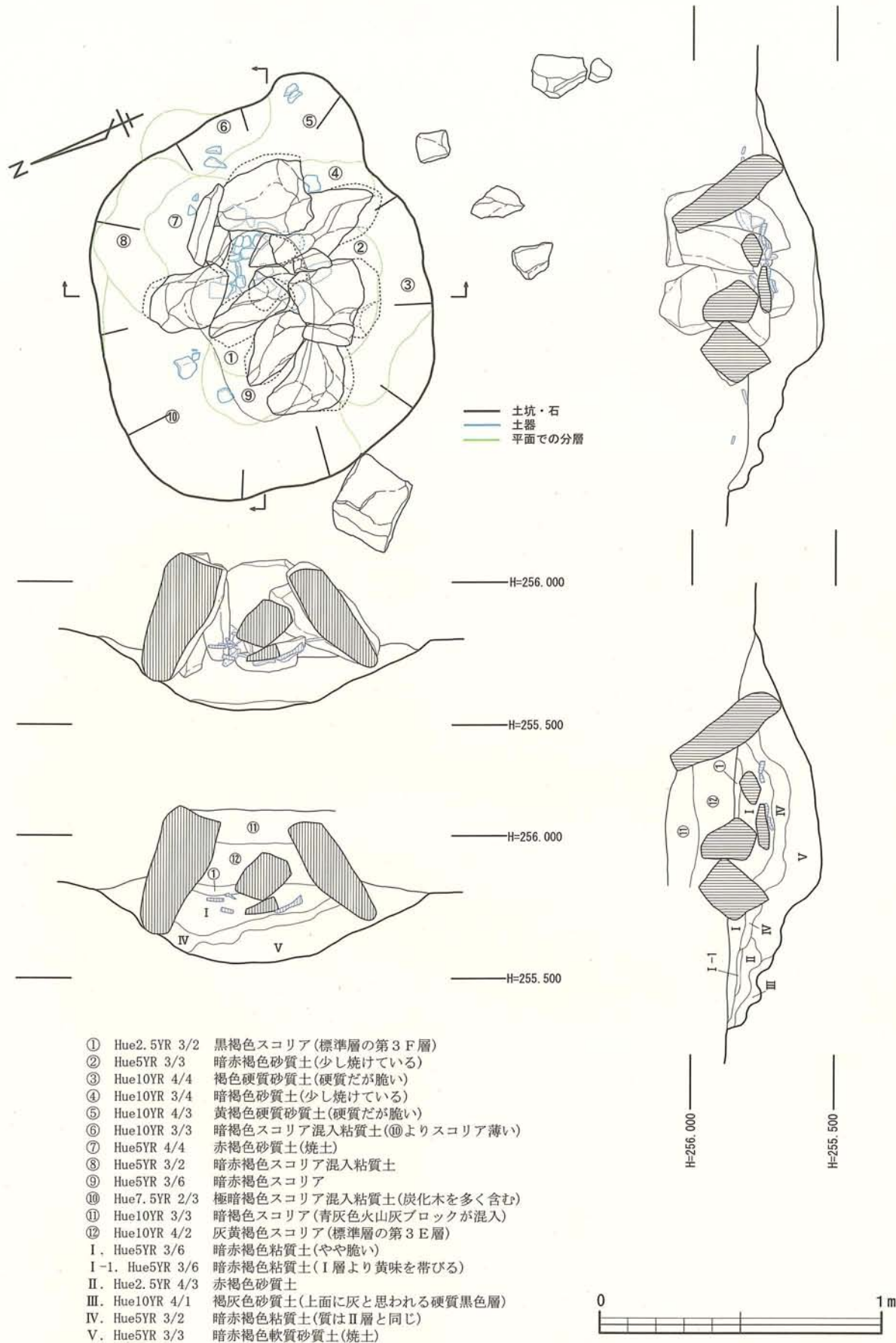
12は石囲い外部の北東側から出土した。口縁部は緩やかに外反し、内部の頸部稜線は不明瞭である。

13は、石囲い外部の南東側から1点出土した他は遺構東部からの出土である。出土遺物中、表裏器面調整が最も丁寧で、全体的にヘラ調整による光沢を帯びている。内部の頸部下のヘラケズリもその痕跡は殆ど見られない。器表面底部に剥離が見られる。口縁部にのみ煤や焼成物が大量に付着する。口径32.0cm。器高24.9cm。

14は石囲い内部の南西側から数点出土したのみで、大半は遺構と南西側にあるSC6の間にある大きな石付近で出土した。出土遺物中器高が最も大きいのが、胴下半部から底部にかけて中心が片側に寄っている。口縁部は丁寧に仕上げられ、調整によると思われる沈線状の窪みが巡っていた。器表面調整は不定方向のナデ調整が、内部は斜方向のヘラケズリ調整が主体である。ただ内部は剥離が激しくヘラケズリの詳細な方向等は不明である。口径29.6cm。器高29.2cm。

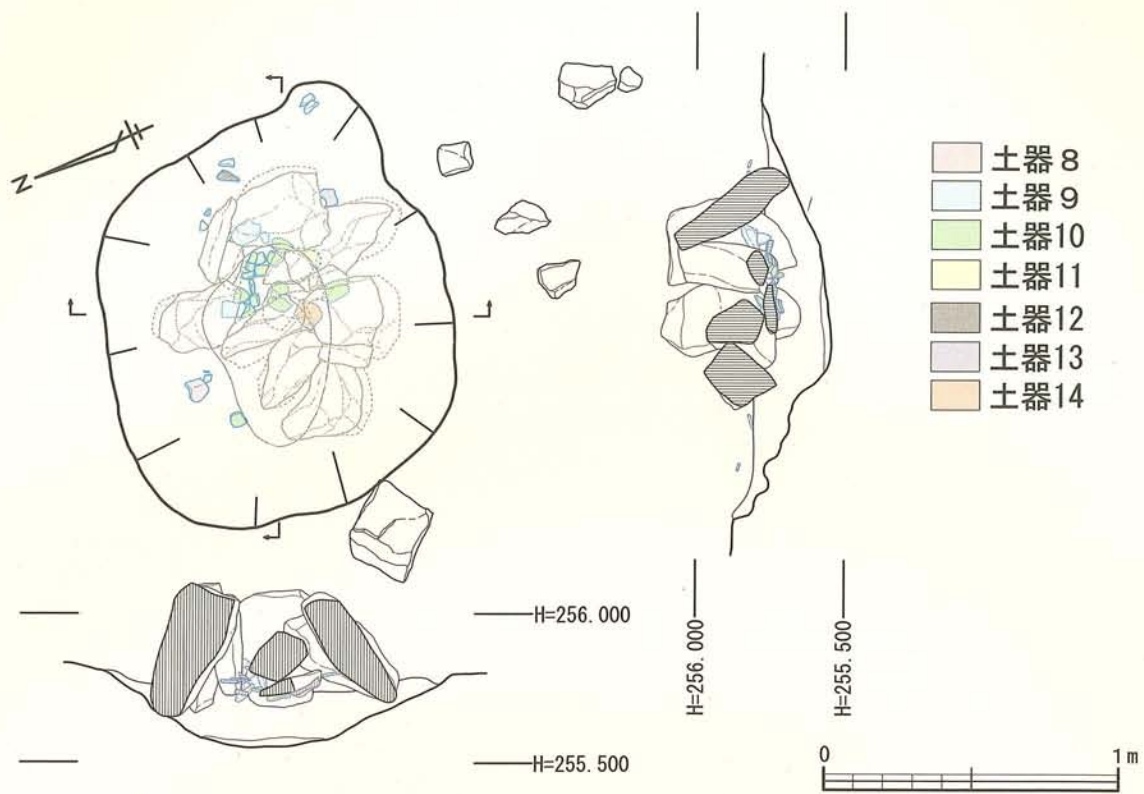
### SR2(第25図)

調査区のほぼ中心、炭化木群の西側で検出された。石は土坑上面に水平に倒れていた。石は安山岩製で、大きさは43～51cmである。土坑平面は長軸方向で145.5cm、短軸方向で98.0cmの楕円形である。底部は播り鉢型を呈しているが、西側で小さなテラスらしきものが見られ、その部分は灰と思われる硬質の土が堆積していた。深さは32cmである。



- ① Hue2.5YR 3/2 黒褐色スコリア(標準層の第3F層)
- ② Hue5YR 3/3 暗赤褐色砂質土(少し焼けている)
- ③ Hue10YR 4/4 褐色硬質砂質土(硬質だが脆い)
- ④ Hue10YR 3/4 暗褐色砂質土(少し焼けている)
- ⑤ Hue10YR 4/3 黄褐色硬質砂質土(硬質だが脆い)
- ⑥ Hue10YR 3/3 暗褐色スコリア混入粘質土(⑩よりスコリア薄い)
- ⑦ Hue5YR 4/4 赤褐色砂質土(焼土)
- ⑧ Hue5YR 3/2 暗赤褐色スコリア混入粘質土
- ⑨ Hue5YR 3/6 暗赤褐色スコリア
- ⑩ Hue7.5YR 2/3 極暗褐色スコリア混入粘質土(炭化木を多く含む)
- ⑪ Hue10YR 3/3 暗褐色スコリア(青灰色火山灰ブロックが混入)
- ⑫ Hue10YR 4/2 灰黄褐色スコリア(標準層の第3E層)
- I. Hue5YR 3/6 暗赤褐色粘質土(やや脆い)
- I-1. Hue5YR 3/6 暗赤褐色粘質土(I層より黄味を帯びる)
- II. Hue2.5YR 4/3 赤褐色砂質土
- III. Hue10YR 4/1 褐灰色砂質土(上面に灰と思われる硬質黒色層)
- IV. Hue5YR 3/2 暗赤褐色粘質土(質はII層と同じ)
- V. Hue5YR 3/3 暗赤褐色軟質砂質土(焼土)

第20図 宇津木遺跡C区SR1実測図

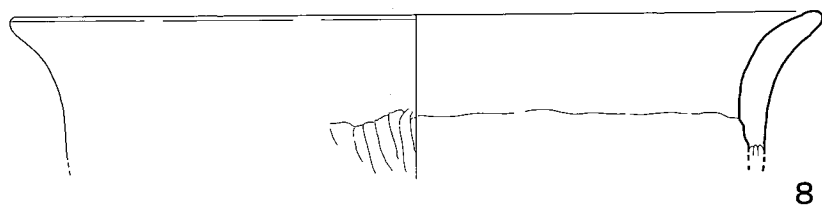


第21図 宇津木遺跡C区SR1出土土器分布図

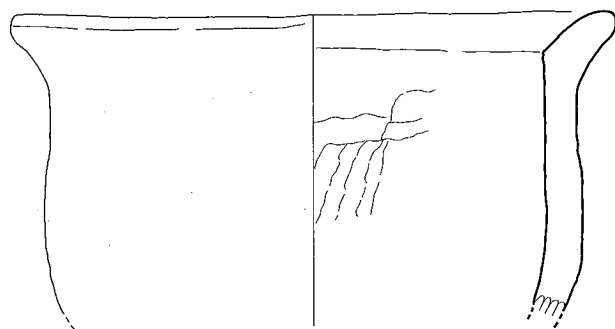


第22図 宇津木遺跡C区SR1及び周辺部出土土器分布図

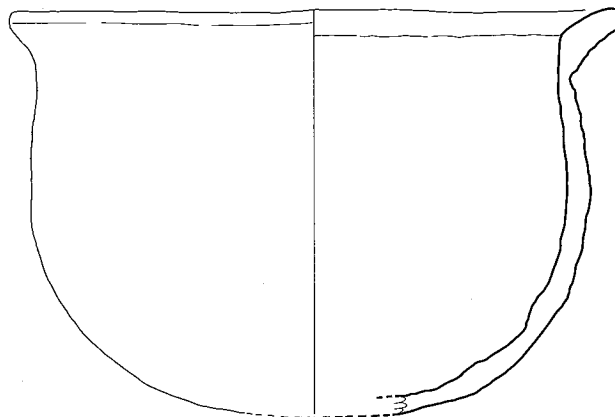




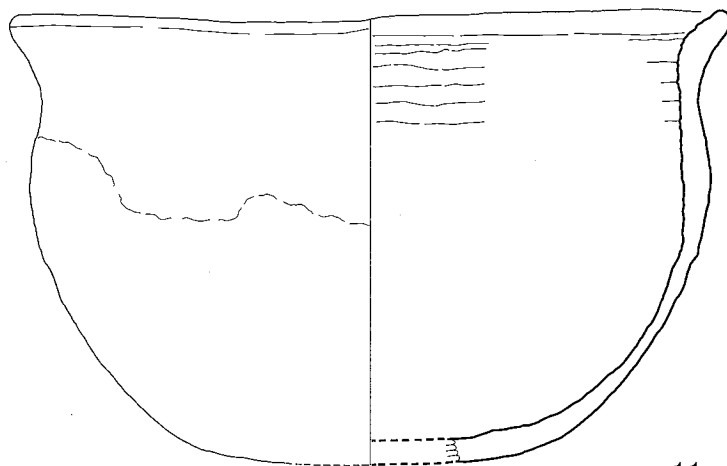
8



9



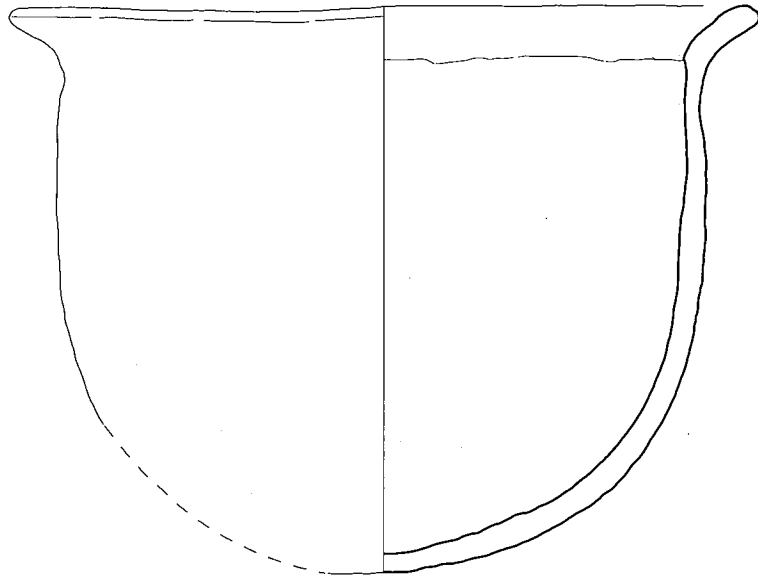
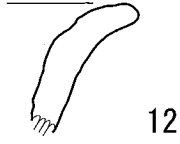
10



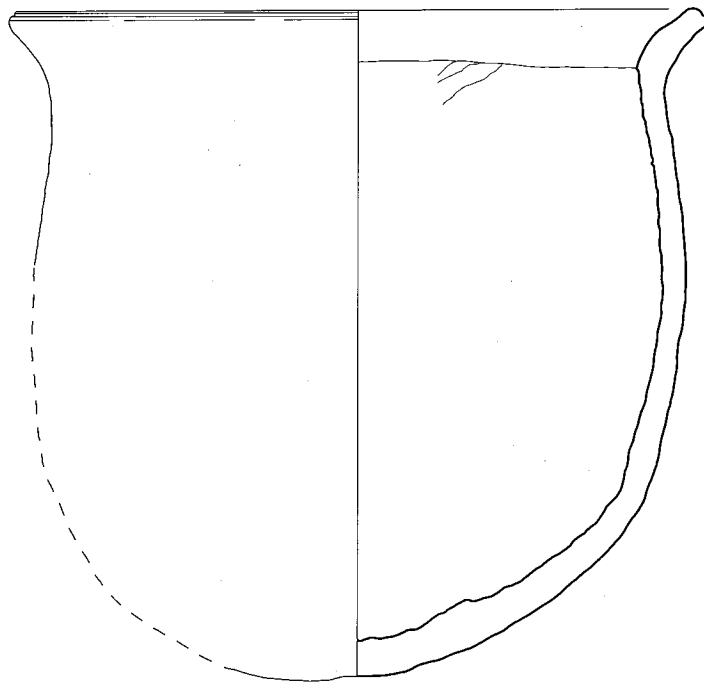
11



第23図 宇津木遺跡C区SR1出土土器実測図(1)



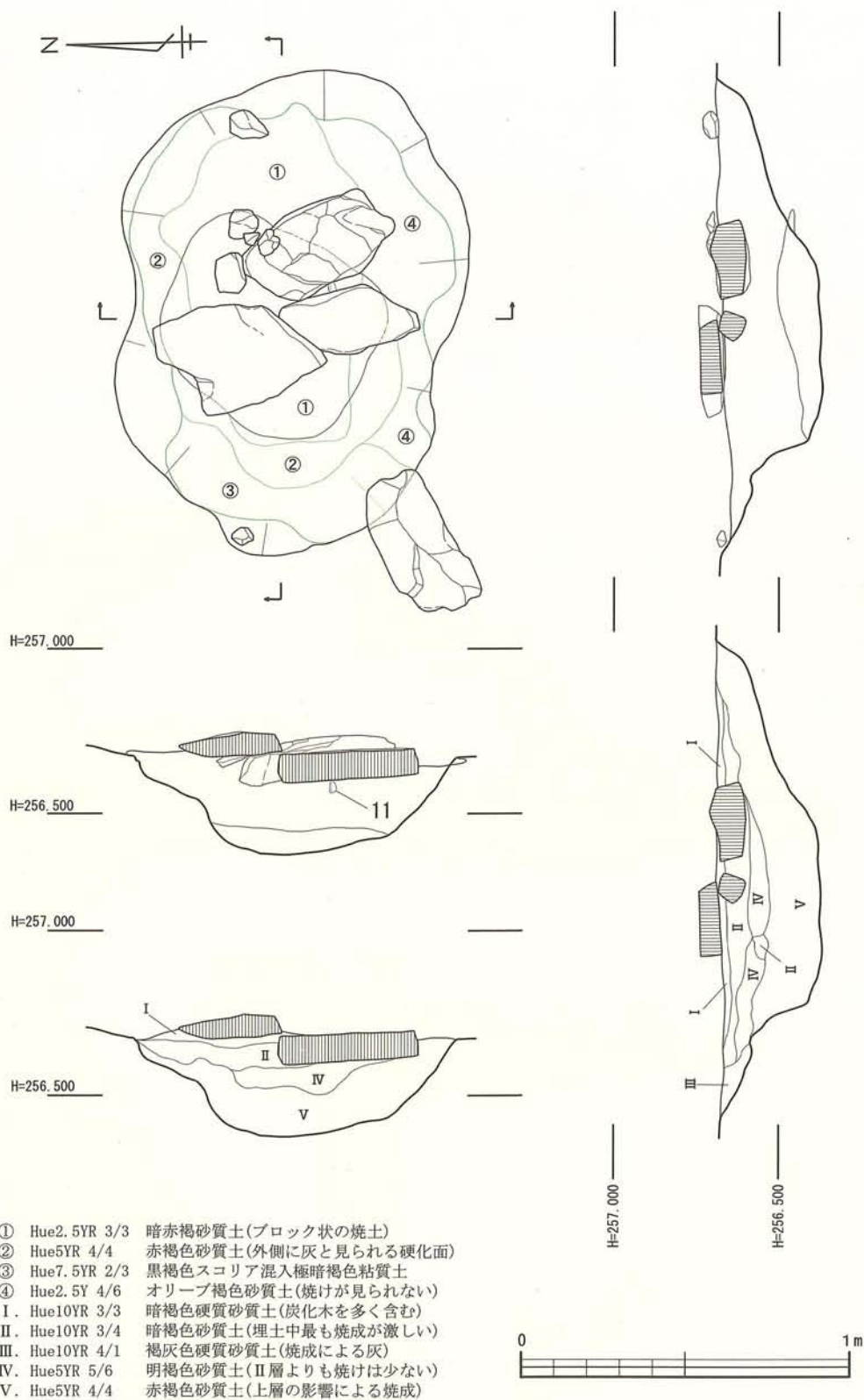
13



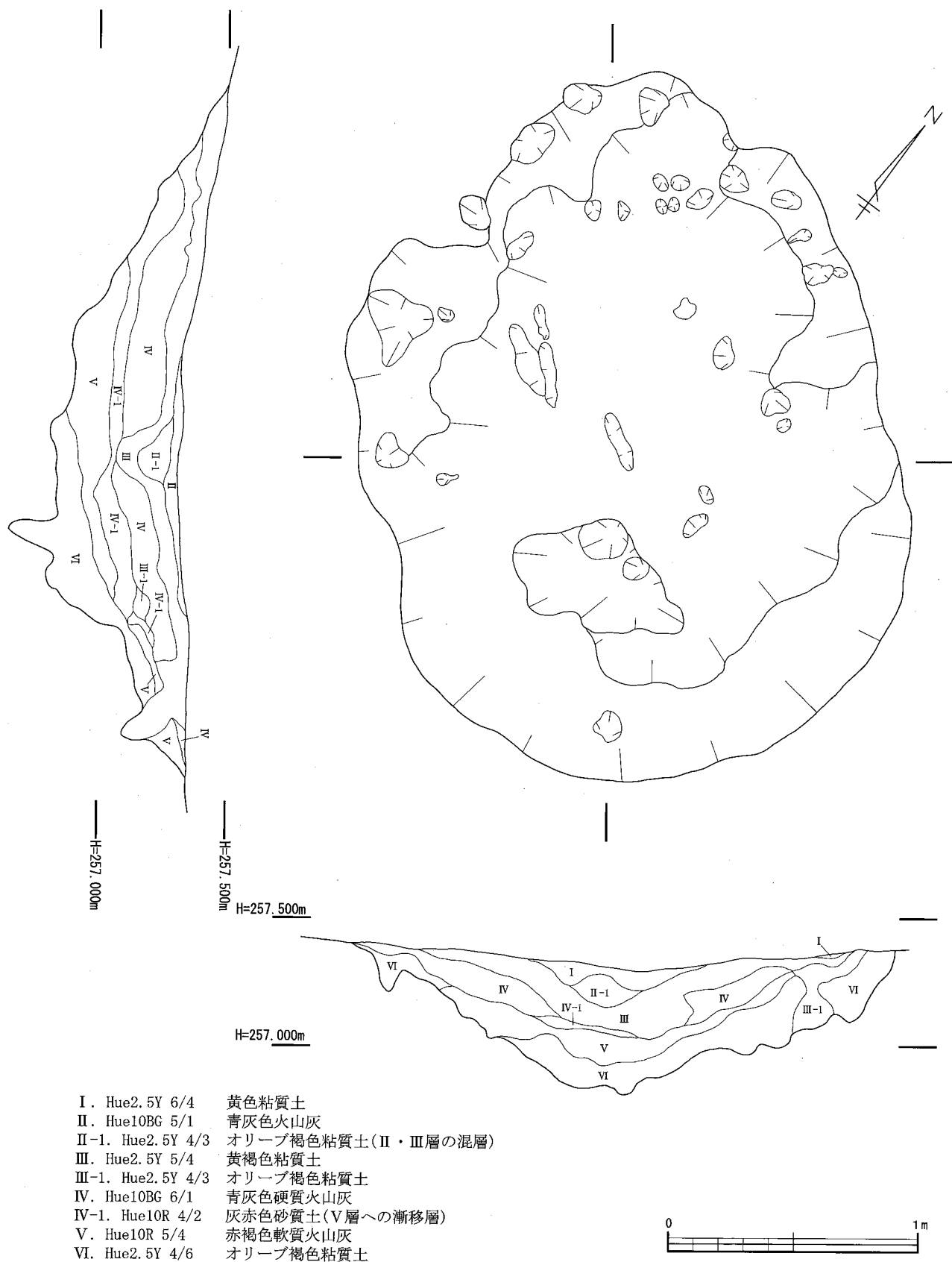
14



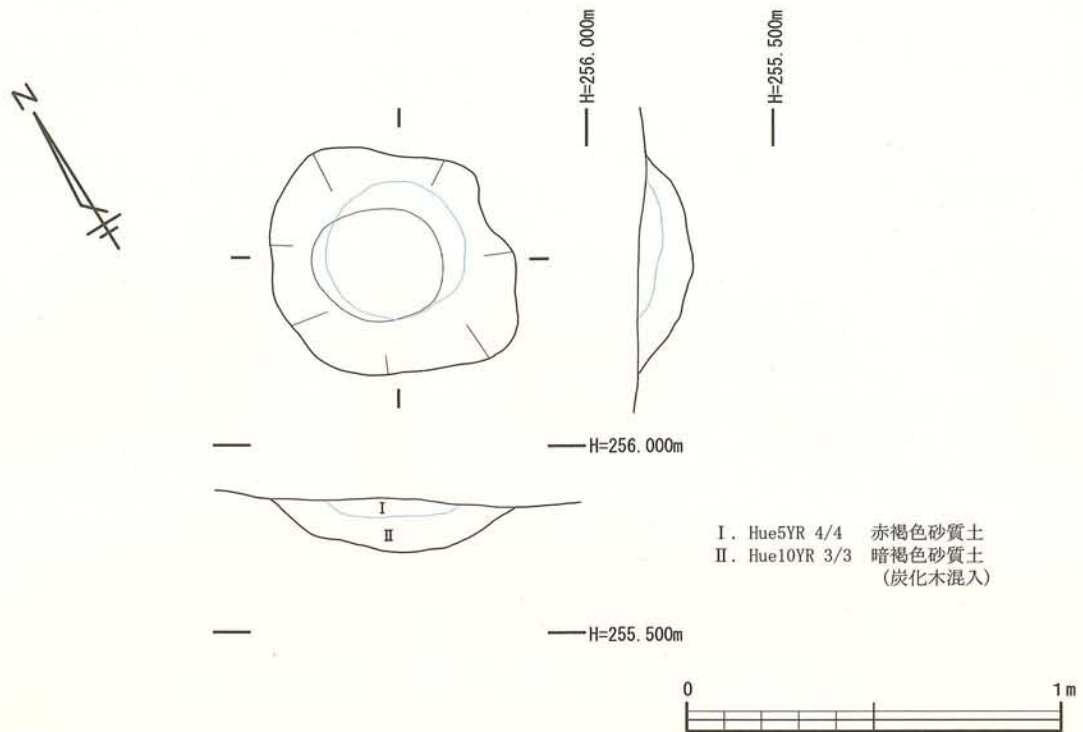
第24図 宇津木遺跡C区SR1出土土器実測図(2)



第25図 宇津木遺跡C区SR2実測図



第26図 宇津木遺跡C区SC5実測図



第27図 宇津木遺跡C区SC6実測図

遺物は1点出土したが、SR1出土土器の胴部(11)の一部であった。

#### SC5 (第26図)

調査区の西端で検出された。底面には無数の大小の穴があった。埋土の状況などから、樹根痕と判断できる。人為的な痕跡は見られなかった。土坑平面は長軸方向が271.5cm・短軸方向が212.0cmと楕円形で、播り鉢型を呈し、深さは47.5cmである。埋土は標準土層のⅢ層が中心であった。

#### SC6 (第27図)

調査区の南西側SR1の近くで検出された。土坑上部には土器溜りがあったが、土坑の内部には至っていない。土坑平面は長軸方向で65.0cm、短軸方向で57.5cmの方形に近い楕円形で、底部は播り鉢型で、深さは15.0cmである。埋土は2層あり、下層には炭化物が混入していた。土坑内部からは土器片が1点出土した。

#### 炭化木群 (第28図)

調査区の中央、SR2のすぐ横で検出された。南南東-北北東ラインに沿って残存しており、周囲には細かい炭化木片が散乱していた。丁度中程に釘と思われる鉄製品(37)が刺さっていたが、人為的な痕跡は見られなかった。







第28図 宇津木遺跡C区炭化木群実測図

## (2) C区の遺構検出面での出土遺物(第29～39図)

C区からは、遺構検出途上で土師器が大量に出土した(第29図)。出土箇所(第30図)は、大まかには、「調査区中央の炭化木群周辺」(第31図)・「SR1周辺」(別添図面)・「調査区北東部」(第34図)の3箇所で大別される。このうち、「調査区北東部」からは甕が、「調査区中央の炭化木群周辺」からは坏・甕・布痕土器が、「SR1周辺」からは高台付椀・緑釉陶器・甕が、それぞれ出土した。以下、詳細を記述する。

### ①土師器(第32～37図)

土師器は、C区より出土した遺物の中で多数を占めている。器種構成は、坏(15、第32図)・高台付椀(黒色土器を含む、16～18、第33図)・皿(19、第33図)・甕(20～24、第34～37図)・布痕土器(25～28、第37図)である。

15は坏で、遺跡中1点のみであった。調査区中央の炭化木群の南西側に散乱して出土した。口縁部や底部は非常にしっかりした作りで、底面はヘラ切りの後丁寧にナデ調整を施す。径の広い底部から真っ直ぐに立ち上がり、口縁部は外反しない。口径14.8cm、底径7.7cm、器高5.2cm。

16は、同じく炭化木群の南西側で出土した。坏部のみが残存していた。下部から真っ直ぐに立ち上がり、口縁部でやや外反する。口径16.0cm、坏部の器高5.7cm。17はSR1の2.5m北側で、口縁部を下に伏せた状態で出土した。器裏面は黒く燻されていないが丁寧に磨かれている。又、器表面中程も丁寧に磨かれた痕跡がある。器形は坏部下部に膨らみを持って立ち上がり、口縁部で外反する。坏部中程に墨書があり、伏せた状態で「合」と判読できる。口径17.0cm、器高7.7cm、高台径8.4cm。18はSR1の約5m北側で出土した。黒色土器で、器裏面から器表面上部まで丁寧に磨かれ、黒く燻されている。口径15.0cm、器高7.05cm、高台径8.4cm。

19は、SR1の約1.6m南東側で出土した。緑釉陶器の皿で、高台部分のみで口縁部などは出土しなかった。キメの細かい土師質の胎土で、緑色の釉薬が全面に付着している。高台は貼付で有段輪高台、坏部底面はヘラ切り調整と思われるが釉薬のため細部までは観察できない。底径6.0cm、高台の高さ0.8cm。防長産と思われる。

20は、調査区の北東隅でまとまって出土した(第32図)。内部は頸部に明瞭な稜線を残し、それより下には横方向のヘラケズリを施す。器表面の胴下半部は剥離が激しい。口径31.6cm、器高25.2cm。21は、SR1の約7m西側で出土した。口縁部のひずみが大きい。器表面は胴下半部に格子目状器具のタタキ痕が見られ、内部は頸部に明瞭な稜線を残し、それより下には縦方向のヘラケズリを施す。器裏面は煤が大量に付着している。口径27.6cm。22は、調査区中央の炭化木群の西南西で出土した。口縁部は大きく外反する。器裏面に見られる頸部から下の稜線やヘラケズリ調整は明瞭でない。口径29.2cm。23は、同じく炭化木群南西側で出土した。非常に小さいが、古代の甕と思われる。器裏面には上記甕と同様の調整を施す。丁寧に作りである。口径9.8cm。24は口縁部が大きく外反し、器裏面には明瞭な稜線を残し、それより下には不定方向のヘラケズリを施す。

25～28は、いずれも調査区中央の炭化木群の周囲に散乱していた。布痕土器の殆どは炭化木群の南西側を中心に散乱している。25のみが口径復元可能であった。口径10.2cm。26と27は近接していることから同一個体と思われる。なお、布痕土器が出土したのは、この炭化木群の周囲のみで、それ以外の場所では全く出土しなかった。

## ②須恵器(第37～38図)

須恵器は壺及び甕胴部の2点出土した。須恵器の出土は、この2点のみである。

29は、調査区の北西隅、倒木痕と思われる攪乱の横で出土した。口縁部が欠損しているが、ラッパ状に外反する壺である事がわかる。全体的に作製時におけるひずみが見られ、器表面には自然釉が付着している。底部は貼付整形で、底径9.8cm。30は調査区中央の炭化木群の南東側で出土した。甕の胴部と思われる。器表面にタタキ目痕が、器裏面に押具痕と思われる同心円状のタタキ痕が見られた。

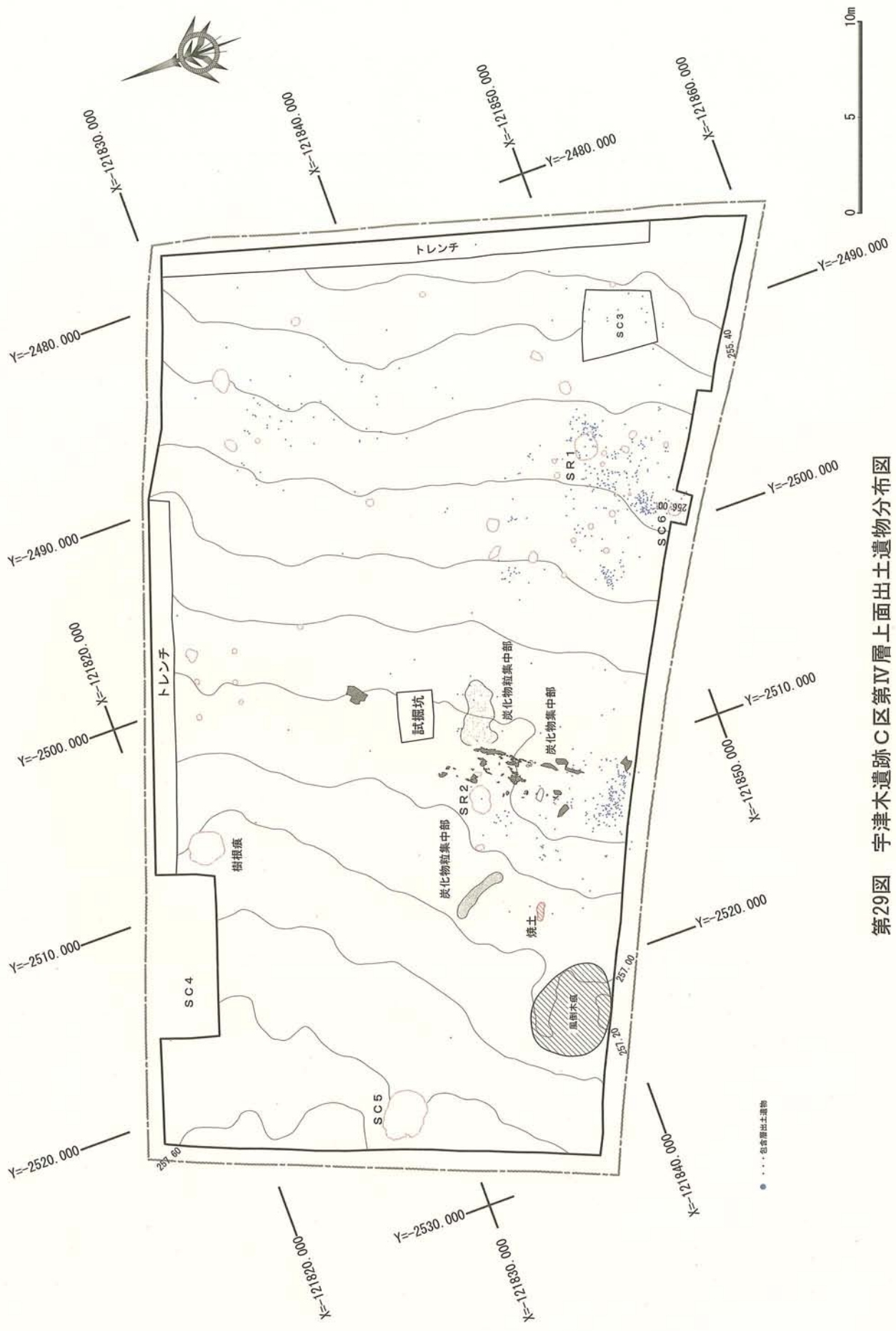
## ③その他の土器(第39図)

C区では、古代の土師器を中心に出土したが、その他に古墳時代や縄文時代の土器も出土している。しかし、出土量としては非常に少ない。

31は古墳時代の小型丸底壺の断片と思われる。器表裏面にハケ目調整を施す。32は古墳時代の台付き甕の高台である。器表裏面に丁寧なナデ調整を施す。底径5.2cm。33は縄文土器の深鉢である。口縁部はラッパ状に開き、くびれ部分に貝殻腹縁文を綾杉状に施文する。丸尾式と思われる。34は小片だが浅鉢の口縁部片と思われる。内湾する口縁部に沈線を施文する。西平式と思われる。

## ③石器・鉄器(第39図)

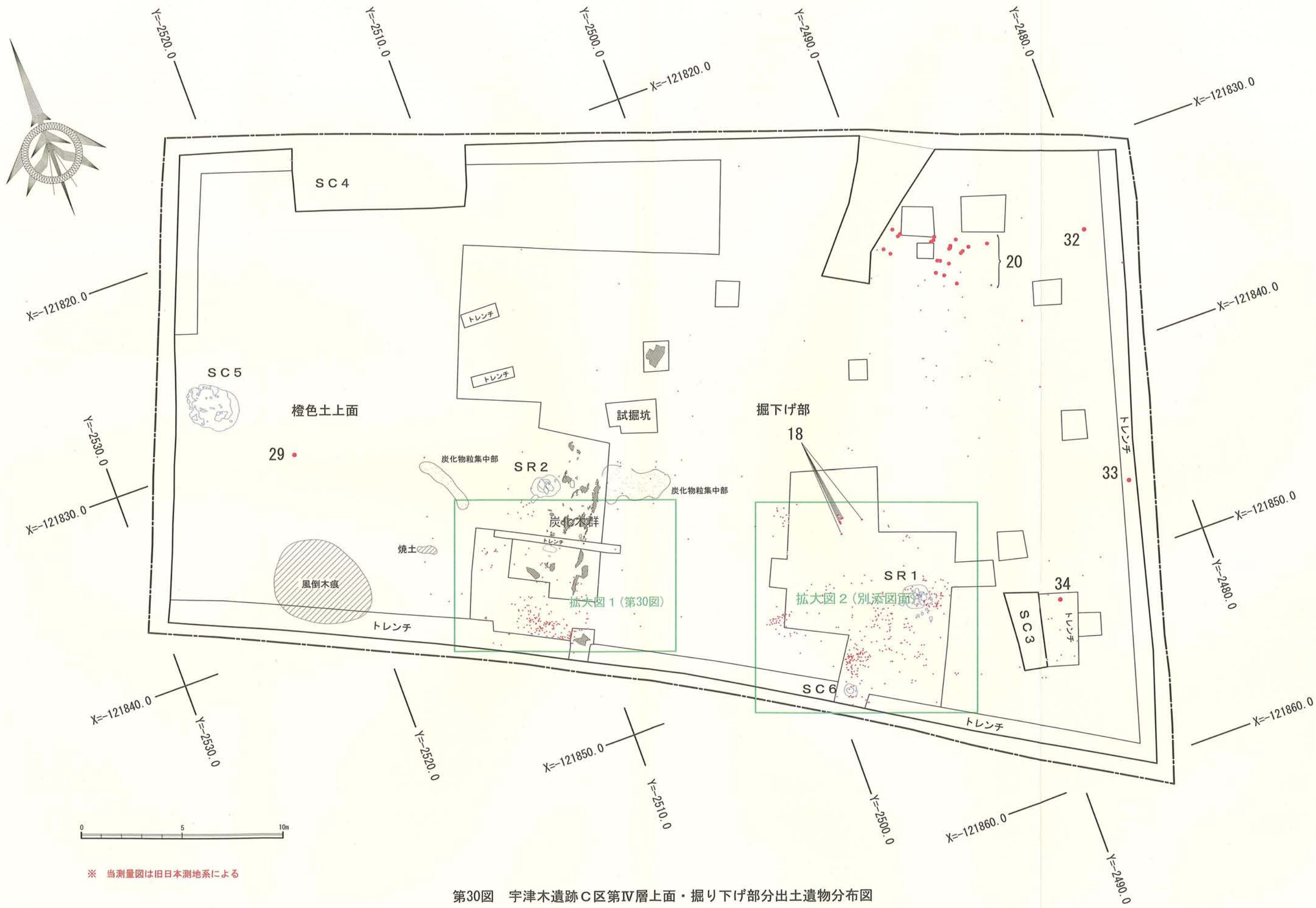
35・36は敲き石と思われる。安山岩製で、一部表面に砥石のような平滑な面が見られるが、石の成分は砥石ほどきめ細やかではない。35は、長軸19.1cm、短軸6.2cm、身厚2.7～3.8cm、重量618g。36は長軸16.7cm、短軸9.4cm、身厚1.3～5.3cm、重量1220g。37はSR2の南東側で検出された炭化木に突き刺さった状態で検出された。全体的に錆膨れしているために内容は不明だが、釘のような断面四角形の部分が見られる。全長6.2cm。重量14.0g。



第29図 宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物分布図

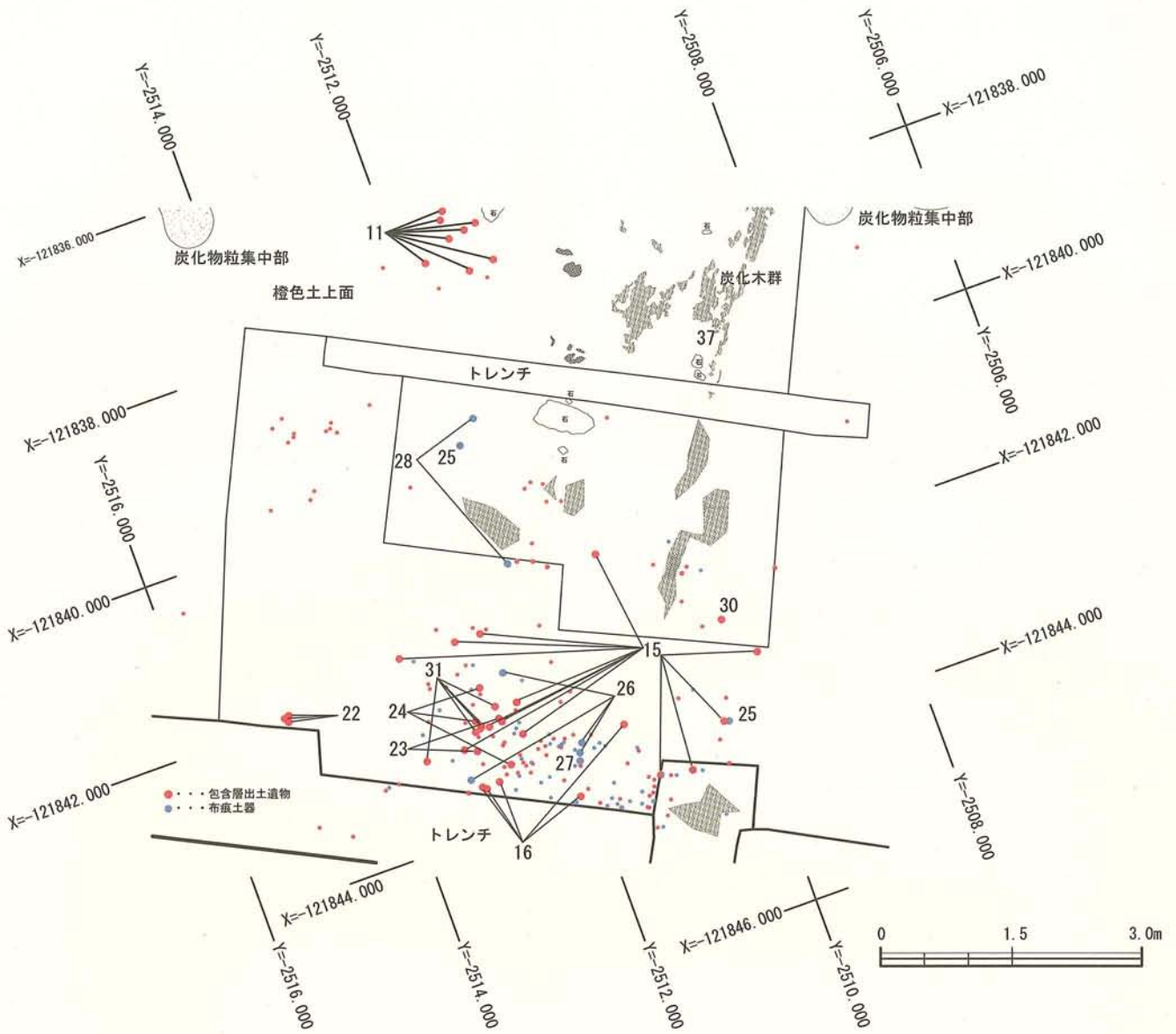




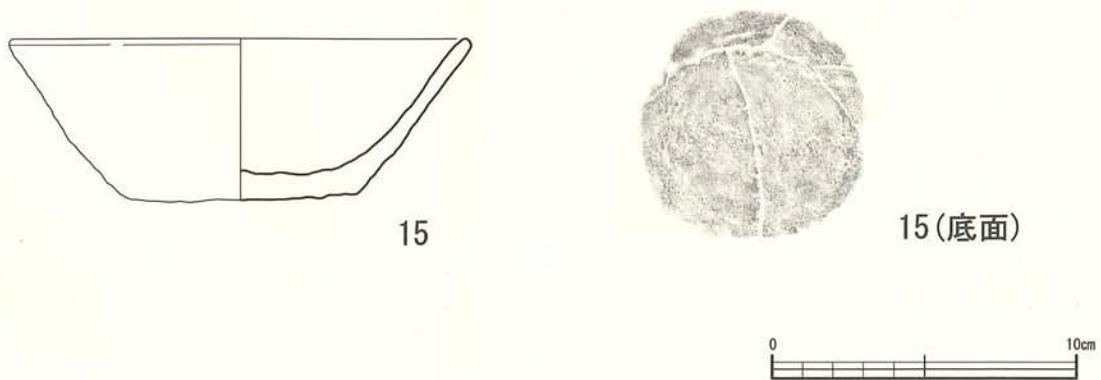


※ 当測量図は旧日本測地系による

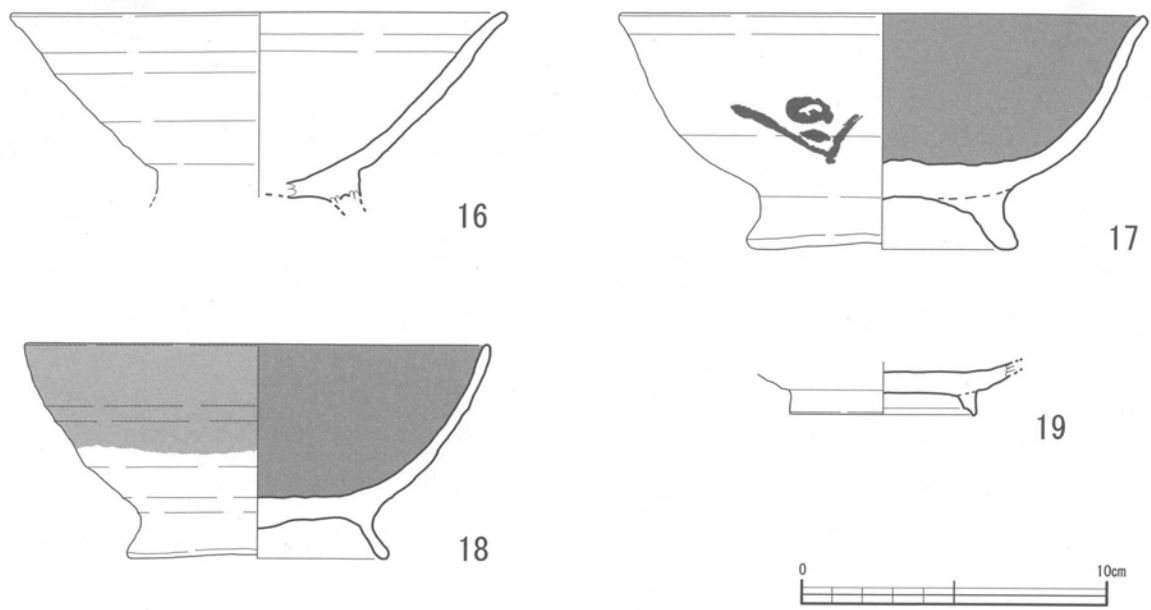
第30図 宇津木遺跡C区第IV層上面・掘り下げ部分出土遺物分布図



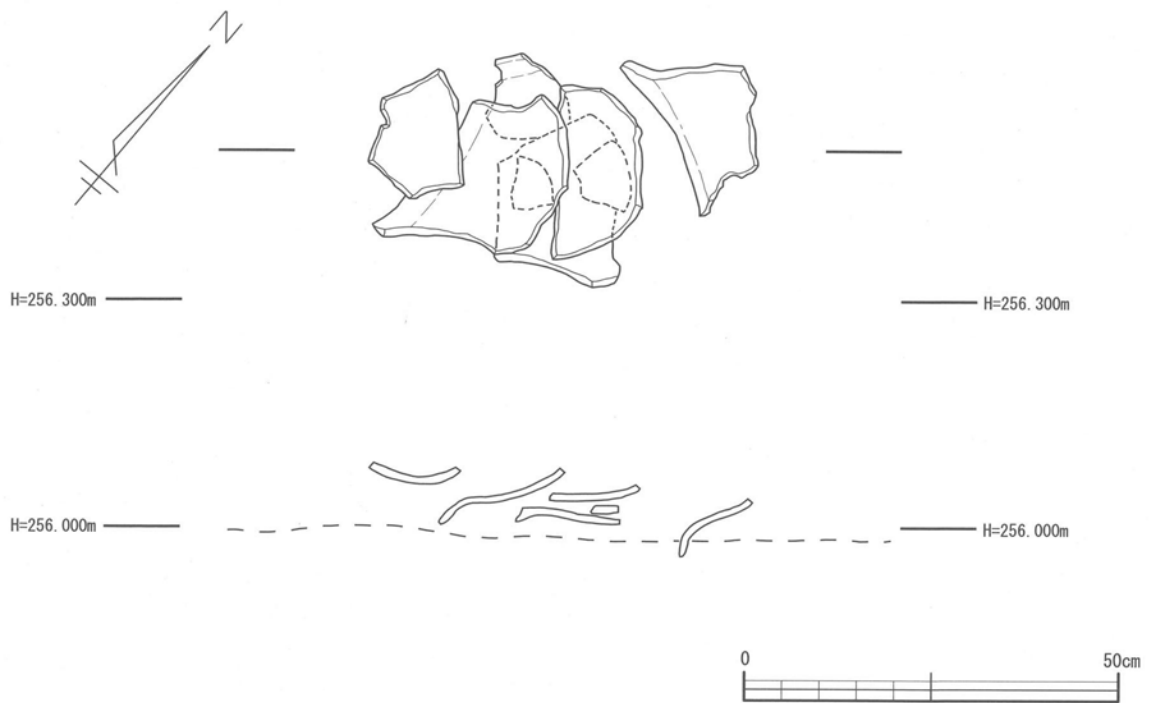
第31図 宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物分布図(拡大図1)



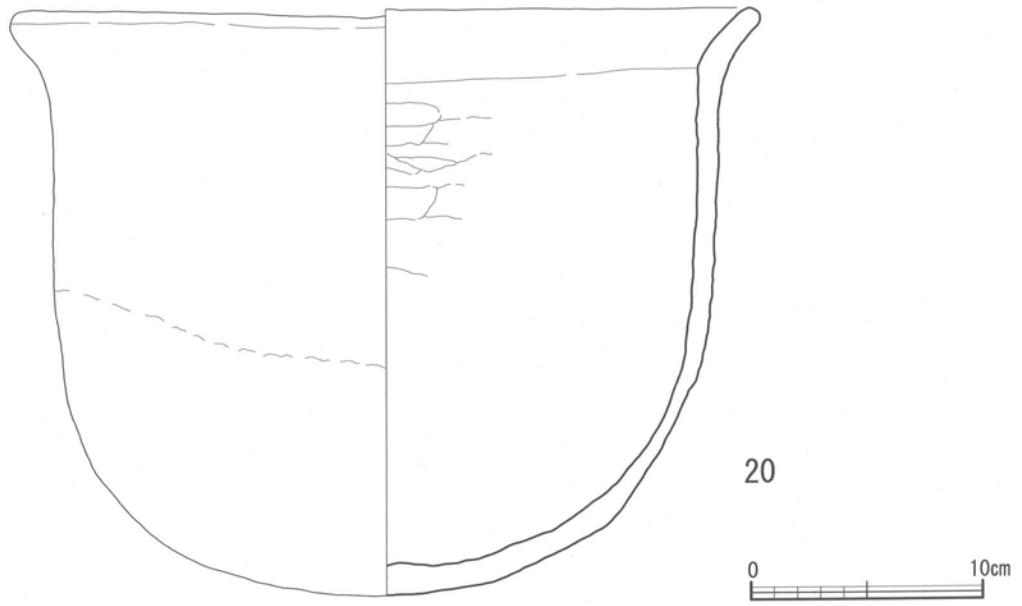
第32図 宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(1)



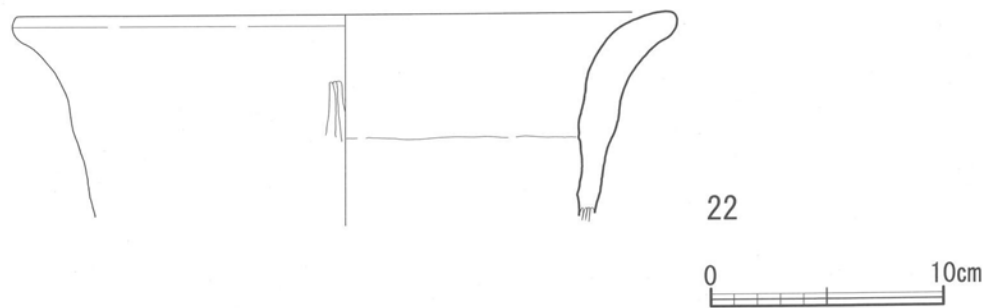
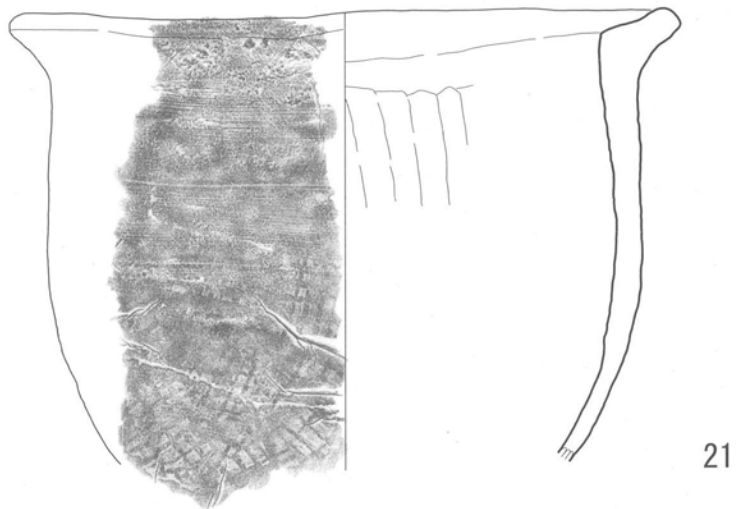
第33図 宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(2)



第34図 宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(北東部・20)

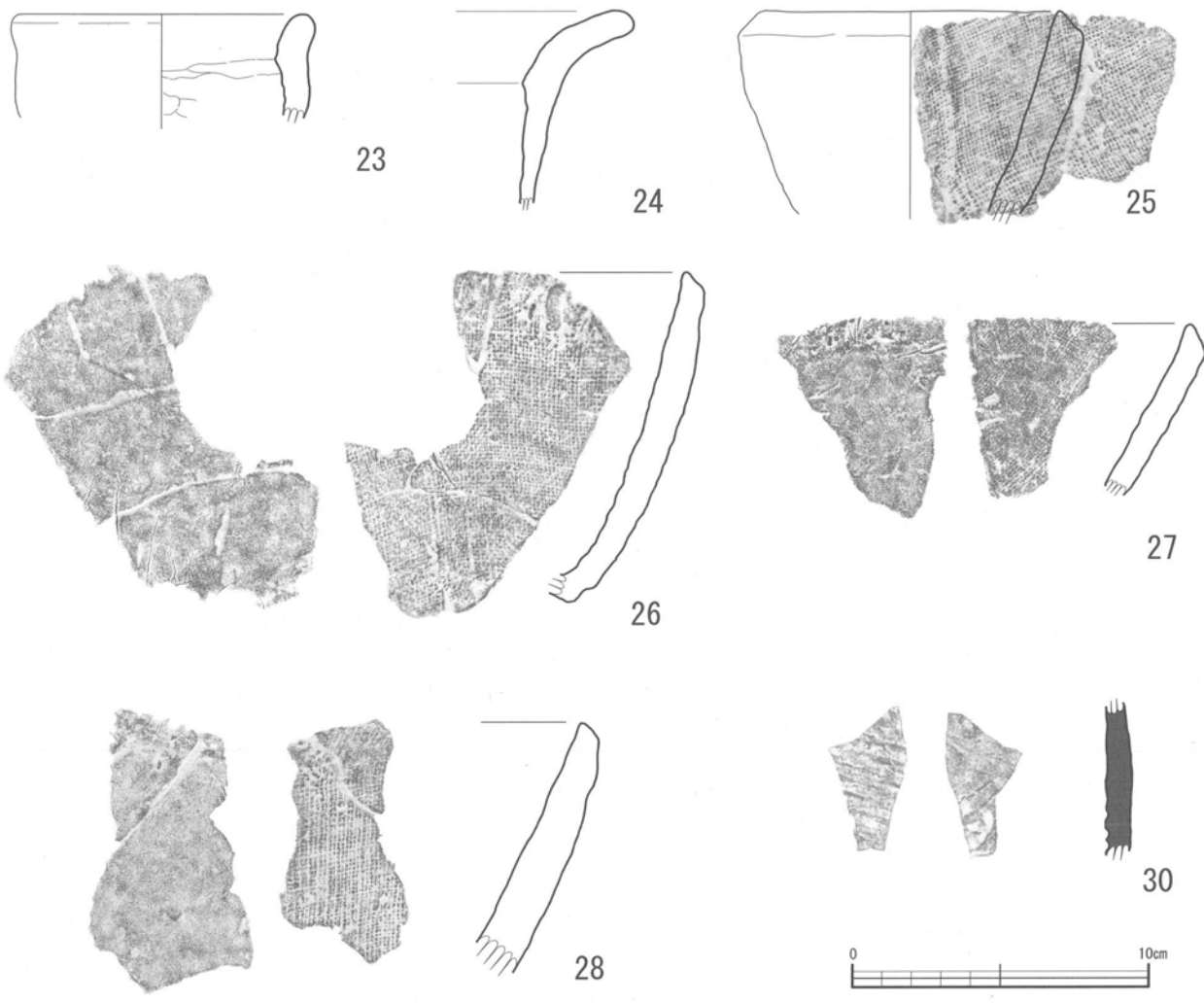


第35図 宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(北東部)

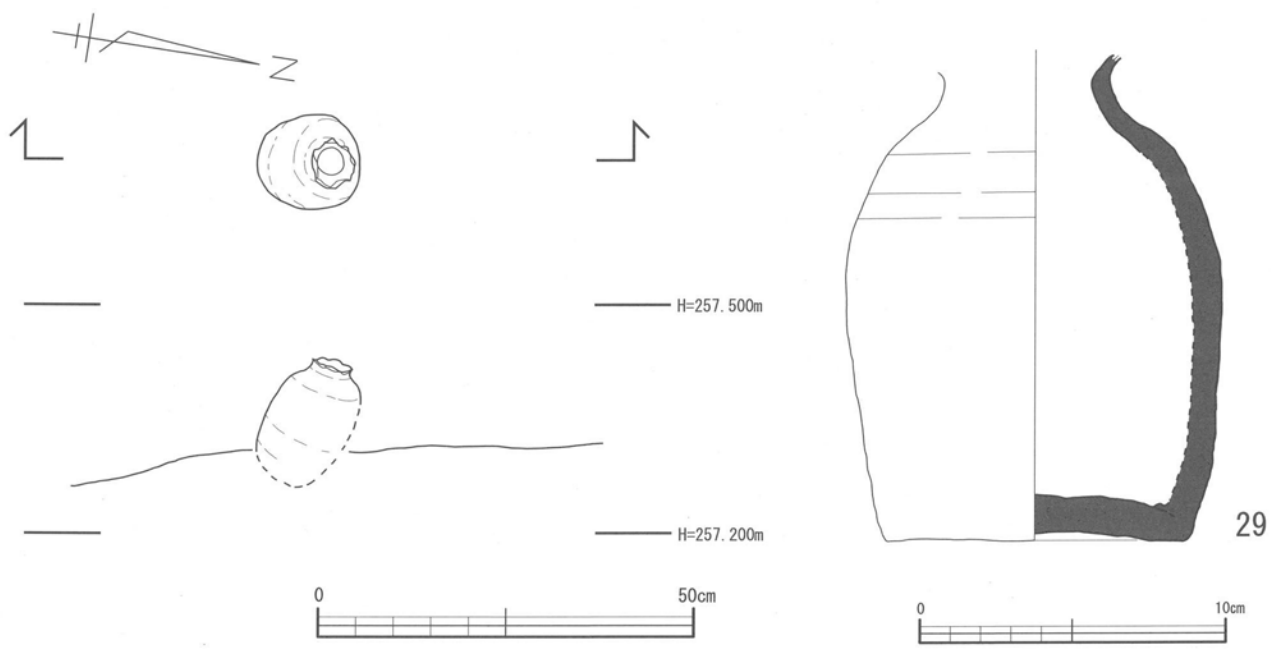


第36図 宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(3)

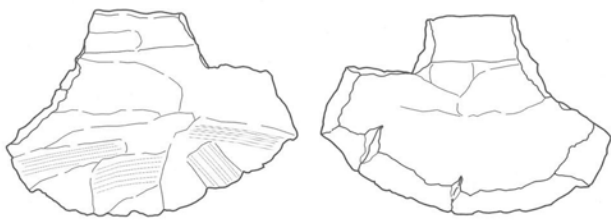




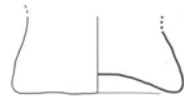
第37図 宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(4)



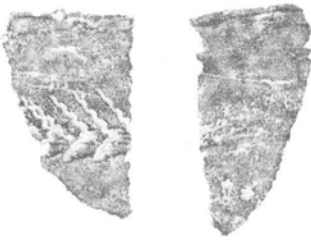
第38図 宇津木遺跡C区第IV層上面出土須恵器実測図



31



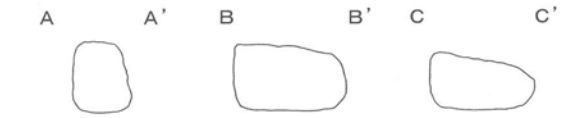
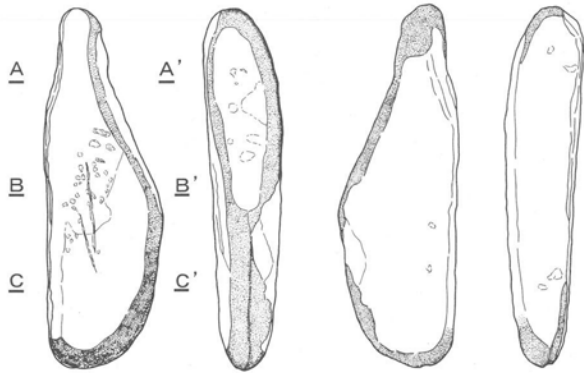
32



33



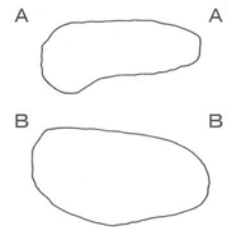
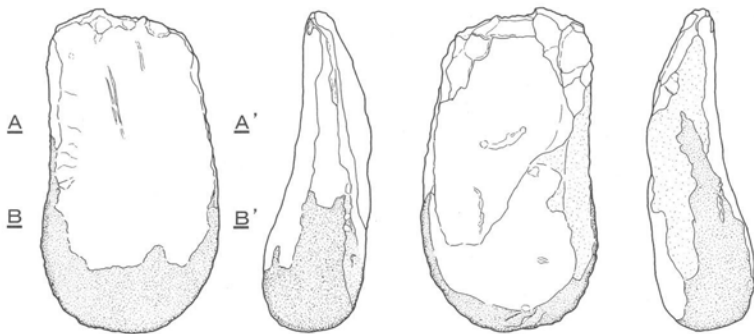
34



35



37



36



第39图 宇津木遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(5)

表1 宇津木遺跡出土土器観察表(1)

番号	出土地	出土層及び遺構	種別	器種 部位	器色		調整		胎土	備考
					表面	裏面	表面	裏面		
1	A区	IVA層	土師器	甕 口縁~胴部	浅黄橙 Hue10YR 8/3	にぶい黄橙 Hue10YR 7/4	ヨコナデ ナデ	ナデ 頸部下ヘラケズリ	精良	
2	A区	IVA層	土師器	甕 頸部	浅黄橙 Hue10YR 8/4	浅黄橙 Hue10YR 8/3	ヨコナデ	ヨコナデ 頸部下ヘラケズリ	径2mmの褐色砂粒を多く含む	
3	A区	IVA層	土師器	甕 口縁~頸部	黒褐 Hue10YR 3/1	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	ナデ	ヨコナデ ナデ	径2~3mmの黒色・灰色砂粒を多く含む	
4	A区	IVA層	縄文土器	深鉢 口縁部	にぶい褐 Hue7.5YR 5/4	褐灰 Hue7.5YR 4/1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	径1mmの灰色砂粒・径0.5mmの透明砂粒を多く含む	三万田式
5	A区	IVA層	縄文土器	深鉢 口縁部	黒褐 Hue5YR 3/0	褐灰 Hue5YR 6/0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	径1mm前後の透明・黄灰色・灰色砂粒を多く含む	三万田式
6	A区	IVA層	縄文土器	深鉢 頸部	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	にぶい黄橙 Hue10YR 6/4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	径1~2mm前後の黄灰色砂粒を多く含む	三万田式
7	A区	IVA層	縄文土器	深鉢 底部	橙 Hue7.5YR 7/4	にぶい黄橙 Hue10YR 4/1	ナデ	ナデ	径1mmの黄灰色砂粒(御池ボラ?)を多く含む	
8	C区	IVA層 SR1	土師器	甕 口縁~頸部	橙 Hue7.5YR 6/6	にぶい黄橙 Hue10YR 7/4	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ 頸部下ヘラケズリ	精良	
9	C区	IVA層 SR1	土師器	甕 口縁~胴部	にぶい黄橙 Hue10YR 7/4	褐灰 Hue10YR 6/1	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 頸部下ヘラケズリ	精良	
10	C区	IVA層 SR1	土師器	甕 口縁~底部	にぶい黄橙 Hue10YR 6/4	にぶい黄橙 Hue10YR 6/4	ヨコナデ ナデ	ナデ 頸部下ヘラケズリ	精良	
11	C区	IVA層 SR1・2	土師器	甕 口縁~底部	橙 Hue5YR 6/8	橙 Hue7.5YR 6/8	ヨコナデ	ヨコナデ 頸部下ヘラケズリ	精良	
12	C区	IVA層 SR1	土師器	甕 口縁~頸部	にぶい黄橙 Hue10YR 7/4	にぶい黄橙 Hue10YR 7/4	ヨコナデ	ヨコナデ 頸部下ヘラケズリ	径2mmの灰色砂粒を少し含む	
13	C区	IVA層 SR1	土師器	甕 口縁~底部	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	橙 Hue7.5YR 7/6	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 頸部下ヘラケズリ	径2~3mmの灰色砂粒を多く含む	
14	C区	IVA層 SR1	土師器	甕 口縁~底部	褐灰 Hue7.5YR 4/1	橙 Hue7.5YR 7/6	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 頸部下ヘラケズリ	精良	
15	C区	IVA層	土師器	坏 口縁~底部	橙 Hue5YR 7/6	にぶい橙 Hue5YR 6/4	ヨコナデ	ヨコナデ	精良	底部ヘラ切り後ナデ
16	C区	IVA層	土師器	高台付椀 坏部	橙 Hue7.5YR 7/6	橙 Hue5YR 7/8	ヨコナデ	ヨコナデ	精良	
17	C区	IVA層	土師器	高台付椀 口縁~底部	にぶい黄橙 Hue10YR 7/4	灰白 Hue5Y 7/1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良	「合」の墨書
18	C区	IVA層	土師器	高台付椀 口縁~底部	橙 Hue7.5YR 7/6	黒 Hue N 2/0	ヨコナデ	ヘラミガキ	精良	
19	C区	IVA層	緑釉陶器	皿 底部	浅黄橙 Hue10YR 8/4	—	ヨコナデ	ヨコナデ	精良	底部ヘラ切り
20	C区	IVA層	土師器	甕 口縁~底部	橙 Hue5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 7/6	ヨコナデ	ヨコナデ 頸部下ヘラケズリ	精良	
21	C区	IVA層	土師器	甕 口縁~胴部	にぶい黄橙 Hue10YR 7/4	にぶい黄橙 Hue10YR 7/4	ヨコナデ タタキ	ヨコナデ 頸部下ヘラケズリ	精良	
22	C区	IVA層	土師器	甕 口縁~頸部	にぶい黄橙 Hue7.5YR 7/2	褐灰 Hue7.5YR 6/1	ヨコナデ	ヨコナデ 頸部下ヘラケズリ	精良	
23	C区	IVA層	土師器	甕 口縁~胴部	にぶい黄橙 Hue10YR 7/3	褐灰 Hue10YR 6/1	ヨコナデ	ヨコナデ 頸部下ヘラケズリ	精良	
24	C区	IVA層	土師器	甕 口縁~頸部	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	橙 Hue7.5YR 7/6	ヨコナデ	ヨコナデ 頸部下ヘラケズリ	径2~5mmの灰色砂粒を少し含む	
25	C区	IVA層	土師器	布痕土器 口縁~胴部	橙 Hue5YR 7/8	橙 Hue7.5YR 7/6	ナデ	布痕	精良	
26	C区	IVA層	土師器	布痕土器 口縁~底部	橙 Hue5YR 7/8	橙 Hue5YR 7/8	ナデ	布痕	径1mmの黄色砂粒を多く含む	
27	C区	IVA層	土師器	布痕土器 口縁~胴部	橙 Hue7.5YR 7/6	橙 Hue7.5YR 7/6	ナデ	布痕	黒褐色砂粒を少し含む	

表2 宇津木遺跡出土土器観察表(2)

番号	出土地	出土層及び遺構	種別	器種 部位	器色		調整		胎土	備考
					表面	裏面	表面	裏面		
28	C区	IVA層	土師器	布痕土器 口縁~胴部	橙 Hue7.5YR 7/6	橙 Hue7.5YR 7/6	ナデ	布痕	精良	
29	C区	IVA層	須恵器	壺 頸~底部	青灰 Hue 5B 6/1	青灰 Hue 5B 6/1	ヨコナデ	ヨコナデ	精良	
30	C区	IVA層	須恵器	甕 胴部	暗青灰 Hue 5B 4/1	青灰 Hue 5B 6/1	タタキ	押し具痕	精良	
31	C区	IVA層	土師器	小型丸底壺 口縁~胴部	にぶい黄橙 Hue10YR 7/4	にぶい黄橙 Hue10YR 5/1	ナデ 刷毛目	ナデ	径1mmの黄灰色砂粒を少し含む	
32	C区	IVA層	土師器	甕 脚台	浅黄橙 Hue10YR 8/3	—	ナデ	—	径1mmの灰色砂粒を多く含む	
33	C区	調査区東 トレンチ内	縄文土器	深鉢 口縁~頸部	暗灰 Hue N 3/0	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	貝殻条痕ナデ 貝殻腹縁文	貝殻条痕ナデ	径1mmの透明・褐色砂粒を多く含む	丸尾式
34	C区	SC3ト レンチ内	縄文土器	深鉢 口縁部	灰 Hue10Y 5/1	黄灰 Hue2.5Y 4/1	ナデ 横位沈線文	ナデ	径1mmの黄灰色砂粒を多く含む	西平式

表3 宇津木遺跡出土石器・鉄器観察表

番号	出土地	出土層位	品 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最小厚 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材
35	C区	IVA層	敲き石	19.1	6.2	2.7	3.8	618.0	安山岩
36	C区	IVA層	敲き石	16.7	9.4	1.3	5.3	1,200.0	安山岩
37	C区	調査区中央 炭化木群	釘?	6.2	—	—	—	14.0	—

## 第Ⅳ章 ま と め

### 第1節 陥し穴遺構について

#### 1. はじめに

今回発掘調査を実施した宇津木遺跡からは、狩猟用の陥し穴遺構が3基検出された。時期については、同じく狭野地区で発掘調査された榑粉山遺跡と同じような時期・性格を持つものと思われる。

#### 2. 中世陥し穴遺構の類例

現在、宮崎県内では、350基近い陥し穴遺構が確認されている<sup>(1)</sup>。しかし、その大半は旧石器～縄文時代のもので、その時期以外の遺構は時期不明として扱われる事が多い。つまり、明確に中世と言える陥し穴遺構はごく僅かである。現在、宮崎県内で検出されている旧石器・縄文時代以外の陥し穴遺構を検証しよう。

##### (1) 榑粉山遺跡<sup>(2)</sup>

榑粉山遺跡は、高原町の南西部、標高約300mの尾根上に立地している。発掘調査により、中世の陥し穴が15基検出された。形状は宇津木遺跡とほぼ同じで、高原スコリア降下前と降下後の2時期に使用したものと思われる。

##### (2) 荒迫遺跡<sup>(3)</sup>

荒迫遺跡は榑粉山遺跡の北東5km、高原町大字広原字荒迫に位置する。遺跡の中心に位置するB1地区から陥し穴遺構が2基検出された。2基とも土坑内部や逆茂木内に高原スコリアが混入している。

##### (2) 大鹿倉遺跡群<sup>(4)</sup>

大鹿倉遺跡群は榑粉山遺跡の北東約3.2km付近に位置する遺跡である。平成9年度から試掘及び本掘調査が実施されたが、弥生時代から古代までの遺物が幅広く出土した。その中で陥し穴遺構が5～6基検出されている。形態としては、榑粉山遺跡のものと同様で、逆茂木内には高原スコリアと炭化物が確認されている。正式な報告書が未刊行なため詳細は不明である。

##### (3) 中ノ原遺跡<sup>(5)</sup>

西臼杵郡高千穂町の中ノ原遺跡では、陥し穴遺構が4基検出されている。いずれもアカホヤ火山灰層(VI層)の上層(V層)で確認されており、さらにその上層(Ⅲ～Ⅳ層)は縄文土器から陶磁器まで幅広く出土する遺物包含層が形成されている。時期については、縄文時代前期以降としか言及できない状況であったが、形状は榑粉山遺跡のものと非常によく似ている。

##### (4) 上野原遺跡<sup>(6)</sup>

東臼杵郡東郷町の上野原遺跡では、弥生時代の陥し穴遺構の他、時期不明の陥し穴状遺構が14基検出されている。このうち、時期不明とされている陥し穴については、平面プランは



弥生時代のもののような楕円形ではなく、長方形を呈しており、大きさは約1.5×0.4m。底部には2～6本の逆茂木が不規則に並んでいる。

#### (5) 天神河内第1遺跡<sup>(7)</sup>

宮崎郡田野町の天神河内第1遺跡では、中世から近世までの土坑が128基検出されている。形態は長方形・円形・長楕円形・不定形様々で、大きさは1m前後のものから、大きいものは6mを越えるものもある。時期・用途については不明としているが、現在のところ、この中の幾つかは、形状的に「逆茂木のない陥し穴遺構」と認識されている。遺構埋土からは土師皿や青磁等の遺物が出土している。

### 3. 逆茂木の状況について

今回の調査で検出された陥し穴の場合、逆茂木内の埋土という点で考えると、楢粉山遺跡のように高原スコリアの充填が見られなかったという相違点が見られる。SC1・3は、逆茂木痕が少ないため、1時期のみの利用と思われる、SC2は逆茂木の数や配置状況が楢粉山遺跡と酷似しているため、2時期の可能性が高い。逆茂木の立て方については、遺構底部に穿たれた穴に垂直に材木を設置していた事がSC3の出土状態でわかる。逆茂木の樹種については、樹種同定を実施していないものの、楢粉山遺跡で出土したのも同じ種類であった。楢粉山遺跡の樹種同定では広葉樹と出たが、出土した炭化木は非常に繊維が細かく、他で出土していた炭化木とは明らかに異なる印象を受ける。又、楢粉山遺跡でも同じであったが、穴の壁のみに炭化木が残存し、中心部には見られない事などから、現状では中空状のもの(竹など)を想定している。

### 4. 陥し穴の作成方法及び設置方法

陥し穴の作成方法については、楢粉山遺跡の事例のように短軸壁面に「U」字状の工具痕が残存している事から、長軸方向に掘り進めていったと考えていた。しかし今回の調査では、SC1から長軸壁面に「U」字状の工具痕が見られ、対して短軸壁面には見られなかった。ただ、この事例はSC1のみで、他の陥し穴には見られなかった。楢粉山遺跡とは若干作成方法が異なるか、この陥し穴のみ何かの作為により手を加えられたと考えられる。

続いて設置方法についてだが、SC1・2は、南側の谷に対して並行して設置されているのに対し、SC3は、SC1・2に対して直角に設置されている。SC1・2については何らかの規則性は感じられるが、検出数の少なさや調査区の狭さから、広域的な配置の規則性については判然としなかった。

### 5. 陥し穴の年代について

C区SC3の本体埋土の中から、真っ直ぐに立ち上がった状態で炭化木が検出された。放射性炭素分析を実施したところ、西暦1440年という年代が出された。

楢粉山遺跡でも、同様に陥し穴の逆茂木痕から炭化木が検出された。分析の結果、西暦1525・1560・1630年という年代が出された。同じく楢粉山遺跡において、高原スコリア直下で検出

された炭化木を分析したところ、西暦1440年という年代が出された<sup>(2)</sup>。宇津木遺跡SC3の分析結果と全く同じ年代である。ところが、宇津木遺跡C区の、陥し穴と同じ検出面から検出された炭化木の分析結果は西暦1010年である。同じ検出面でも数値が大きく異なっている。

この炭化木(逆茂木)が、時期的に陥し穴のどの時点で利用されていたものなのかが判明していない以上は不明とせざるを得ないが、本体の埋土に残されていた事、埋土が高原スコリアしかなかった事を考慮すると、高原スコリア降下直後(あるいは降下後暫くしてから)に陥し穴としての機能を終了した事がわかる。ただ、陥し穴が造られた時期については不明である。

## 6. 陥し穴附随遺構について

今回の調査により、C区の北西隅よりSC4が検出された。元々は樹根痕であったのを、中心部を筒状に掘り、さらに根痕の一部を足が掛けられるように改造している。遺物については全く出土しなかったため、遺構の性格については不明である。埋土については、遺構上部が高原スコリアであるのに対し、円筒部分には高原スコリアが全く見られない。むしろ、円筒部分を掘り進めた際に出てきた廃土である可能性が高い。壁面一面に陥し穴と同様の「U」字状の工具痕が見られるのと、埋土の堆積状況が高原スコリア降下前に作られた陥し穴と同じである事から、陥し穴に附随する何らかの遺構であると想定した。大きさとしては、調査担当者(身長183cm)が遺構内に屈んでややきつめであった。別の例で説明するなら、土葬の桶のような広さであろうか。深さは頭が少し出る程度である。当時の平均身長を考えるなら、充分余裕を持って潜む事が出来るのではないだろうか。逆茂木のない陥し穴も考えられるが、榑粉山・宇津木遺跡ではそのような形態は全く見られない事から、別種の陥し穴とは考えにくい。人1人が丁度屈めるスペースを考えるなら、一種の潜み穴と考えたい。

## 第2節 石組炉遺構について

### 1. 遺構の概要

今回の発掘調査では、C区より石組炉が2基検出された。いずれも安山岩を使用したものである。SR1は縦長の石を土坑の中心部分を覆うように立てて置かれていたのに対し、SR2は縦長の厚みの薄い石が寝かせて置かれていた。両方とも廃棄された後は、土砂が自然堆積し、その後に黒褐色スコリアが降下したものと思われる。

### 2. 古代石組炉遺構の類例について

古代の石組炉遺構については、今のところ県内における検出例が殆ど見当たらない。その中で、下記に挙げた荒迫遺跡では、古代の畠遺構検出面と同じ面から炉(含石有無)が出土している。今のところ、古代に位置付けられる数少ない事例である。

#### (1) 荒迫遺跡<sup>(3)</sup>

荒迫遺跡は楯粉山遺跡の北東5km、高原町大字広原字荒迫に位置する。平成6～8年度にかけて行われた発掘調査により、B1地区から3基・B2地区から6基・B4地区から2基の計11基検出された。又、D地区からは屋外竈が1基検出された。

B1地区の3基の場合、SR1・2は調査区東側に固まり、SR3は南側と1基だけ離れている。SR1のみ遺構南東側に配石されている。遺物は少ないが、SR1周辺とSR3内部より鉍滓(銀銅製?)が出土した。

B2地区の6基については、SR2～5が調査区北東側にかたまり、SR1は調査区中央SB1内で、SR6はSB7(庇付)内でそれぞれ検出されている。遺物は遺構上部での出土が殆どで、細片のみである。遺構周囲に包含層の状態では古代の遺物が多数出土した。

B4地区の2基は、いずれも庇付掘立柱建物に附随するもので、配石は伴わない(石・土器が遺構上部で散乱している)。

D地区の屋外竈は、調査区の中央よりやや西側で検出された。土坑内部に軽石を半円状に内側に頭を向けて配置している。石内部の土は赤変しており、そこから土師器の坏が2点出土した。報告書では、竈廃棄時の祭祀の痕跡としている。

この他に、荒迫遺跡と同じく、住居に伴った炉(竈)については、浦田遺跡<sup>(8)</sup>・平畑遺跡<sup>(9)</sup>・下田畑遺跡<sup>(10)</sup>・赤坂遺跡<sup>(11)</sup>等で検出されている。これらの遺跡からは、煙道付カマドを2基有した竪穴住居が検出されている。

宇津木遺跡と荒迫遺跡の遺構を比較した場合、同じ古代の石組炉と言っても用途はかなり異なった趣がある。荒迫遺跡の場合、明確に石組みのものはごく僅かで、大半が土坑のみである。又、掘立柱建物に附随する炉が大半で、宇津木遺跡のような建物の全く見られない炉はあまり無い。D地区の屋外竈が宇津木遺跡の石組炉と最も性格に近いように思われる。

### 3. 遺構の年代

次に遺構の年代であるが、SR1・2ともに、出土遺物の全てが甕であるため、時期決定の基準となる坏などが出土していない。しかし、周辺部で出土した土器群と、埋土の堆積状況などが似ている事から、周辺の土器群とほぼ同年代と推測できる。SR2の状況であるが、土坑上面に石が倒壊したような状態で検出され、その石の下及び遺構南西側に土器が10点程散乱していた。その土器については、SR1の遺構内及び付近で出土した11と接合可能であった。SR1の検出状況は、石は倒壊せずに土坑中心部分に頭を寄せた状態で、その上に基準層の黒褐色スコリアが堆積していた。この事から、SR2がまず最初に作られ、何らかの理由により放棄した後、SR1を作ったと思われる。ただ、SR2が古いと想定した場合、11はSR2の時点ですでに使用不可能な状態にあった筈である。なぜ使用不可能な土器を別の場所に持ち込んでいたのか、逆にSR1が古いと仮定した場合でも、この11がネックになる。いずれにしても、非常に近い時間帯で作られたものと思われる。出土遺物が甕である以上、具体的な年代は判明しないが、周囲に出土している土器と同時代であろう。

## 第3節 調査区出土の遺物について

今回の発掘調査では、約1000点の遺物が出土した。その大半が古代に相当する土器であった。ただ、遺構に伴う遺物出土はSR1のみで、殆どは第IV層検出時に出土している。その他の時代の土器については、検出面を徐々に掘削した際に出土した。今回は、主に古代の遺物に焦点を当てて検証したい。

まず器種構成であるが、土師器は坏・高台付椀(通常・墨書・黒色土器A類)・皿(緑釉陶器)・甕・布痕土器である。又、須恵器は、壺1点・甕の小片1点のみである。

今回の発掘調査では、計700点程の土器が出土した。大半が古代と思われる土師器であった。このうち、SR1・2からは土師器が出土したが、全て甕であった。対して、遺構近くで出土した土器は、坏・高台付椀・緑釉陶器・甕・布痕土器である。須恵器は、調査区西隅で出土した壺と甕の胴部片の2点のみである。

まず出土分布を見ると、調査区中央の炭化木群周辺と、SR1周辺・調査区北東部の3箇所で大別される。このうち、調査区北東部は、甕が1点集中して出土した。SR1周辺は、高台付椀・皿・甕が中心である。調査区中央の炭化木群周辺は、坏・甕・布痕土器である。

ここで、現時点で気付いた事を箇条書きにて記すと、

- ・坏は1点のみ、高台付椀も3点のみ。甕の割合が多い。
- ・高台付椀のうちの1点の出土状態について、地面に伏せるように置かれていた。伏せた状態で「合」という墨書が見られる。
- ・緑釉陶器が高台部を上に向けた状態で出土した。しかし、皿の底部片が1点のみ、口縁部などは全く出土しなかった。
- ・布痕土器の細片が多く出土したが、その全てがSR2南側の炭化木群周辺でしか出土しなかった。
- ・広範囲に散らばった土器片がかなりの割合で接合できた。
- ・調査区西端で、須恵器の壺が出土した。遺構は見られず、横に倒木痕があるのみである。

などである。

坏(15)は上記の通り1点のみの出土であった。口縁部径14.8cmに対し底部径7.7cmと、底部径が口縁部径の1/2より大きい事がわかる。榑粉山遺跡から出土した2点の土師器の場合は、口縁部径11.4cmに対し底部径4.9・5.0cmであり、その底部径は口縁部径の1/2よりも1cm近く小さい。これを較べると、宇津木遺跡の坏底部径の大きさがわかる。印象としては薩摩国分寺出土の坏に近い。

高台付椀も特徴的である。3点(16~18)のうち、16は口縁部が直線的に伸び上がるのに対し、17・18は坏下部で膨らみを持って丸く伸び上がるなど、椀形態に近い。又、18はさらに口縁部近くで外反する。16は榑粉山遺跡でも同じような型式が出土しているが、17・18のような型式は出土していない。17・18についても、高台部分の形態に大きな相違が見られる。17は坏部こそやや膨らみを持つが、高台断面は坏部に対し細く仕上げているが、18は非常に手堅い造りである。又、18の方が坏底部が広く造られており、やや中世に近い印象を受ける。

又、17は墨書土器でもある。坏部中程に「合」の墨書がある。これまで県内で出土した墨書土器の中ではこの字は初見である<sup>(12)</sup>。この字は伏せた状態が正位置となっており、伏せる事により意味を成すものと思われる。同じような、伏せた状態が正位置の墨書土器は余り田遺跡等<sup>(13)</sup>で出土している。

これまでの調査と異なるのは、緑釉陶器と須恵器壺の存在である。高原町の遺跡では初見

である。

緑釉陶器は、SR1の近くで、高台を上に向けた状態で出土した。坏部の傾きから皿と推定した。底部切り離し技法はヘラ切りと推定したが、釉薬のため判然としない。高台は貼付で有段輪高台、釉薬は器面全体に及んでおり、焼成に伴う工具痕等は全く見られない。釉薬は非常に濃い緑である。胎土については、通常の緑釉陶器は、黄白の軟質あるいは灰白・灰黒の硬質な須恵質だが、宇津木遺跡の場合は色調は土師質であるが、胎土は非常に緻密である。緑釉陶器の皿は、9世紀前半に出現し、9世紀後半に最盛期を迎えるが10世紀前半になると衰退する<sup>(14)</sup>。

次に周辺地域の類例を集成したところ、下記の遺跡で緑釉陶器が出土していた。

遺跡名	位置	出土状態	器種	高台型式	産地	文献
市位	宮崎市	A区谷1・2	椀・輪花皿	削り出し蛇の目	畿内	15
余り田	宮崎市	II区流路状遺構	椀	—	?	13
平畑	宮崎市	IV・V区IV層	椀・皿	蛇の目・円盤	?	9
枯木ヶ迫	宮崎市	A区III～IV層	皿	削り出し	?	16
小山尻東	清武町	SA1	椀・皿	削り出し蛇の目	?	17
赤坂	清武町	III層	?	—	?	11
的野	高岡町	II包含層	皿	—	洛北・洛西	18
三生江	高岡町	自然流路包含層	椀・皿	輪・蛇の目	洛北・洛西・防長	19
肱穴	都城市	IVd層	皿?	円盤状?	洛北系	20
今房	都城市	—	—	—	洛西系	20
大島島田	都城市	池状遺構	椀・皿	輪・蛇の目 削り出し・円盤	洛西・長門	21
馬渡	都城市	—	—	—	—	22
江内谷	都城市	—	—	—	—	23

以上、大まかではあるが県内の緑釉陶器出土事例を集成した。高台の形態に注目すると、削り出し・円盤・輪・蛇の目の4種あるが、宇津木遺跡のような高台内部に段を持つ輪高台はどこにも見られなかった。今後の資料の充実が望まれる。時期については、どの遺跡もおおよそ9世紀後半としている。

須恵器壺は口縁部は欠損しているものの、それ以外は完存している。底部は貼付で、外内面共に調整はやや粗雑である。口縁部は欠損しているものの、逆「く」字状の口縁と思われる。形態としては近隣の市町村ではこの種の壺は見られなかった。形態としては、南九州で出土する須恵器壺と同類であろう。

時期についてであるが、一部の土器が中世的な要素を含んでいると思われるが、緑釉陶器の年代を基準に考えると、9世紀後半から10世紀代にかけてが妥当ではないだろうか。

#### 第4節 宇津木遺跡の性格について

以上、簡単ではあるが、今回の発掘調査で得た遺構・遺物の分析をした。ここでこれらを



踏まえ、宇津木遺跡の性格を古代と中世に絞って考えてみたい。

まず古代であるが、自然科学分析の成果により、当時はカシ・イスノキ類などの照葉樹林的な環境であったと思われる。榑粉山遺跡や荒迫遺跡等に見られた畠遺構も出土しなかった。当初は畠遺構に伴う集落跡と推定していた。しかし、住居跡もなく、屋外炉が2基あるのみである。出土した土器の器種構成は、坏や椀は少なく、圧倒的に甕が多い。又、墨書土器が伏せた状態で、須恵器壺が倒木痕に置かれたような状態で黒褐色スコリアが堆積していた。又、県内でもまだ出土例が少ない緑釉陶器も出土した。緑釉陶器は細部にまで釉薬を施しており、かなり丁寧な作りである事が窺える。ところが宇津木遺跡は、そのような「高級品」を使うような環境ではない遺跡である。そういう状況から見ると、土器を伏せて置く事や、「合」という文字の意味など、まだまだ解明すべき問題ではあるが、現時点では何らかの祭祀遺跡と考えるが一番妥当なのではないだろうか。

次に中世の場合、検出された遺構は陥し穴遺構及び用途不明土坑である。自然科学分析の成果により、以前あった照葉樹林的な環境は噴火などの影響により減少し、ススキやクスノキ科等の植物があるのみである。中世の陥し穴の場合、狩猟の為というより、集落・耕地の防御という性格の方が強くなっている<sup>(24)</sup>。しかし、宇津木遺跡の場合、榑粉山遺跡も同様だが、陥し穴に類する集落は全く見つからなかった。発掘調査現場にも幾度か鹿が現れた事があるような山間部なので、このケースについては狩猟用と考えたい。

## 第4節 各火山灰の降下年代について

前述のように各遺構についての時期等を考察したが、いずれも年代不明の火山灰が絡んでいるため、明確な時期には言及できないのが現状である。そこで、宇津木遺跡で確認された各火山灰について考察する。

### 1. 霧島大谷4～6テフラ(高原スコリア)

まず、高原スコリアの年代であるが、これまでは、文献などから推定した結果、延暦7年(788)に降下したものとされていたが、立山遺跡・大谷遺跡・荒迫遺跡等の調査によって、高原スコリアよりも下層で9世紀後半から10世紀前半にかけての土師器や須恵器が出土する事が判明した。このうち、荒迫遺跡の調査成果から、高原スコリアの降下時期については、天永3年(1112)・仁和2年(1157)・寿永2年(1183)の複数回降下と推定された<sup>(3)</sup>。しかし資料不足は否めず、現在のところは10世紀から13世紀にかけて複数回降下したというところに落ち着いている。又、宮崎市の前田遺跡<sup>(25)</sup>では、文明3年(1471)降下と推定される桜島火山灰が高原スコリアの上層にある事からも、10世紀代から13世紀代という年代は妥当であろう。

今回も、高原スコリア直下面で樹根のような炭化物が検出されたが、年代測定を実施したところ、西暦1010年という年代が与えられた。しかし、前回の榑粉山遺跡でIV層の畝状遺構面で検出された炭化物は西暦1000年であった。単純に考えれば、III層は10年ほどで形成された事になる。又、荒迫遺跡での推定年代も考えると、非常に早い時期の分析結果が出た事になる。

一方、各神社に残された古文書を見ると、おしなべて文暦元年(1234)に壊滅的な被害を受けたと記している。古文書の殆どは江戸時代に作成されたもので真偽のほどは定かではないが、文暦元年の大噴火が各社寺の共通認識として持っていたようである。

次に、高原スコリアの噴出源であるが、高千穂峰の西方にある御鉢である。御鉢は、古代から近世初頭にかけて霧島火山群の中で最も活発に活動した火山である。『三国名勝図會』卷之三十三「曾於郡之一」によると、高千穂峰を矛峰(あるいは東峯・本嶽)と呼称していたのに対し、御鉢は西峯と呼ばれていた。又、活発に噴火を繰り返していた事から火常峯とも呼ばれていた。この二山を総称して高千穂と呼称していたようである。

御鉢は約25,000年前から噴火活動を始め(片添スコリア)、古代・中世を中心に活発に活動を繰り返した。『三国名勝図會』では、近世に至るまでの噴火を全て御鉢としているが、実際は新燃岳も混ざっていたようである。

## 2. 霧島大谷1～3テフラ

霧島大谷1～3テフラについてであるが、この火山灰に関しては、高原スコリアのように広範囲で確認されているわけではなく、ほぼ高原町内の山側でのみしか確認されないため、高原町内で実施された発掘調査の成果しか使えないという制約がある。

今回の調査では、IV層の検出面に炭化物群が見られた。年代測定を実施したところ、550年という年代が得られた。周囲にもそれと同時期と思われる土器が出土している事や炭化木の上にスコリアが直接堆積していなかった事を考えた場合、この炭化木群は古墳時代6世紀半ば頃に炭化し、霧島大谷第1テフラ降下まで残存していたと思われる。

前回調査した榑粉山遺跡でも、B1区のトレンチ内において、土壌分析及びⅢE b層に含まれていた炭化木の分析を実施したところ、西暦1045・1090・1120・1140・1155年という幅広い年代が得られた。又、H区では、ⅢE b層直下で確認された炭化木の分析を実施したところ、西暦1000年という年代が得られた。前述の高原スコリアでの分析結果と大きく食い違いを見せている。今後の良好な資料の出土を期待するしかない。

## 3. 霧島山噴火にかかる文献

次に、古代から中世(江戸時代以前)にかけての霧島山の噴火(その他の災害も含む)について触れた文献を記載する。近世になると、リアルタイムの文献が登場するが、古代から中世にかけての場合、噴火についてリアルタイムに触れている記述は殆ど無く、主に霧島山周辺に位置する社寺の由緒書が中心である。これまでの噴火にかかる年代観は、文献の出所があまり明らかでないので、そういった伝承の類も含めた文献の集成を、現時点でできる限り試みた。

### (1) 『続日本紀』「延暦七年七月己酉」条<sup>(26)</sup>

大宰府言、去(延暦七年)三月四日戌時、當大隅國曾於郡曾乃峯上、火炎大熾、響如雷動、及亥時、火光稍止唯見黒烟、然後雨沙、峯下五六里、沙石委積可二尺、其色黒焉、

### (2) 『三国名勝図會』卷野三十三「大隅國曾於郡曾於郡之一」<sup>(27)</sup>

#### 西峯發火

此峯所謂火常峰にて、古來火を發すること頻繁なり、其事傳紀、及び當邑西御在所霧島神社、及び小林霧島山中央神社等の舊記に見えたり、続紀 桓武帝、延暦七年、秋七月、己酉、太宰府言、去三月四日、戌時、當大隅國曾於郡曾之峯上、火炎大熾、響如雷動、及亥時、火光稍止、唯見黒煙、然後雨沙、峯下五六里、沙石委積可二丈、其色黒

焉、此峯發火の事蹟、國史に見えたるは、蓋是を始とす、其社記に所見は、鳥羽帝、天永三年、壬辰二月三日より起れり、其後、四條帝文暦元年十二月廿八日の發火、甚盛にして祠宇皆焼盡すとあり、此後久しく熄て後奈良帝、天文二十三年より、弘治元年に至りて燃ゆ、又正親町帝、永祿九年、九月九日、又火を發して、人多く焚死す、天正四年より、同六年に至て、又燃ゆ後陽成帝、慶長三年より、五年に至り、又燃ゆ、(後略)

(3) 『三国名勝図會』卷野三十三「大隅國曾於郡曾於郡之二」(27)

西御在所霧島六所権現社

田口村霧島山西面の半腹にあり、社西南に向ふ、(中略)、性空は天台宗の徒なり、故に別當寺も台宗にて、性空より第二十一代住持道恵に至て、凡二百八十年、台宗相承せしが、文暦元年、甲午、十二月廿八日、山上又火を發して、神社・寺院及び什寶・文書等悉く焼失す、其後二百五十年許の間は、神社・寺院共に廢して、唯假宮あり、(後略)

(4) 『三国名勝図會』卷野五十四「日向國諸縣郡小林」(28)

霧島山中央六所権現宮

細野村雛守嶽の東面五分にあり、(中略)、當寺別當寺も其所にありて、瀬多尾寺と號し、又奥院とも唱へしとなり、奥院と唱うも、亦四方門神社の別當寺に對しいへるとぞ、天永三年壬辰二月三日、霧島山上に火發し火常峰、神社寺院焼亡す、此時は即其地に舊の如く神社寺院を重建あり、文暦元年十二月廿八日、火常峰に火大に發して、神社等又焼亡し、砂石降埋む、先是矛峰の邊、水泉湧出せしに、是に至て水泉甚乏しく、山上の居住を得ず、故に半里許山下に隔れる、(後略)

(5) 『三国名勝図會』卷野五十六「日向國諸縣郡高原」(28)

狹野大権現社

蒲牟田村、狹野にあり、(中略)、社記曰、文暦元年十二月廿八日、霧島山大火、當社、並に別當寺、焼亡に及ぶ、於是當社、及び別當寺を、同郡高城邑、東霧島勅詔院に遷す、慶長十七年寺社共に舊地に復る、(後略)

霧島山華林寺東光坊錫杖院

蒲牟田村、東御在所兩所権現社の左にあり、(中略)、天永三年壬辰二月三日・文暦元年甲午十二月廿八日、霧島山火起りて、寺廟共に焼亡し、當寺廢すること二百五十年なりしに、圓室公の時、文明十八年丙午の歲に至り、廟宇を改造し、(後略)

(6) 『三国名勝図會』卷野五十八「日向國諸縣郡都城之一」(28)

霧島山大曼陀羅院西生寺

梅北村益貫にあり、(中略)、當寺は小松内府平重盛の開基なり、重盛嘗て重病に染む、一夜夢らく、西國の靈山、霧島嶽の下に淨土あり、其地に寺を建べしと、因て重盛祈願を凝されければ、其病頓に癒えゆ、於是大橋中將を當國に遣して、霧島山の東麓、佐野に寺を建立して、霧島山西生寺と號し、(中略)、其後住持尋譽上人が時、一夜神童來り告て曰、三日を歴て霧島山に火起り、寺院回祿に罹るべし、速に三里の外に退けと、於是僧侶當寺に本尊、及び鎮守山王等を奉じて、南方今の地梅北に移る、果して霧島山に火起り、殿堂焼崩す、實に仁安二年なり、(後略)

(7) 『三侯院記』 「有勅定院之由緒書」 (29)

一 東霧島大権現

(中略)又傳當社當社者大波社は陰神也、龍女在口名霧嶋絶頂之鉾東也、在陰神故曰妻高知穂峰瓊ニ杵尊勅ヲ受、天神始此峰降、有靈區建立、神詞ヲ奉崇瓊々杵尊及開咲耶姫尊、東霧嶋六社権現是也、當寺與西御在所於兩所者、性空之化跡多、**文暦元年甲午十二月二十八日**神火起、山中社院灰塵、庄内一戰以來絶天台宗、為真言宗、

(8) 『日本最初霧嶋山六社大権現御神名並由緒拔書』 (30)

(前略)

一 人皇八十六代四條院之御宇**文暦元年**ニ當山ニ神火有リ、神殿並寺舎悉ク焼失其ノ節御神躰ヲ長尾山麓ニ移シ奉リ、今以テ當社東霧嶋ノ故名ヲ呼テ、彼ノ故跡ヲ傳ヘ東霧嶋ト云フ也、(後略)

(9) 『霧嶋山佛華林寺狭野世譜』 (31)

(前略)**文暦元年十二月二十八日**鉾之峯從火ニ震シ裂ニ石熱砂ニ伽藍ヲ没ス。

又**徳治二年十一月**襲峯ヲホイニ鳴動シ大波ノ池水、同時騒動シ大音響ヲ出ス。參詣ノ道俗等鳴動ヲ怯レテ峯ヨリ逃ケント欲ス、然ル所ニ一人進ミ出テ當社之先達堯光坊カ肩ニ手ヲ懸テ御託宣有リト云云。

(10) 『薩隅日地理纂考』 「十七之卷 大隅國」 (32)

○高千穂峯

(前略)此山炎上ノアラマシヲ続紀**延暦七年**秋七月己酉太宰府言去三月四日戌ノ時當大隅國曾於郡曾之峯上火炎大熾響如雷動及亥時火光稍止唯見黒煙然後雨沙峯下五六里沙石積可二尺其色黒焉ト見エ社傳ニハ六條天皇**仁安二年**ヲ始トス(一説ニ鳥羽天皇**天永三年壬辰二月三日**トス)其後四條天皇ノ**文暦元年**大キニ炎テ祠宇皆焼ヌルヨシ社記ニ見エタリ其後久シク熄テ後奈良天皇ノ**天文二十三年**ヨリ又火發リテ**明和九年**マテ二百三十年ノ間ニ燃シ事凡十余度ナリ(後略)

○霧島神社

(前略)今内陣ニ厨子六基アリテ四基ハ瓊々杵尊ヨリ伊波禮彦尊マテヲ一ト柱ツ、齋キ祭リニ墓ハ國常立命ヨリ以下ノ數座會祭ナリカクテ社傳ニ後村上天ノ御世山上ヨリ田口村ニ遷座アリテ二百八十余年ヲ歴テ**文暦元年甲午十二月二十八日**霧島山火登リ神社寺院及ヒ宝物悉ク焼亡シ二百三十余年仮宮ナリシヲ文明十六年甲辰島津陸奥守忠昌島津家十一代社殿及ヒ寺院ヲ造営スカクテ**宝永二年乙酉十二月十五日**山上又燃テ神社寺院焼亡ス(後略)

○松瀬神社

社記曰**文暦元年十二月廿八日**霧島山神火ノ時霧島神社焼失ス時ニ神輿ト不断火不断火トハ神代ヨリ焚続キタル火ナリトヲ搔負テ災ヲ避ケ此所ニ行宮ヲ建テ齋キ祭ル事二百三十余年ニシテ文明十六年旧地ニ還御アリテ行宮ノ跡ニ當社ヲ建立セルヨシ見ユ(後略)

(11) 『薩隅日地理纂考』 「二十五之卷 日向國」 (32)

霧島岑神社 奉仕一座 瓊々杵尊

(前略)社傳曰上古高千穂山ノ絶頂ナル東嶽俗ニイフ矛峰ナリト火常峰トノ間ノ瀬戸尾ニ瀬戸尾

トハ双方ノ峯ノ間ノ凹ナル所ヲイヘルナリ鎮座アリシヲ鳥羽天皇天永三年壬辰二月三日マタ六條天皇仁安二年丁亥山上大キニ燃テ神社其災ニ罹ルトイヘトモ神像恙ナク宮殿造営アリテ猶山上ニ鎮座アリシヲソレヨリ百二十三年ヲ経テ四條天皇ノ文暦元年十二月廿八日ノ燃ニ又神社焼亡ス此時モ神像恙ナシトイヘトモ用水涸シニ依リ此以前ハ神社ノ傍ニ靈泉有テ天之井ト唱ヘシトツ瀬戸尾ヨリ乾方十八町余山下霧島王子ト唱フル末社ノホトリニ遷座アリ(後略)

(12)『薩隅日地理纂考』「二十六之巻 日向國」(32)

○狭野神社

狭野ハ地名ナリ社傳曰當社ハ始神武天皇御降誕ノ地ニ鎮座アリシヲ元暦元年甲午十二月廿八日霧島山大キニ燃ヘ神社寺院悉ク焼亡シテ神輿同郡東霧島神社ニ災ヲ避給ヒ神人社僧是ニ從ヒ年久シク東霧島ト同殿ナリシヲ(後略)

※「元暦」は「文暦」の誤植か。

(13)『甕藩名勝考』「大隅 五」(33)

○塩土傳曰、霧島山上建靈矛、神代旧物也、通證曰、此乃天孫所自從之矛也、(中略)、通證曰、靈矛長八尺許也、此其鋒ヲ併ていふならん、今其鋒ハ折テ幹ノミ立てリ、其長六尺、圍一尺許、鋒刃近所、長鼻大眼の面像を左右に起し成り、其鋒は文禄元年山上炎たりし時、燉折しを移奉れりとそ、今山の東南三里許の山足に安置して、荒嶽権現と齋ひ祀る、(後略)

○西號火常峯、属曾於郡、即二上之一峯也、火常炎、後世終陷凹、今俗呼其火坑称御鉢、(中略)、統紀桓武帝延暦七年秋七月己酉、太宰府言、去三月四日戌時、當大隅國曾於郡曾之峯上、火炎大熾響如雷動、及亥時火光稍止、唯見黒煙、然後雨沙峯下五六里、沙石委積可二尺、其色黒焉、○今按、凡霧島西峯即火常峯、炎上の事統紀所載、國史に見えたるの始なるへし、其社傳に記す所ハ、仁安二年是年六條天皇丁亥歳也、より起れり、後又文暦元年十二月廿八日の炎より大なるハなく、是時祠宇皆焼盡すと見えたり、是四條天皇甲午歳にて、按に、加茂長明方丈記に、元暦二年の比、大になみふる事侍りき、其さまよのつねならず、(中略)、この後久しく熄て、天文廿三年より弘治元年に至り又炎、天文廿四年即改元弘治、是歳後奈良帝乙卯ニテ、加賀ノ國白山亦炎たり、永禄九年九月九日、又火を發し人多く焚死す、是歳正親町帝丙寅にて天下大乱、天正四年より同六年に至りまた炎、天正四年、正親町帝丙子歳也、是歳鎮西大乱なり、慶長三年より五年に至り炎、三年ハ後陽成帝戊戌也、是歳豊太閤薨、後五年關ヶ原合戦、同十八年より翌年まで炎、十八年は後水尾帝辛丑、是歳十九年に諸國大地震、又元和三年より翌年に至る、(後略)

(14)『甕藩名勝考』「日向 八」(33)

○狭野神社今言狭野権現、亦佐野ト書ケリ、即此処ノ地名ニテ、俗ニ佐野原トイフ、

(前略)、社傳曰、四條天皇文暦元年甲午十二月廿八日、霧島山大炎、社傳記ニ、山上炎ノ事ヲ皆神火ト記セリ、當初ノ謬ニヨレリ、祠宇并焼失ニ及フ、此時神輿ヲ奉シテ、同郡高城郷東霧島ニ遷シ奉リ、(後略)

○霧島ノ岑厠ノ社僧寺ヲ錫杖密院トイフ、旧號東光坊、相傳、文暦元年、霧島峯大ニ炎テ、祠宇災ニ罹ル、後 先君忠昌公重建シ玉フ、(後略)

(15)『薩藩旧記雜録』「前編 2-1799」(34)

○「見于兼親傳」

一永正三年丙寅、忠昌主欲建鐘樓於霧島山華林寺、有有司之命、八月廿六日、賜兼親書、二十七日、獻書拜命、霜月十五日功成、勒銘置華鯨、蓋霧島人皇六十二代村上天皇天曆三年、橘善根之子性空上人奉勅命、於當山來祈誓、于時現六觀音、自尔日月昌及三千餘坊、歷二百八十六年、文暦元年十二月廿八日、炎燒於神火、又歷二百五十一年、文明十六年甲辰、蜜宗兼慶法師依國家命再興之、永正三年丙寅、太守忠昌公別尊崇之、霜月十五日、鬼神華鯨一口矣、考之國家二字不知所謂、或曰人之實名、或曰指太守有義、何尚文明十六年、則當忠昌主二十二歲、考之於兼親、自文明十三年至同十七年間陷于忠廉之輩、故無有公命之理、其間二十三年、忠昌主知兼親勞於造營、賜書勞之、不詳果在何年、後人正之幸甚、

現在のところ集成できたのは以上の15点である。これら引用文献をそれぞれの成立年代順に並べると、

- (1) 『続日本後紀』・・・貞観11年(869)
- (7) 『三俣院記』・・・江戸時代
- (9) 『霧嶋山佛華林寺狭野世譜』・・・享保18年(1733)
- (13)～(14) 『甕藩名勝考』・・・寛政7年(1795)
- (8) 『日本最初霧嶋山六社大権現御神名並由緒抜書』・・・寛政12年(1800)
- (2)～(6) 『三国名勝図會』・・・天保4年(1833)
- (10)～(12) 『薩隅日地理纂考』・・・明治4年(1872)
- (15) 『薩藩旧記雜録』・・・文政年間(1818～1830)以後

である。このうち、『三国名勝図會』は『甕藩名勝考』の影響を大きく受けており、その記述は上記引用でもわかるように類似点が多い。『三俣院記』は江戸時代の成立であるが、所載記事は中世が主体である。上記引用の「有勅定院之由緒書」は年不詳ではあるが、中世に属するものではないだろうか。『薩藩旧記雜録』は江戸時代後期から編纂が始まるが、現在失われている史料も掲載されているので、その史料価値は高い。上記の内容は成立時期が不明ながらも他のどの文献にも書かれていないので、比較的古い時期に位置付けられるか。

次に、上記の書物に触れられている霧島山噴火の記述を年代順に整理すると、

- ①延暦7年3月4日(788)・・・(1)(2)(10)(13)
- ②天永3年2月3日(1112)・・・(2)(4)(5)(10)(11)
- ③仁安2年(1167)・・・(6)(10)(13)
- ④文暦元年12月28日(1234)・・・(2)(3)(4)(5)(7)(8)(10)(11)(12)(13)(14)(15)
- ⑤徳治2年(1307)・・・(9)
- ⑥天文23～弘治元年(1554～55)・・・(2)(10)(13)
- ⑦永禄9年9月9日(1566)・・・(2)(13)
- ⑧天正4～6年(1576～78)・・・(2)(13)
- ⑨文禄元年(1592)・・・(13)
- ⑩慶長3～5年(1598～1600)・・・(2)(13)
- ⑪慶長18～19年(1613～14)・・・(13)
- ⑫元和3～4年(1617～18)・・・(13)
- ⑬宝永2年12月15日(1705)・・・(10)

と、13の年代に分類できる。このうち、比較的記述の多い年代は①②④である。①につい



ては、その記述は全て『続日本後紀』に拠って書かれている。その中でも圧倒的に記述が多いのが④である。ほぼ、どの文献にも必ず記載されている。ただ、その全てが近世以降に作られた社記が中心であり、どの文献が伝承の原点かは判明しなかった。しかし、この記述の多さから、近世期における霧島山周辺(特に東南部)の社寺では、文暦元年の大噴火とそれに伴う社寺壊滅という伝承を共通認識として保有していたと思われる。

狭野地区では、楯粉山遺跡に続き、2度目の調査となる。宇津木遺跡の場合は、試掘調査当初はさほど遺物が出土しておらず、遺跡としてそれほど多くの遺構・遺物が出土するとは思っていなかった。ところが実際は遺物の殆ど無い所を試掘調査していた事がわかり、試掘調査の場所を選定する上での良い経験となった。

又、陥し穴遺構の難しさを痛感したのも今回の調査によってであった。狭野地区では、その後同様の遺構が掘削の途中で見られたという話が度々聞かれた。しかし、遺構の立地そのものは自然地形であるため、遺物が発見されない、もしくは陥し穴以前に生活の痕跡がない場合は全く見逃している事になる。今回の宇津木遺跡や前回の楯粉山遺跡で発見された陥し穴は、その下層に遺構・遺物が見られたからこそ発見されたのであって、もし無ければ全く発見されなかった事になるし、事前の試掘調査でもまず検出される事はないので、前回と今回の調査で陥し穴が検出できた事は、非常に幸運と言うしかない。しかし、遺構からデータを満足に引き出す事ができなかったのが非常に残念である。

なお、発掘調査から各資料の収集・報告書作成に至るまで、多くの方からのご助言・ご協力を賜りました。簡単ではありますが、感謝申し上げます。

栗畑光博 重留康宏 菅付和樹 塚本敏夫 永山修一 東憲章 福田泰典 堀田孝博  
柳田宏一 柳田晴子(敬称略・50音順)

#### 【参考文献】

- (1)松尾有年 2004「宮崎県のおとし穴状遺構について」『九州に縄文時代のおとし穴状遺構』九州縄文研究会
- (2)大塚康宏 2003「楯粉山遺跡～古代遺物・遺構編～」『高原町文化財調査報告書』第10集 65～66頁 高原町教委
- (3)和田裡啓・久木田浩子 1998「荒迫遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第11集
- (4)宮崎県埋蔵文化財センターの南正覚雅士氏のご教示による。
- (5)谷口武範 他 1999「中ノ原遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第17集
- (6)太川裕晴 2003「上野原遺跡」『東郷町文化財調査報告書』第6集 東郷町教委
- (7)菅付和樹・谷口武範 1991「天神河内第1遺跡」 宮崎県教育委員会
- (8)谷口武範 1985「浦田遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教委
- (9)北郷泰道・菅付和樹 1985「平畑遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教委
- (10)北郷泰道・日高孝治 1985「下田畑遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第3集 宮崎県教委
- (11)面高哲郎 1985「赤坂遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第3集 宮崎県教委
- (12)柴田博子・中野和浩・東憲章 「日向国出土の墨書土器」『宮崎県史 通史編 古代2』 宮崎県
- (13)松林豊樹 1997「余り田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第1集
- (14)高橋照彦 1995「3. 緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 真陽社
- (15)東憲章・久木田浩子・橋本英俊 1998「市位遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第10集
- (16)高橋浩子 2002「枯木ヶ迫遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第55集

- (17)長津宗重・近藤協 1985「小山尻東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第3集 宮崎県教委
- (18)廣田晶子 2001「的野遺跡」『高岡町埋蔵文化財調査報告書』第20集 高岡町教委
- (19)島田正浩 2001「三生江遺跡」『高岡町埋蔵文化財調査報告書』第21集 高岡町教委
- (20)横山哲英 2000「横市地区遺跡群－肱穴遺跡(1)－」『都城市文化財調査報告書』第50集 都城市教委
- (21)谷口武範 2000「大島島田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第28集
- (22)柴畑光博 他 2001「横市地区遺跡群－馬渡遺跡(第2次調査)－」『都城市文化財調査報告書』第55集 都城市教委
- (23)柴畑光博 他 2002「横市地区遺跡群－江内谷遺跡－」『都城市文化財調査報告書』第58集 都城市教委
- (24)佐藤宏之 2004「日本列島の陥し穴猟」『九州に縄文時代のおとし穴状遺構』九州縄文研究会
- (25)東憲章 1998「前田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第9集
- (26)宮崎県史編纂委員会編 1991『宮崎県史 史料編 古代』 宮崎県
- (27)原口虎雄監修 1982『三国名勝図會』第3巻 図書出版新潮社
- (28)原口虎雄監修 1982『三国名勝図會』第4巻 図書出版新潮社
- (29)宮崎県史編纂委員会編 1994『宮崎県史 史料編 中世2』 宮崎県
- (30)町内岩元家文書より(未発表史料)
- (31)宮崎県史編纂委員会編 1994『宮崎県史 別編 神話・伝承資料』 宮崎県
- (32)原口虎雄他校訂 1971『薩隅日地理纂考』 鹿児島県地方史学会
- (33)鹿児島県維新史料編纂所編 1982『鹿児島県史料 薩藩名勝考』 鹿児島県
- (34)鹿児島県維新史料編纂所編 1980『鹿児島県史料 旧記雑録 前編2』 鹿児島県

